

川柳塔

平成十八年五月一日刊（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九四八号



No. 948

五月号

日川協加盟

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアプリル及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口1/6頁 二、〇〇〇円

1/6頁 三、〇〇〇円

★団体 次（氏名・住所・電話番号など掲載）の四種といたします。

①1/3頁 六、〇〇〇円 ③2/3頁 一二、〇〇〇円

②半頁 九、〇〇〇円 ④一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 5月23日

〒545-0005 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル 202号室

TEL 06-6629-6914

川柳塔社

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) **6771-4861**(代)



座右の句

人恋し人煩わし波の音

私の句

幸せを盛る菜箸が弾んでる

(菜)

澤 裕子

川柳塔 五月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「下津の薫風」

■巻頭言 夏の思い出

拒否できない日本

河内 天笑 ……(1)

川柳塔(同人吟)

田 中正坊 ……(2)

川柳塔の川柳讃歌 (17)

河内 天笑 ……(4)

自選集

木津川 計 ……(52)

水煙抄

(53)

愛染帖

板尾 岳人選 ……(57)

俳風柳多留——一篇研究 9

新家 完司選 ……(80)

檸檬抄「ほんのり」

(84)

「鯉」

仁部四郎・藤田泰子共選 ……(86)

一路集「お茶」

高野 宵草選 ……(88)

「麗らか」

蘭田 猷香選 ……(88)

武本 碧選 ……(89)

拒否できない日本

田 中正坊

「これから数年後の日本に何が起きているかを知りたいと思った時、必読の文献がある。アメリカ政府が毎年、日本政府に突きつけてくる『年次改革要望書』で、産業分野ごとに規制緩和や構造改革等の要求事項が書き並べられている。」

一九九三年の宮沢・クリントン会談における政府間合意に基づき、翌九四年に最初の要望書が提示された。個別産業分野として、農業、自動車、建築材料、流通、エネルギー、金融、投資、弁護士業、医療、情報通信等、分野横断的テーマとしては、行政改革、審議会行政、情報公開、独占禁止法と公正取引委員会、入札制度や業界慣行、民事訴訟制度等が網羅され、産業、経済、行政、司法に至るまで、すべてを対象に列挙している。

日本の将来にとってこれほど重要な意味を持つ、アメリカ政府の公式文書であるこの要望書の全文が、これまで日本のマス・メディアで公表されたことがない。

すこし長くなったが、関岡英之著「拒否できない日本——アメリカの日本改造が進んでいる」(文春新書)から引用した。最近、私はこの本

初歩教室「そうだ」……………三宅保州…(90)

秀句鑑賞 同人吟……………川端一步…(92)

水煙抄……………中居善信…(94)

■エッセー 元氣なうちの辞世川柳……………井上桂作…(95)

川柳とクラシック音楽……………藤井則彦…(96)

久保まさおさんを偲んで……………奥田みつ子…(97)

野村太茂津相談役を悼む……………牛尾緑良・福本英子…(98)

四月本社句会……………(100)

各地柳壇(佳句地十選／近藤豊子)……………(104)

柳界展望……………(119)

五月各地句会案内……………(120)

■編集後記(ひとこと／水野黒兎)……………楓楽・希久子…(122)

座右の句

雨風が地球の皺を彫りつづけ

私の句

骨太の改革案の骨ささる

(天笑)

岩崎公誠

を読み、日頃の疑問が「ああ、そうだったのか」と思い当り、多くの人に事の真実を知ってほしい気持ちにかられた。正確を期するために、もうすこし引用を続ける。

「それでは私たちは、どうすれば知ることが出来るのだろうか。何のことはない。この要望書が日本語に翻訳されて在日アメリカ大使館のホームページで公開され、バック・ナンバーもすべて閲覧することが出来る。

そして二〇〇一年の小泉・ブッシュ会談では、この要望書が「規制改革および競争政策イニシアティブ」と名前が変わり、通商問題と別次元の、もつと国家の本質にかかわる分野に焦点が移って活用されている」

規制緩和、市場原理主義、自己責任、官から民へ、小さな政府など、小泉政権が呪文のように唱える政策やスローガンは、彼らのオリジナルでも何でもなく、すべてアメリカ政府が彼らの国益のために要求し、実現を迫るメカニズムそのものであることが鮮明になった。全く人をバカにした話ではないか。

紙数が尽きたが、もう一冊、書名だけを紹介したい。藤原正彦著「国家の品格」(新潮新書)で、著者は新田次郎、藤原ていの次男である数学者。「拒否できない日本」と全く別の問題を論じながら、基本的な考え方で一致するものがあるの付け加えたい。



河内天笑選

弘前市 高橋 岳水

無病より一病がいい自己管理

実像がボロボロ欠けてゆく老化

置き薬北には長い長い冬

診診の指が愁訴を嗅ぎ当てる

診察を受けていのちを意識する

いずれ死ぬことを忘れて欲を積む

三田市 北野 哲男

他府県の車が消えて梅も散り

とんど焼き消防団が火付け役

宝くじ当る準備が出来てます

三猿のロボットに職奪われる

マンションのオーナーかつての篤農家

告知せぬことを患者からぼろり

箕面市 出口 セツ子

冒険も恋も楽しむロスタイム

子が元氣だけで幸福だと感謝

孫五人早婚の友遠く見え

淋しいのだらう金しか信じない

おせっかいも泣き虫なのもヒトゲノム

国境も肌の違いもない夕陽

香芝市 大内 朝子

人生というステージのと真ん中

ブラウスが素肌に絡む初夏が好き

咲いて散るひとの命のあつけなく

またいつか逢う約束の赤い糸

宇宙からみればわたしの悩みなど

心とこころキャッチボールの出来る友

鳥取市 加藤 茶人

オクターブ上げた弁解だから嘘

結婚は男離婚は女告げ

逃げ口は言葉足らずというふくみ

歯車の狂い疑う事はかり

善人にされて人間死んでいく

外は雨内はどしゃ降り妻の愚痴

岸和田市 原

さよ子

落書帳孫のでっかい夢がある
天満宮梅の香りと絵馬に酔う
伺つて思い違いが解けてくる
悲しげにベルが鳴つてゐる赤字線
嫁までが老眼鏡をかけはじめ
割勘へみんなおつりのいる紙幣

米子市 政岡 日枝子

これからを描くソフトな設計図
純な芽でただひたすらに天を向く
だれもかもヒロインになる旅日記
芽は今も音をたてては伸びている
ジンクスに嵌つて軽く笑えない
音たてて雪とけたのにまだ寝てる

松江市 川本 畔

新調同士ぱったり会つて照れました
よく見れば温い顔して猫柳
裏通り貴方が匂う沈丁花
自己主張激しいまでに貝母の芽
よく動く玉虫色の口がある
そこかしこ歌を拾っている陽気

東大阪市 谷口 義

人は人 私は私 猫は猫
込み入った話を猫も聞いている
猫抱いて誰の指図も受けません

縁あつてニヒルな猫を飼っている
世をしのぶ飯の姿の猫である
何ごととも起こらなかつた花の下

藤井寺市 太田 扶美代

春うららパッチワークに似た野原
なだめ役あとはベットに任せよう
三寒四温もう一度だけ騙される
しまつておこう怪獣の絵と電車の絵
憎しみが脳を一巡して消えた
大笑いしてる失敗したんだネ

鳥取市 奥谷 彩子

向い風選つて翔び立つ子の巣立ち
白寿のしわに仏の笑顔宿らせる
いい話ふるいにかけて拾う耳
古希の坂車線変更して登る
子に見せる背中だしっかりと磨く
子離れの切り取り線は強く押す

高槻市 江原 秀夫

筆太の書に持ち味がにじみ出る
掘つては埋め埋めては掘つた溝の数
ひとことを呑んでかごめの輪で踊る
激論にしっかりと逃げ道開けておく
年ごとにけむり濃くなる玉手箱
妻の愚痴グラスに溶けて差し向い

堺市 齋藤 さくら

金がないだけの苦労は楽なもの
悩みある言うて御飯はてんこ盛り

嫁いだら急に節電言いだした

断らぬ人に役員頼んでる

やれやれと親を送った友が臥せ

駅からは前よりうしろ気に掛かり

羽曳野市 安芸田 泰子

しぶしぶで乗った誘いにのめりこむ

逃げ道を作っておいて切る啖阿

鬼の首取ったつもりが墓穴掘る

両方へ味方のような顔をする

自我捨てて甘え上手に生きて行く

急ぎ足気付かぬふりですれ違ふ

松江市 松本 知恵子

ほろ苦い旬に五感が冴えてくる

芽を出した鉢に急かされ春始動

野の地蔵刻の動きを見てござる

みどり兎のあくびをひよいと移される

わたくしも木の芽起こしの風に乗る

ひと波瀾ありそうあの人動く

吹田市 山本 希久子

全身を触角にする風みどり

あいまいな記憶と正確な写真

遮断機は降りたままなり古稀を過ぎ

女ばかりの気楽さと難しさ

脇役が似合う生き方変えられず

夢の字を書く鉛筆を削つとく

大阪市 井丸 昌紀

とりあえず矛盾そのまま受け入れる

乾杯のちよつと一言泡も消え

蒔いた種芽が出るものと限らない

四字熟語ちりばめ真意伝わらず

お守りのように携帯ぶら下げる

太陽にいいじめられてる二日酔い

豊中市 藤井 則彦

塀越しに聞こえる声は三世代

予備役に出番をくれぬ山の神

ガン告知擦り寄る猫も沈んでる

後半生に節目をつけたアデランス

礼状に使うなと言うボールペン

溜め息が震える妻の木の芽どき

大阪市 大川 桃花

大阪弁で喋ったところにある本音

さつきここに無かった物がちゃんとある

法律をきっちり守り小市民

選んだら振り返らない分岐点

新聞に包んでくれた無農薬

四月馬鹿いつもと違う嘘をつく

唐津市 市丸晴翠

平均寿命までは生きてる予定表

予定表地球の寿命気にかかる

娘が嫁ぎ孫を抱いてる予定表

花の種子袋と違う色で咲く

足腰が頼りで立てた旅プラン

唐津市 井上勝視

お互いに出がらしながら丸く棲み

出がらしが昔むかしを笑い合う

金婚も出がらし同士恙なし

出がらしも味と濃さあり隠居部屋

出がらしでお茶粥にした時もある

唐津市 山口高明

献金は受けないはずの助成金

バツイチの友に主人を横取られ

永久の欠番つけた草野球

神さまの誓い忘れる三年目

辞書買うといえばすぐ出すお義母さん

唐津市 宗水笑

老巡查榮進無視の粋な処置

合格祝い見せておきたい太っ腹

寄せ鍋にみんな持つてる一二病

あつけらちゃんと値切り上手なおバタリアン

老夫婦多弁無用のおーいお茶

唐津市 坂本蜂朗

人数の足らぬ時だけなる仲間

独身のハンサムめぐる仲間割れ

仲間受けいつも気になる自己嫌悪

仲間から外され本の虫になる

ちゃん付けで呼ばれメダカの仲間入り

唐津市 久保正剣

功名にはやり偽のメールを振りかざす

目の蠅が追えぬ子供共の飢餓地獄

灰皿が癌センターに置いてある

灰皿がない病院の待合所

アルプスの山裏返るホームラン

唐津市 樋口輝夫

手土産のワケがだんだん見えてくる

胃袋に薬七粒せめぎあう

水着ショー男の視線揺れている

プライドをかなぐり捨てた美味い蟹

自尊心まあだちよっぴり残してる

熊本県 岩切康子

心配へ医者も迷って薬くれ

すべき事為して日記で締めくくる

お誘いは実らず情報聞くばかり

六十代締め契約する保険

帰り際塵を拾って子ら集う

熊本市 高野宵草

スタートの頃思ひ出す店仕舞
炒り豆は入れ歯の方で噛んでおく
小走りに横断歩道での善意
必要で邪魔な入れ歯を今朝も嵌め
やりくりを委せた妻の足となる

熊本市 永田俊子

調子よく相槌打った胃が痛い
老人を舐めて脅しの葉書来る
傷ついた小鳥待ってる母の森
軽い罪捨てよとのたり春の海
なりゆきに任す私の時刻表

東かがわ市 池内かおり

迷うほど着て行く服があるらしい
ほんのりとシャボンの匂う友が好き
がむしやらに走り疲れた日を畳む
留守番も出来ない犬と老いすすむ
露天風呂これ見よがしにおばあちゃん

東かがわ市 原賢

騙されて明日が少し見えてくる
躓いて転んで人間とり戻す
されいごと言って長生きしています
その先の見えない時も酒を飲む
ありがたいは声囁れるまで妻に言う

東かがわ市 伊勢八重子

薬湯と夜景は旅のかくし味
泣き真似もたまには武器にして生きる
さりげなく付かず離れぬ両隣
鶯の初音にコース奪われる
気心の知れた隣が火種抱き

東かがわ市 神保坊太郎

人生は打ち揚げ花火のようなもの
啓蟄に浮気の虫も動き出す
呆けないぞお前は紛れなく俺だ
スバルタでしぶとさだけが身に残り
泥棒に拉致されたことある論吉

東かがわ市 成重放任

合併で町議が市議と偉く見え
日課にはないへば用が増えてゆき
寝不足をオリンピックのせいにする
あれこれと思ひ出残す旅の路地
一粒の小石に永久歯をやられ

東かがわ市 清川玲子

木枯しになると張り切る鍋奉行
豪快にしばし戦うカニの鍋
酔っても迷わず降りて帰る駅
秀才で通した友の紙オムツ
団らんが消えてしまった空マンション

東かがわ市 川崎 ひかり

高知県 小澤 幸泉

日本に美味しいものあり茶漬け飯
石垣の中で春待つ息づかい

宇宙から見れば地球はどんな色
皆様の情けで出来た笑いジワ
偶然でしようか貴方に会えたのは

高知県 北川 竹萌

神の召す日も近づくと思やかに

誠実一路己が命のある限り

朝の散歩鳩と雀に取りまかれ

川辺では鯉水鳥も寄ってくる

花壇隅百合芽がまるく新芽出す

高知県 小川 てるみ

波の音遠く近くに竜安寺

笛吹けど届かぬ距離にいる絆

千羽鶴飛ばせば虹になるだろう

横着者の主婦に仕立てる無洗米

目立たない顔で案外うけている

高知県 赤川 菊野

肉親の愛は地球より重い

目標があるから翼たためない

夕茜女一途なものを抱く

人生ってこんなものさと独り言

子ばなれの美学動物から学ぶ

すきずきと孤独をきぎむ古時計

幾山河越えて許せる古い二人

先達もつまるところは金が必要

定年の先もこの橋渡るだけ

父母の波越えて明日の船を出す

松山市 高橋 宏臣

スタートで脚の長さを見抜かれる

取り敢えず過去に蓋して昼寝する

ぶつきらばうだけど花壇をいっぱい

はしゃいでるさくらさくらの夜道かな

陽は西に明日を約束する真紅

松山市 古手川 光

少子化の行き着く先に無縁仏

百二歳の横に二十歳の計報欄

産んだ母喜んでるかテロリスト

孫曾孫玄孫と絶えること勿れ

冷房費要らぬ地方は暖房費

松山市 宮尾 みのり

そっくりさんとして人生を狂わされ

トラウマになる爪跡が胸にある

一匹の蟻と遊んでいる無聊

三代前までは分っているルーツ

鑑定団に出すと古文書箔が落ち

大洲市 中居善信

桶の輪が緩む油断をしたもんだ
ほどほどに楔は軽く打っている
チェーンソーの油も切れた夕茜
憧れて住むとこでなし野良仕事
反対をせねば核に地球が荒らされる

西予市 黒田茂代

椅子取りゲームしている枝の雀たち
盆栽に夢を預けて精を出す
酸欠の今朝は十回目の欠伸
現世では話せぬことの二つ三つ
せずに済む殺生ならばやめとこう

砂川市 大橋政良

お喋りが過ぎて脱線してしまう
続編のペンが暗転してしまう
街角で春を売ってる風船屋
砂かけて去つてく夢のない男
裏話聞きたくてスイッチを入れる

弘前市 高瀬霜石

捨てる人拾う人あり粗大ゴミ
体重微増沸騰点が近くなる
ケータイに切られちまった糸電話
一隅を照らしロースク燃え尽きる
フレンチトースト宿六のいない朝

弘前市 福士慕情

豪雪が尾を引いている梅桜
冬を越しホッと一息つくベツド
解禁日曆に大きな丸がある
喉元を通る水まで微温くなる
洗車して春風少し遠出する

弘前市 櫻庭順風

屋根より高く驚いている雪の嵩
どか雪に億の金まで捨てる莫迦
渋滞にいらいらさせるダンブカー
億の金捨てる順番じつと待つ
除雪溝の中で流れを直す莫迦

弘前市 今愁女

控除なし税増す寒い申告す
さくら餅葉二片残し春を食む
うぐいす餅懷紙のきな粉もてあます
エープリルフルで済まぬ入院す
連翹の黄の燦々と燦々と

弘前市 岡本花匠

法名を受けても我執しやしやり出る
耕して五体さわやか至福汗
鯉のほりきずなの風に泳ぎ出す
夜ざくらにカイロの出番ありました
こぬか雨慈愛を注ぐ花の母

弘前市 相馬 銀波

輪の中で手を貸す人にある情け
後もどりされた手酌に湧く未練
振り向いてくれる笑顔に滲む愛
孤立したままで農夫に古希の坂
壁厚く自問自答を繰り返す

弘前市 須郷 井蛙

禁煙をかけた自販機置く医院
美しい貧者の一灯赤い羽根
折詰は持つて帰らぬ偉い人
倒産のセールと言えば客が来る
カルチャーにはめられに行く赤い靴

弘前市 宮崎 ヒサ子

義理固く咲き続けてるシクラメン
足踏み好き春は真っ直ぐやって来ぬ
お岩木山くつきり冬は去つたと告げている
春風は冬の辛さを消して吹く
雪の下でもう雑草が伸びている

黒石市 相馬 一花

究極の猫撫で声で懐柔す
誠実を自堕落にする娑婆の風
宇宙からつまはじかれる地球号
筆跡で判るあんたの下心
ナビゲーター持っているのか渡り鳥

十和田市 阿部 進

男心をくすぐる様な女です
古里の民話駅弁に詰めてある
居心地がいらいし鬼が出て行かぬ
道草をすればいい知恵湧いてくる
もう一度元気な妻の顔見たい

平川市 小寺 花峯

聴診器にわかるもんかとコップ酒
宵越しの銭をはたいた爪楊枝
挙手だけはいつも賛成飲み仲間
したたかに生きる皺の手鋏を持つ
雪だけを待っているのは猫柳

さいたま市 八田 敏

啓蟄に虫には負けぬ花作り
鉢花の衝動買いはあの世まで
公道に花壇十四の無理と夢
介護十年浮かばぬ妻の立姿
わが命電波時計に見守られ

さいたま市 星野 育子

夢いっぱい詰めたカバンを置き忘れ
孫自慢相槌うたぬことにする
先生と言われ正直ムツとする
中締めをしてから急に目立つヤツ
地味だけど私の好きな花菜畑

日高市 根岸 方子

ケイタイは持たず会話は野仏と
思い出のスーツにあらら虫の穴
ああ黄砂洗濯物を部屋に入れ
着色の小エビへ主婦の目が光る
チヨコ食べて思考回路に活を入れ

佐倉市 岡井 やすお

五輪では日本すんなり女系国
安いからとライバル国の物買う愚
量的緩和ゼロバーのうちに借り
人口は減ったが悪い奴が増え
みどりの日で飛び石埋まり五日旅

東京都 岸野 あやめ

お金では買えないものを積んどこう
ドクターも患者も老いた四十年
寺詣り帰りの寿司が旨かった
デパートで財布の軽さ気の重さ
リハビリの散歩して来て貰う風邪

東京都 清原悦子

不揃いに育ってみんな味がある
何事も言わぬが花とひとり言
メダルには届かぬ拍手鳴り響き
焦る事なくなったのは歳のせい
真っ白い日記に夢を弾ませる

東京都 小川 賀世子

野も山も春を唄うよドレミファソ
バスツアー河津桜はまだ三分
大阪弁で今日も東京泳いでる
恋しいものの一つにけつねうどん
大阪弁さんまの好きな友に受け

八王子市 播本 充子

売れ筋は季節を駆けのお弁当
真っ先に逃げるお金と暇がない
夢語る生年月日など忘れ
人相の通りお金に困らない
勝ちたくて走るフォームは気にしない

武蔵野市 亀井 円女

完璧な娘のヘマを待っている
少女になろう死ぬまで夢を見たいから
重患に笑顔が見えたつらい嘘
うれしい日かけっ放しのジャズロック
年はとつても明日に架けたい橋がある

横浜市 小野 句多留

孤独死じゃない自然死だこの柔和
あの頃の乳児が電話に出る月日
一時間ドラマは酔いの子守唄
日韓の市井に根づく和の集い
独房の読書で身体清めてる

横浜市 菊地政勝

愛知県 早川盛夫

勝ち運に恵まれぬまま生きてゐる
嬉しくて抱擁せずにいられない
頑なに曲げることない思い込み
曖昧な態度で僕は日本人
弱点を掴んでいてもさりげなく

富山市 島ひかる

朝日さす右脳やんわり動きだす
山笑う前頭葉に良いくすり
待っていたようにほころぶ山桜
ふる里の山はいつでも裏切らぬ
心地良い風とたわむる登山靴

可児市 板山まみ子

こうなればつきあうだけよ花粉症
主婦業の有給休暇バスポート
シチリアの花見は香るアーモンド
家のこと忘れて笑う旅の空
黒マグロ焼いて食べたか十字軍

静岡県 蘭田獏杳

名曲の余韻に揺れる大講堂
ほろ酔いの女の酒は美しい
核心に触れてしまった酒の席
居酒屋のこぼれ話に拾うネタ
ホームレス酒に溺れた顛末記

考えることなどないが腕を組み
知らぬ振り知らない振りで擦れ違い
パンとコーヒの朝もう五十年
急用へ街の信号多過ぎる
友達に話して妻に言えぬこと

滋賀県 中宗明

故郷の地酒囲んで亡父偲ぶ
ちっぽけなポツケ一杯夢詰める
ウォーキングまさか自分が転ぶとは
ヘソクリが暴かれあちこち余罪でる
デリケート過ぎて言葉がつづかない

京都市 高島啓子

手のかかる鬼スローフードがいいと言う
電子音冷蔵庫まで指図する
蛸焼きの舟と大阪で流れ
ガッツポーズ少々鼻についてきた
厭なことみんな忘れている新芽

京都市 都倉求芽

移り住む樹のない窓も春の風
番号だけで表札もない棲家
自責の念京の町家をつつ消し
風呂だけは民宿なみと妻機嫌
落ち着けば花見に來いと東山

長岡京市 山田 葉子

新聞が煽り忘れてゆく事件
鈍行で夜明けの富士を抱きしめる
控えめに介護の苦勞語られる
偽物の輝きいつも騙される
いつのまにか妻のカラーに染められる

亀岡市 井上 森生

難しい数式よりも思いやり（映画「博士の愛した数式」）
簡単に不思議とうまく解けていく（「人生は数式で考えようまくいく」）
余生より仕切り直してニューライフ
世の中に雑用なんぞ在るものか
工作が好きで財布にミニハサミ

大阪市 神夏磯 典子

三寒四温春の匂いへ目を覚ます
雛さまもい顔になる白酒よ
本当の笑顔を見せた花の下
あまりにもつくして私馬鹿になる
一本のバラの匂いが狂わせる

大阪市 前 たもつ

遅い梅早い桜も大自然
元氣な首見せていただく無料パス
忍耐力赤いポストに負けている
紀伊国育ち木地師の血が流れ
教会でとても落ち着く日曜日

大阪市 板東 倫子

待ち人は来ぬと知ってる花時計
ロボットが内緒ばなしを聞いている
パソコンが個人情報知りたがる
大勢で行って成果は金ひとつ
結構なくらしとわかる体脂肪

大阪市 津守 柳伸

超のつくアホで笑顔を武器にする
塩水に浮かぶりンゴの姦しい
リハビリを兼ねたプールの後遺症
体力に合わせて丸い舟を漕ぐ
プログラム作り安心して眠る

大阪市 津守 なぎさ

傷心をいたわる梅が咲き揃う
無事下校するまで仕事手につかず
おみくじの吉を信じたのが不覚
立ち話やつと終らすダンブカー
食べあるきライトアップの寺めぐり

大阪市 松尾 柳右子

降下する機内しずかに手を合わせ
雨の日は紙飛行機を部屋中に
旅支度雨にひこうき覚悟する
機内にて高所恐怖症そと見ない
ぜんざいの餅が好きなのあなたより

大阪市 川久保 睦子

大阪市 近藤 正

食べ残す孫へ戦争の話する
カラオケで歌えば嫌な事忘れ
手品師が枯木に花を咲かせてる
バラ色の人生ですと書く日記
古希間近女でいたい紅をさす

大阪市 清水 絹子

肺活量医師の保証にくたばれぬ
禁酒禁煙もつばら励むも家族愛
老人の許可証のごと無料パス
頼み事ましてや老母の低い腰
嫁の無理トラブルさけていい返事

大阪市 鶴田 遠野

折り合いはつけるが種火残しとく
お誘いにはとかれてた休肝日
不渡りの手形ばかり子に貰う
極上の愛は神にも隠しとく
出来ちゃった婚神に丸投げする誓詞

大阪市 奥村 五月

鼠捕る猫は仲間に笑われる
卒業式ニートの数がまた増える
使わない非常袋に価値がある
花粉症しばらく散歩休みます
年金の茶碗に残る梅の種

清盛を祀る社も基地はノー
そつとそつと帰り支度の自衛隊
闇の中神戸飛び立つ一番機
携帯も化粧もできる専用車
背負う荷を少し減らして長く生き

大阪市 古今堂 蕉子

顔のしわ増え脳のしわ消えていく
神様と仲良し頼みごと増える
つきすぎた肉がアキレス腱になる
スピードも量も増したぞ物忘れ
人間の仲間だ猿も花粉症

大阪市 川端 一步

春ですなハートになって花いかだ
恋すれば風の音さえいい調べ
諸行無常義姉は認知で甥は癌
妻のまた何ぞあったか模様替え
九条に灯りが見えた基地の声

大阪市 川原 章久

縄のれんの前でブレーキすぐかかる
おふくろの味はお金で買えまへん
江戸っ子が道たずねてる戎橋
コマーシャル保険保険のエトセトラ
お喋りの鳥が来てます春の庭

大阪市 西川 更紗

春風にわたしの五感揺り起こす
無意識に姑の口から軍歌もれ
お供えの餅が転んだ足の甲
子育てにぎくしゃくしだす嫁姑
きれいな言並べる人の二枚舌

大阪市 升成 好

丸呑みにした忠告が胃に凭れ
肚の中とうに読んでる妻の笑み
手づくりに戻ってはやるお豆腐屋
アナログの脳がてこずるキーボード
アカペラの温もりで聴くわらべ唄

大阪市 岩崎 公誠

パソコンがやつと使えて定年日
二億円当った人は雲隠れ
生きたとは泣く日騒ぐ日輝やく日
妙に効く鹿や狸の鍋料理
猫缶を孫がおやつに食べたがる

大阪市 伊藤 博仁

祈祷料納め一喝されてきた
快慶と聞いて菩薩が光りだす
かき分けてつるした絵馬に日が当る
善男用と書いたトイレもかわらない
かわせみが耐えたカメラにダイビング

大阪市 星野 きらり

祝日の右へ倣えと旗仕舞う
もの忘れ脳へ注油を怠らず
飼主の世間ばなしへ急かす犬
娘等も皆それぞれ匂う梅花祭
目立たない心のおしゃれ忘れずに

大阪市 榎本 舞夢

アトリエで裸婦に見とれて叱られる
ああ地震火種を切って棒立ちに
言えなくて心でごめん言っておく
願い事一番星が領いた
することが沢山あつて死ねません

大阪市 熊代 菜月

ウツ詰めた風船空にあがれない
ペットにも礼服させる披露宴
二人連れ傘が一本邪魔になり
永年の悲願叶った鯉のぼり
テレビ局引張りだこの金メダル

大阪市 榎本 日の出

恋文も督促状もあるポスト
手抜きして今日のリズムを整える
わたしにもプチ恋愛はありました
現実が許していない天下り
時々は無理もしてます嬉しくて

大阪市 中村 れんげ

英才で器量良い娘で嫁がない
人間という天敵に病む地球
プライドがすり切れている影法師
人生の旅の緞帳おりはじめ
ことわりもなく身長が減るわたし

大阪市 中村 叡子

海外に未練の弗が残ってる
アナログの時代が終るまた背伸び
今一度一豊の妻欲しい世に
老人力また塩じいの二番手が
誠実で寡黙な野茂の大ファン

大阪市 小糸 昭子

心地良い風が露天で遊んでる
外海に張り出している露天風呂
大軒昼寝た猫は夜は外
去る友へ明るい別れ捧げよう
欲張りが過ぎてイメージ破裂する

大阪市 津村 志華子

難聴の母が内証を知っている
ご無沙汰の許しを乞うて墓洗う
裏表ない母さんのお人好し
ケイタイにわたしの身柄監視され
如才ない浪速女の低い腰

大阪市 渡部 さと美

出がけさつき帰りはにぶる万歩計
のんびりと君も旅する春の雲
名残り雪お別れだから美しい
体重計薄着をしても変わらない
似合わない春だばあばもジープンや

大阪市 町田 達子

久方の陽気につられ梅林へ
道端の梅の木皆が匂い嗅ぎ
休日の人出に花も困り顔
太閤さんを偲ぶさすがの大阪城
憂さ捨てる何とも今日の青い空

大阪市 小谷 集一

肝心なこと忘れてる記憶力
やる気ない人ほど口がよく動き
旧姓で呼び若返るクラス会
墓だけがある故郷の花便り
先こして指図されると腹が立ち

大阪市 岡本 久峰

鬼の首取った側にもある負い目
尻馬に乗ってワイワイ竹中よ
火の気のないところに煙立ちません
多すぎて代議士諸公欠伸する
小泉の甘さのさばる星条旗

大阪市 小泉 ひさ乃

池田市 栗田 久子

原点に戻れば見えてきた明日
雛仕舞う日に散り初めた梅の花
大切にしているつもりうるさがり
魂をひとつひとつに入れた技
世を逆に一度は見たいイナバウアー

大阪市 安達 はじめ

げんこつも少しほころぶ葱坊主
春の陽にわが情熱はどっち向く
葉桜の下でお出逢いしませんか
省みて心の青さふと恥じる
母という名がそうさせる子の嫉

和泉市 横山 捷也

花一輪抱いて女を演じてる
傘寿から白寿を狙う意気がある
ライバルと本音を探る酒を酌む
レンズから覗いた時は皆美人
出世した他人の噂ばかり聞く

大阪市 福岡 末吉

女房がバタバタ朝が走りだす
ため息をついて長生きしています
美しい女のウソだ許そうか
夫留守茶碗一つで済ます膳
同期会真ん中に居る出世頭

和泉市 西岡 洛醉

静寂の薨に刻の流る音
貪りて知識を老いの糧とする
愚痴三昧然れども妻の背に感謝
ほん少し斜めから見る子の心
襟足をくるんで旨し梅見酒

大阪市 野田 栄呼

群集に紛れて居るかもテロリスト
食欲も進んで老妻春化粧
六畳間大の男は広く寝る
心肺の不音を抱いて七十路を
一桁の昭和今宵も生き抜いて

泉佐野市 山本 蛙城

スタジオの温度疑う夏姿
専用のドレスもできておめでた婚
二階家が欲しかったのは若い頃
認知症字では賢い人とする
欠伸でる飴で覚まして持つハンドル

大根がヒト科へ見せるド根性
百均へ九十九円店の意地
居眠りの上手さロダンのポーズして
売り上手動物園もイナバウアー
葬費まで言うて保険のお節介

茨木市 藤井正雄

交野市 森本弘風

通帳の裏に沈めてある野望
余り物詰めて名を変え福袋
くに訛りこけしと話すワンルーム
結局は妻の好みに操られ
頭では理解し腹は煮え返る

大阪狭山市 矢野 梓

振り払う勇氣に負ける袖の下
不自由を知らない親に嫉まれ
後押しの味方の風に油断する
里帰りごとに思い出遠くなり
等分に視線集めてケーキ切る

交野市 田岡 九好

地面しか見ずに猪走り出し
冬の底氷雨降る日の午後三時
税務署が年に一回手紙くれ
本日のお詫びは以上五件です
コウノトリ正夢だったご懐妊

交野市 山川 日出子

人間に時計無限を教えてる
今年から防犯ベルのランドセル
ロボットを孫と夢中に造る祖父
怒りん坊ココロを変えて平常心
あちこちが満員の札スケート場

志賀直哉見守るように路郎の碑（尾道旅行）
文学の小径と言うがきつい坂
尾道の坂こんなところ住まん
排ガスにむせてしゃがんだ美美子像
吊り橋が萌える新芽で焼かれそう

河内長野市 坂上 淳司

フィギュアのスピンの老母目を回し
似てるけどバンザイイナバウアーじゃない
医者飲み屋目的別の友が居る
花よりも団子いや待てやはり酒
良性の見立てあらもう飲んでいる

河内長野市 山岡 富美子

老眼鏡かけて見えだすうらおもて
閑古鳥キャンパスで鳴く未来絵図
視聴率物見高いがすぐ飽きる
バランスが崩れるまでは美女でした
豊かさを追って行き着く事件事故

河内長野市 井上 喜醉

年金の力で精一杯生きる
温室の中で鉢植え安楽死
独り立ちやと大人の顔になる
頼まれたカメラ覗けばいい夫婦
筋書が変わり行く手に低気圧

河内長野市 村上直樹

岸和田市 雪本珠子

古希の坂晴れて無役の身の軽さ
熟年の車輪さすぎす空回り

出るところへ出ようと妻に迫られる

息抜きに心ぶらという渦の中

手料理に惚れてわが家のレストラン

河内長野市 水谷正子

優勝旗津軽海峡越えたのに

世が世なら銜え煙草ももてたのに

一周忌未練断ち切る花吹雪（大西文次様）

マイルドな人と言われてそれビミョウ

銀行でやさしくされて鬱になる

河内長野市 植村喜代

暗い日本に花を咲かせた金メダル

村主さん素晴しいのに悔しいわね

ドライブになってしまった店探し

雪国は大変老いてなぞおれぬ

娘や孫についつい気前よくなつて

岸和田市 井伊東吉

さあ五月散髪少し刈り上げる

メーデーにちよっぴり明るさ戻つて

夫婦して追い込みかける遍路旅

先不安補強少ないタイガース

九月以降仲良くなるか日中韓

春なのに心に寒いすき間風
誘惑の風に気持が揺れ動く
髪切れど愛した日々は戻らない
未練酒夢の続きを探してる
雑草の生命力に魅せられる

岸和田市 林力子

衣食住足りて挨拶出来ぬ子等

おはようと大声で呼ぶ今日の幸

なにわ人赤字言いつつ儲けてる

母さんの帯も着物も食べました

トンネルを抜けて活気の出た職場

岸和田市 岩佐ダン吉

ブルドッグ神の妙技を見せられる

骨つぽい男にたんと注いでやる

元社長今日も手酌の老人会

遺憾だと言うてお詫びになりますか

九条が危ない声を高くする

岸和田市 土橋房枝

愛されて愛することを忘れてた

愛犬よ慕ってくれてありがとう

少子化へ産婆の資格活かしたい

スマイルで伺い立てる孫恐い

絵馬に見るはみ出しそうな願いごと

岸和田市 森 元 ふみよ

優しそう選んだ嫁が今は鬼女

老人会役員選で貝の口

独り居の相手に欲しいシャベリロボ

通夜の席超響盤の着メロが

記憶力アップ相手にクイズ漬け

堺市 加島 由一

団塊の世代ドカ弁卵焼き

母さんはさんざ貶して助け舟

耳をすますと天から母の子守歌

辛抱する君にいいことある五月

人生に勝ち負けはない生き残り

堺市 村上 玄也

足腰が弱り布団に蹴つまずく

青い目も真似る乱れた日本語

お通じの有無尋ねあう老夫婦

ボカをして陥っている自己嫌悪

割り勘負け分かって行く義理の席

堺市 和田 つづや

リストラに納得出来ぬ愛社心

万歳をしてから誤報告げられる

足腰の立つうち止めぬ酒たばこ

硝子器は憂いを秘めてそうで好き

筍はまだ捨ててない季節感

堺市 志田 千代

一張羅ついに今年も着ずじまい

母の料理サプリメントはいりません

聴診器胸も背中もみてくれる

滴を持し今日もベンチを温める

パスポートただはぐれないはぐれない

堺市 近藤 豊子

すて猫の眼をとじたまま鳴く公園

仔猫さえ虎によく似た目鼻だち

二月の雨ニャーオとなけばギャーオギャー

保育室床に折り紙たまる雨

春の風糸につるした鶴ゆれる

堺市 柿花 和夫

春一番がぐいと私の背中押す

だれも居ない春溜息ついてみた

天守閣春一番を見下ろして

菜の花に黄蝶まぎれて春となる

旅立ちのテープが舞って島の春

堺市 神原 文

あじさいの芽春一番を知っている

菜の花や野球のボール弾み出し

春うららあなた焼酎わたしシェリー

春夕焼け今日に劣らぬあした欲し

戌年で犬に似てくる食いしん坊

堺市山本半銭

堺市國見蘭香

梅は蓄うぐいす餅は店先に
季節毎に父の野菜をこころ待ち
守るべき家族があつて灯を点す
春が来てちっちゃいお靴ひかつてる
賑やかな愛の語らい寺の鳩

堺市矢倉五月

堺市西村りつえ

気合では風邪追い出せぬ歳と知る
同じ日の誘い三つにあみだくじ
甘党がやさしい人とは限らない
別腹に裁かれている血糖値
病室へ大きな文字のカレンダー

堺市奥時雄

堺市源田八千代

ケータイに使われているように見え
昼時のビールは少し気がひける
草原で羽ばたきたかろブロイラー
忠告をせずにおれない苦労性
勢いに押され忠告引つ込める

堺市石堂潤子

四條畷市吉岡修

あちこちを繕いながら恙なく
嘘つけぬ口が後悔ばかりする
足で椅子引き寄せ妻の長電話
知らないでおれば良かった事なりし
極楽も地獄もあるのですこの世

深呼吸山の女に脱皮する
啓蟄を境に子等も燥ぎだし
悪口を肴に女酒を呑み
花菜播き待つていました三分咲き
沈んでる人に癒しの縄のれん

第一週張り切りすぎた鯉のぼり
第二週締切り迫る川柳塔
第三週金も力も半ば過ぎ
第四週ストレスたまる鍋の底
第五週手抜きで元氣取り戻し

わらべ歌口遊び行く春の野辺
山桜母在りし日の畑づくり
その節は言われ頭をめぐらせる
百歳の媼盛大に見送られ
天寿全う肖りたいと皆の衆

二の糸の甘い調べに油断した
嘘言わぬなどと大きい嘘を言う
陣笠でチャンス掴めぬまま定年
呆け防ぐ薬ときめて芋焼酎
ボール蹴るパフォーマン스가派手すぎる

吹田市 瀬戸 まさよ

潔し椿ボトリとさようなら

ご臨終ホツとして泣く自己嫌悪

カラオケに行きます妻のいい機嫌

ジグザグの道も今ではありがとう

何十年桜に恋をする私

吹田市 木下 敏子

これからのふたりの時間考える
気をつけてゆつくり行けと辻地蔵

春野菜和えて俵せてんこ盛り

人なみに歩いていける靴を買う

老いてなお旅のコースを夢に見る

吹田市 早川 棲世

入院で楽まで相撲全部見る(告知 5句)

勝ってくるぞと手術へパンツはきかえる

ケータイは手術の礼の相場聞く

俺よけて告知の鉢が妻を刺す

看護師が昨夜走って一人死ぬ

吹田市 穴吹 尚士

人生の愚痴が溜った喉仏

頭から痴漢扱いして睨む

愛なんてとうに蒸発してしまい

前例を探す役所の虫めがね

遺言をまた書き換える気の迷い

吹田市 太田 昭

女という重さで妻は化粧する

晩成の器に今朝も飯を盛る

寝たきりの白寿の母の手を擦る

団塊の世代がつける万歩計

古時計貫禄のある音で鳴り

吹田市 須磨 活恵

危うくて目が離せない鬼がいる

強がついていても心は脆いもの

優柔不断も余してる影法師

エスカレータに流れている春のファッション

赤ちゃんへもう使わない布おしめ

吹田市 大谷 篤子

悪友の手の温もりは裏切れず

魔女からの手紙に心落着かず

たんばの綿毛のような楽道家

紙ふうせん夕焼けをみて勇氣だす

万華鏡夢の国へと誘いこむ

吹田市 岩屋 美明

来年も咲く約束で花吹雪

遠き人青い画帳に閉じたまま

良く弾む友達がいて楽しめる

ドッグカフェいつものひとが来てる頃

鼻歌で妻の財布についてゆく

高石市 浅野 房子

八十路坂プラトニックで好きな人
夢はもうないがあこがれなら少し
自分では人畜無害だと思ふ
胃袋が悲鳴をあげているくすり
身内とて味方と信じないことだ

高槻市 井上 照子

背負うこと覚悟で意見出してみる
誤解から音たて割れる友の仲
しなやかに小指からめたことも夢
子を育て一人で生きる覚悟する
高いビル思えば怖い石の箱

高槻市 指宿 千枝子

私にウインクをして陽が沈む
旅日記一枚の絵に塗り込める
着せ替えが赤児のような父となり
憂うつを晴らしてくれるスニーカー
申告が済んだうどんがうまかった

高槻市 西谷 治三郎

社で課長家へ帰れば部下となる
オンボロの破れパンツが外車乗る
法律の裏ワザ使う大学出
基本法あって教育無い日本
笑顔良しタレント気取りのトリノ戦

高槻市 瀧本 きよし

キッチンに嫁の嘆きが零れてる
奇麗ごと言つても所詮金が勝つ
よくやった不惑の娘ヤヤを産む
前の世のわたし映っている鏡
不眠症夢の入口探してる

高槻市 生田 義一

老いたなあ猪口一杯で上機嫌
おでん鍋湯気の向こうに孫の笑み
発車ベル息も絶えだえゴールイン
知りたがり自分の事もわからずに
金メダル国中皆んな半狂乱

高槻市 執行 稲子

膝頭じゃわじゃわじゃわと文句言う
初対面ベビーはママと見比べる
やっぱりと納得のいく句読点
火星探査車風で長持ちする電池
余裕など無いが甘んじて生きている

高槻市 富田 美義

人間は正義を知ると弱くなり
妥協した握手に嘘を封じ込む
どの道も人が転んだ跡が見え
なにくその拳の中にある未来
話せない事は笑顔で突き返す

高槻市 乙 倉 武 史

豊中市 安 藤 寿美子

藪つつき蛇に噛まれた民主党
万人の眼に審判の依怙蟲眞

食べ残しもつたないが太るもと

金金金世に人情の雲隠れ

郷愁は知らず動物園生まれ

高槻市 左右田 泰 雄

うたた寝を見守るように鳴るラジオ

楚々として気品ただよう薄化粧

想い出の橋のたもとで振り返る

パンの耳下さい犬にやるんです

手袋の片っぱがよく落ちてゐる

高槻市 傍 島 克 治

山門を出れば善女の仮面脱ぐ

マンション住い井戸端会議が懐かしい

自分史の締切り時が来たようだ

答弁に嘘を混じえて議事進む

五月晴にこやかになる鬼瓦

高槻市 佐 甲 昭 二

自分史の謎は誰にも覗かせぬ

相談がもつて腰をあげられぬ

ありふれた幸せでよい初詣で

酔うほどに仮面が邪魔になつてくる

いい出合い貰つて夢を塗りかえる

猫に小判わたしにブランドのバッグ

裏庭で物落ちる音猫の恋

内紛のJAL当分は乗らんとこ

うちの庭猫のトイレじゃありません

床暖房他の部屋へは行けません

豊中市 吉 田 あずき

春一番解かねばならぬ懷手

抜け道を知らず貧乏神に遇う

生命線いっぱい恥がつまつてる

魂を時々緑に染めてやる

当たりはずれいつか採算合うてくる

豊中市 山 門 タ ミ

お浄土も梅香るらん夫の忌よ

話すうち心の灯ついて来た

花便り聞きつつ今朝も結露拭く

鼻寄せて梅の香たんと吸い込んだ

聞かれたら得意で話す唐津です

豊中市 岸 田 知香子

目覚め好し今日の命をいとおしむ

曾孫顔よくぞ見せてくれました

耐えた母年忌合わせた贈り物

出産と巣立ちにむせぶ母涙

それぞれの旅立ち合わす桜花

豊中市 江見見清

丁重にお願いされて予備の人
耳学問喋ったあとが続かない
どうしても妻には負ける黙ってる
愛国心五輪予想を狂わせる
いらいらを一休みさす孫が来る

豊中市 水野黒兎

暖かな風に大地と戯れる
推敲の果ての二枚をボンと綴じ
蹟いて歳のせいではないないない
いのち得て一の湯あたりおぼろ月
曼陀羅湯みんな仏で真っ裸

富田林市 池森子

コンタクトレンズに替えてさあ前へ
わらわらと春の女神は通り過ぎ
桃桜花のレシピで春に酔う
三枚目の絵馬からやつとサクラサク
春は皆豊かな貌で立っている

富田林市 稲川惠勇

てこずった子が一番の親思い
父さんの喉に首輪の傷がある
また眼鏡どこへいったと騒いでる
へそくりが消えたと騒ぎ立てられず
父のゲンコツ痛かった温かった

富田林市 片岡智恵子

公園の桜の枝に春を聞く
合格へ春あたたかいものと知る
上向いて歩けとこぶし空仰ぐ
切り株に生きた新芽がいと嬉しい
ギヤ一段落して登る老いの坂

富田林市 大橋鐘造

お流れを貰ってからのイエスマン
善人の眼鏡の奥に住む魔物
仲良しの近所に鬼が住んでいた
自惚れの鏡に映す自尊心
絶好のチャンス逃がす迷い癖

富田林市 中井アキ

嬉しい日他人に優しくしたくなる
やっぱり私黙ってなんか居られない
あくせくが続いて自分を見失なう
頼られる幸せ何時まで続くやら
花粉症おっとりなんかしてられず

富田林市 中崎深雪

夜桜に時止まれと二人連れ
花の道無口な人もほころびる
車椅子押す手もはしゃぐ花盛り
花のトンネル犬の散歩が進まない
花散れどいのちの緑滴りぬ

羽曳野市 徳山 みつこ

阪南市 森村 美花

春だ春だとイカナゴ匂いたつ

平らな道で転び私に黄信号

僕は散骨などと息子がつぶやいた

毎朝を出発点として歩く

九条も若葉も光れ五月晴れ

羽曳野市 吉川 寿美

大根ふうふう大事にせねば凡な幸

一番の敵はわたしの中のわたし

黄を少し残ししゃきしゃき花菜漬け

沈黙を通すわたしの自己主張

いつまでも帯状疹に泣かされる

羽曳野市 三好 専平

ウツという字を考えた人の鬱

ニンゲンを見るとかならず吠えるイヌ

挨拶をしない大人が監視され

ダンボール集める人の手際よさ

たかる指ない子がボール蹴っている

羽曳野市 酒井 一壺

神様の機嫌はどうか鈴を振る

奥様のきげんを聞いてお邪魔する

着地点変えて機嫌を持ち直す

争ってきげん直しに一人飲む

痒い時すぐ来てくれる妻がいる

告白はしないでそつと秘めておく

カーテンを開けると春が天こ盛り

感動のドラマがくれたいい時間

たっぶりの汗をビールで埋める幸

あれからはたっぶり水を飲んでます

東大阪市 笠井 欣子

執刀の電話待ってる春炬燵

二日酔い忘れて入る縄のれん

進学はこれで最後と弾むのし

義理チョコに八十路の夫照れ笑い

ホワイトデー妻の見立ての品さげて

東大阪市 安永 春

如月の逃げ足早く茜色

ダブルパンチ堪えて歩幅を教えられ

子を想うずばり言うのも母の愛

青嵐吹いてさくらは散り急ぐ

誤魔化しの多い男の足の跡

東大阪市 米田 水昇

早春賦あの日わたしよみがえる

この世見ているケースの雛人形

桃の花大きく見える雛の宵

京の風おきばりやすと友の声

浮世絵は飽かず見つめるロマンあり

東大阪市 北村 賢子

最果ての空にくつきり北斗星(下北半島の旅)

厳寒の吹雪の中の露天風呂

高倉健現われそうな八甲田

怪しげな樹氷ニヨキニヨキ八甲田

荒れ狂う波が雪積む岩洗う

東大阪市 佐々木 満作

我が子より義理の息子がお年玉

良い事があつた時だけ書く日記

絵日記で介護の記録綴ってる

表札の隅にペットの名前添え

どちらかと言えば暢気で照れ屋です

枚方市 安達 忠央

我が娘には門限破り許さない

つきなみにひとさじ妻の隠し味

したたかに不義理重ねて好きに生き

予備校に戻り生活費を稼ぐ

予備の日の居場所明かさぬツアー客

枚方市 海老池 洋

泥つきの野菜のような人が好き

枝豆を見ると飲みたくなるビール

何となく土の匂いのする地玉

少子化の街に外来犬の増え

辻地蔵犬に臭いをつけられる

枚方市 丹後屋 肇

日の丸に目を潤ませる寝たつきり

孫からの舌足らず聞く電話口

艶福の墓が吹雪を浴びている

一気呑み目が据わり出すニューフェイス

水琴窟耳をはじくる竹の筒

枚方市 二宮 山久

妻の留守ちよつと減らしてみのお酒

二次面接ちよつとどきどき六十路坂

ほら春がやって来ました宅急便

求人表じつとながめる六十路坂

そつと手を合わせる再職本決り

枚方市 宮川 珠笑

長生きのために好好爺にならぬ

保険屋が葬儀心配してくれる

用足しにすぐ立ち上がるのは夫

もしもよと妻が離婚の例を言う

ライバルが出るまでサウナ出るものか

枚方市 森 本節子

氷上の華麗な技に時忘れ

日本を一人で背負った静香さん

甘酸っぱい匂い探ればヒヤシンス

スーパードタラの芽見つけ手柄顔

人間より花は正直季がくれば

枚方市 寺川 弘一

藤井寺市 楠 昭子

週末は夜の時計が速過ぎる
外国の砂を運んで来た浅蜷
単身赴任せめて一輪挿しを置く
犬の方では僕の言葉がわかつてる
声をかけない本当の思いやり

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

甘くみた彼女に彼を奪われる
逆らえば雨はわたしに強く降る
拝啓もかしこもなくて逢いたいと
真つすくな氣持進行形の恋
引き立てる役目で終る日であった

藤井寺市 中島 志洋

寄り添うた肩を緑の風が抜け
一応は辞退してとる髪斗袋
才媛もいつか愚妻に恐妻に
頑固者損は承知で意地を張り
香水の匂う美人の嘘に酔う

藤井寺市 高田 美代子

国民の血税で飼う碌で無し
年金がやせて中流保てない
言い訳をするから評価おちていく
魂の抜け殻つつむ羽根布団
太陽と雨のおかげで咲く桜

平凡に生きて向い風当り
十円でなんと望みのかいこと
私の鏡かと思う愚痴を聞く
計算高い人とは少し距離をおく
コツコツと下手でも続く趣味一つ

藤井寺市 鈴木 いさお

健診の結果で酒の量を決め
負けてからあだこうだが多過ぎる
石橋を叩いてチャンス取り逃がす
酒断ちの決意今度で何度目か
自齒十二義齒十二でやがて古希

藤井寺市 若松 雅枝

縁あって貴男と暮した五十年
年の功頑固もふわり丸くなる
路地裏も花が咲いたか賑賑し
不都合な事は聞えぬ振りを
古里がふんわり僕を受けてくれ

寝屋川市 太田 とし子

夕焼け小やけ地蔵待ってる童唄
そのうちに手の鳴る方に来る予感
聞き流すことにも慣れた日向ぼこ
整理整頓それから増えた探し物
ステップもジャンプも消えた通学路

寝屋川市 森

茜

晩学の夢中へ愚痴が消えていた
ドアを押す怯む心を蹴りあげて
勘どころ弁えているふところ手
手鏡にためらっている皺がある
春うらら絵になるポーズ考える

寝屋川市 富山 ルイ子

お人好しまんまと異に嵌められる
輪の中がぎくしゃくしてる輪を抜けた
何もかも信じられなくなってきた
親越える生きる力を身につけよ
草花の優しさ愛に応えてる

寝屋川市 籠島 恵子

墓いらんかエーのような感じでくくる電話
寒いわネエと隣の中学生に
猫ねこと言って帰って行くは婿
イナバウアーわが家にもいた背中の児
進化せぬ妹だからなお難儀

寝屋川市 坂上 高栄

三世代生きた仏のデスマスク
戦友の墓参欠かさぬ律義者
出棺の名残り惜しむか通り雨
情報怖さ世間にばらまいた
ガセネタと言いい切り役者上だった

寝屋川市 平松 かすみ

勿体ないと取っていた物邪魔になり
何回も広げ泣く泣く捨てました
古書売って孫のミシンを買いました
リフォームか建て替えようか天秤に
孫の絵のピカソもどきも宝物

守口市 井上 桂作

絹の道歴史の跡をたどる旅
旅さなか晦日の鐘を白馬寺で
夢だいて知らぬ余生の春を待つ
生きてきた分だけ人は円くなり
許すこと覚えて今は愛いなし

八尾市 生嶋 ますみ

人の和に溶け合う術がむつかしい
誕生のたびに葉が増えてくる
スーパリーの籠から春が零れ出る
ちゃらんぼらんストレスなんか宿らない
デジタル化理解できずに歳を知る

八尾市 宮崎 シマ子

帯きつく締めて自立を考える
仲間のこと言わぬ言えない義理がある
駆けだしたくなる新緑の散歩道
指差しているだろ後ろふりむかぬ
シュークリーム待つ子を駅でおもいだし

八尾市 吉村 一風

忘れたふりしてるとお札言うてくれ

巻き戻し出来る時計のうらやまし

人間の表裏を隠す笑い顔

思いきり泣いて白足袋さつとぬぐ

只酒に恥ずかしながら二日酔い

八尾市 高杉 千歩

戦争を生きて時世に流されず

やりまっせ八十の坂弾む靴

風みどり想い出探し春帽子

赤ピンク仏の好きな花盛り

他所いきの言葉で客を送り出す

八尾市 長谷川 春蘭

お互いの誤解と気づく大笑い

飲むほどに笑い上戸の声上がり

綻びを繕い合っている夫婦

休日の朝寝を三毛に起こされる

散歩道済まし顔して犬の糞

八尾市 村上 ミツ子

ふりあげたこぶし自分におろすしか

情報の浅瀬であつぷあつぷする

水をやるわたしを枯らさないように

定年へ突然妻がさようなら

若人の誓いへ拍手惜しまない

八尾市 山本 宏至

波にのる運もひとつの力です

五十年妻に重ねて母を見る

幸運の知らせ待ってるかゆい耳

雨だれに命をきざむ音を聞く

晩学に息切れ目立つ日が続く

大阪府 初山 隆盛

申告を済ませばつとさくら咲く

古文書を繰って歴史の散歩する

校門を覗くと白い目で見られ

恋の芽にせつせと愛の水をやる

かみそりと言われた友の紙おむつ

大阪府 米澤 俣子

アノデスネ孫の電話は金らしい

蝶々になれぬ少女がへたり込む

老人になる日を知らぬニート族

修業僧のお数珠のようなネックレス

こんなはずなかったのに物忘れ

大阪府 前田 ゆい

厳かに富士に合掌フルムーン

父母捜す満天の星秘境の湯

この集い僕の宝と思う宿

孫たちと思ひ出遺す旅プラン

愛犬はベットホテルでお留守番

大阪府 澤田 和重

雨男傘の用意はしていない
デュエットで歌った時はまだ他人
新札でユキチ結納つれてくる
他人にはついて行かない子に育て
毒舌だが芯の優しい人がいる

大阪府 桑田 ゆきの

回り道土筆摘んでる麗らかに
目と鼻が応え花粉の海へ出る
花に酔いおかげの井戸に顔映す
お喋りで風の匂いを読んでいる
驚に誘われ入るけもの道

神戸市 山口 光久

地に足を着けて歩けと向い風
薄っぺらな辞令に明日を握られる
弟を守る兄貴の肩の幅
悪友がまさかの時に肩を貸す
許されぬ恋に囚われ無重力

神戸市 山口 美穂

内緒よと言われてよけい喋りたい
意地っ張りも頑張りきかぬ古希の坂
健康食品あれもこれもが肥るもと
三寒四温に歩調が合わず風邪をひく
金融緩和わからないので聞くニュース

神戸市 木村 貴代子

ペットでも待っているから早く家路
なぞ解きはCMの後 見そこなう
地震には出さず姉菌に出す公費
レンズ冷徹心のひだを映し出す
あこがれた悠々自適あじけなく

神戸市 田中 章子

攻めに出てガードの甘さ突つかれる
桜守り花の笑顔が恩返し
たっぷりのお湯羊水にいる心地
ゴミ袋ころのゴミも詰めて出す
父さんのもらした本音聞くペット

神戸市 伊勢田 毅

黙とうで始まる古希のクラス会
イラクからイランへブッシュ模索する
妻にバラ一輪そつとホワイトデー
皇室も政治も秋を待っている
吉野家の春遠くなる輸入禁

相生市 中塚 礎石

欠点が少うしあって好きになり
人間を笑っているの昼の月
無職にも人間らしい日曜日
OB会勝ち組の輪と負け組と
へそくりに慌てふためく隠し場所

芦屋市 黒田 能子

風船の割れる音して目が覚める

恰好の悪さ子供に見せておく

カニ食べる顔見せるのはあなただけ

忙しい時はアンパン食べておく

見るだけのつもりやっぱり買ってくる

伊丹市 山崎 君子

はーるよ来い誰かが歌う冬日和

クロッカス可愛く咲いて庭飾る

海便りイカナゴ春を連れてくる

里の庭春待つ花のゴーサイン

お相手は誰 友晴れ晴れとおしゃれして

尼崎市 長浜 美籠

早春の香り小鉢に盛る花菜

カタコトのジャンケンポンを見るベンチ

然りげなく値踏みをされているらしい

種明かしするは閻魔の前だろう

いい機会だからと愚痴の二つ三つ

尼崎市 春城 年代

ほろ苦き春の芽吹きを愛すべし

義理ということば覚えて長女たり

さてもさても世にもめ事の多いこと

認知症よもやと思う昼下り

老いてなお水子の夢を見るはかなし

尼崎市 春城 武庫坊

さくら餅仏も春を待っている

来年の再会約し雛仕舞う

終点不明八十路楽しく二人往く

寒い風吹くと石焼き芋屋来る

歳相応に少し生き方変えようか

尼崎市 軸丸 勝巳

さるすべり諸肌脱いで春を呼ぶ

啓蟄や虫も子供も顔を出す

ゼロ金利上がる頃には残がない

勝組になって貧富の差を見たい

天才と言うが努力は見てくれぬ

尼崎市 林 昭三

優しさは女の子とは限らない

草葺きの屋根に真っ直ぐ育てられ

男でしょう多少の恥はかきなさい

話したら私もですと同病者

仕合せになれるならばの消費税

尼崎市 松下 比ろ志

チューリップ日に日に伸びて春動く

梅咲いてウグイス花の客となる

お世辞とは解ついても頼ゆるむ

同じ昔を待つ者同士のコップ酒

トラファンオープン戦から盛り上る

尼崎市 田 辺 鹿 太

三田市 久保田 千代

死ぬことの次に嫌いな菌の治療
春だなあ猫もわたしも大欠伸

一石を投じて出方待っている
好感度先ず第一は濃厚さ

勝ち負けは二の次にして先ず飲もう
看護婦が看護師になりなじめない
いつもやへうなぎの並を食べに行く

またしても同じ手口にやられてる
浮き沈みあつてまあるい石になり
へそ曲げて部屋にこもった小半日

川西市 西 内 朋 月

西宮市 西 口 いわゑ

スベアキー渡したひとが来てくれず

誰にしよう一つ余ったチョコレート

浮く日沈む日一日は二十四時

せつなくて怖い合格発表日

終電が逃げカプセルへ沈没す

夫婦独楽スムーズばかりとはいかぬ

孤高十年仏壇の灯を守り

葛藤を鎮めてほしく花の前

談合で利権を守る天下り

哀しいのに涙よなぜか出てこない

川西市 米 原 雪 子

西宮市 亀 岡 哲 子

草花が春だ春だと咲き始め

集団登校班長さんが卒業す

散歩道今日も元氣と会釈する

野良猫も飼い猫も好きうちの庭

ウォーキング夫婦で参加羨まし

さくら花時にすみれに憧れる

褒められて嫌な仕事を任される

忘れてた応募当選して春に

糸取りで幼い指と睦み合う

筋力アップさつさと歩く花の下

三田市 堀 正 和

西宮市 山 本 義 子

お日様がニコニコしてる園児の絵
還暦にもうドリנקは効きません

哲学を持たぬ男で身は軽い

高齡医療のひとりですあいすみません

年金のくせに衝動買いもする

いいないいな陽春待つて野の花よ

人生に飽いたか赤子大あくび

モカ啜る昨日の悔いは消えました

西宮市 緒方 美津子

街に活たった一つのランドセル
半袖の遺影の母よ外は雪
狭い庭天を指す木を植えておく
反戦の狼煙つんと芍薬の芽
のし袋亡父のくせ字が捨てられぬ

西宮市 坪井 孝一

鈍刀でも実直それで生きられる
友を選ぶいつも直球だけに
生きるため先ずロボットと仲良しに
わが妻よボクは外では威張ってる
風船をいくら飛ばした甲子園

西宮市 井上 松煙

失敗にもっと励めと雨蛙
物忘れ年の所為にはしたくない
小遣いの僅かな予備が有り難い
沈んでも妻の笑顔に救われる
非常食の賞味期限が過ぎている

西宮市 牧 渕 富喜子

春が来るちよつと手前にある期待
アルバムの整理黙もくする夫
夢聞かれ小学生もお金持ち
注ぎ足そう空の頭を振って見る
限られた時がにわかに惜しくなる

西宮市 門谷 たず子

孫の婚嬉しさ埋める旅靴
人生の波間に浮かぶ吉と凶
押し寄せる波に吞まれまいとして
ゆとりない心に水をゴクと呑む
バランスをくずすとすぐに風邪をひく

西宮市 秋 元 てる

興味しんしん無口な兄と来た娘
よく出来た子供は村を捨てて行く
あこがれを秘めてほっこり埴輪の目
チューリップ誰か号令かけたよに
どの句にも生きた証をひそませる

西宮市 菊 池 トミエ

便利さが近所付き合い消して行く
五臓六腑よじる笑いに飢えている
大らかな笑いも消える国となり
鮮やかな朱が欲しくなり花を買う
路のとう地面いつばい顔を出し

姫路市 古川 奮 水

蛍雪の時代の机テレビ台
私の思索探りに来たお猪口
美女の顔仏に見える花見宴
元禄の武士が守った塩槽
啓蟄を待てず這いだす温暖化

兵庫縣 大谷 幸次郎

檀原市 安土 理恵

赤い実を争う鳥の眼がきつい
薬包紙の真つ赤気になる痛み止め
この薬効かぬと医者に言い難い
ご都合で酒を薬にしてしまふ
春の氣に蓄ふつくら出来上る

奈良市 天正 千梢

小さな幸せだまって笑ろている
八十路坂腹の立たない歳となり
足の裏二足のわらじいやと言う
自転車で行ける範圍は縄張りだ
わびしさのひとつゆれてる縄のれん

奈良市 米田 恭昌

進学をあきらめ自分取り戻す
使い捨てカイロのような半生記
愛憎の狭間で揺れている介護
サバイバル油断も隙も見せぬ友
黙秘権に人の情けが攻めてくる

生駒市 飛永 ふりこ

雪山のはるかはるかに父母の顔
あのそのとじわじわきますもの忘れ
露のとう冬をやんわり脱ぎ捨てて
川の底春がどんだん湧き上がり
へこんだら春の空氣をスニーカー

鬼ごっこ鬼が追われているようだ
すんまへん遊びだったということに
遊びごころありますいつも元氣です
過ちはすべて哀しくいとおしい
いつときの菜の花はしゃぎすぎないか

檀原市 居谷 真理子

お母ちゃん老いを嘆いて下さるな
薄情な人で母を不味そうに
人生のデザートとして老いの恋
一言をケチらないからよくもてる
血のにじむ金を遣えと差し出され

大和郡山市 坊農 柳弘

人脈の末席に居て生き延びる
無花果の身ごもる術を風に問う
独り言ぶつぶつ井の中の蛙
追伸の母の小言に触れて初夏
無の境地四コマ漫画四コマ目

奈良県 渡辺 富子

逃げば追う恋のトリック知るピアス
春のドレスゆるんだ体持て余す
ちぐはぐなふたりを射抜くキューピッド
低俗な笑いを囁す視聴率
こころ持つ口ポットと住む近未来

和歌山市 福本英子

雨男でしたお通夜も葬式も

無愛想だけど診たてはすごかった

底を突きやすい年金春うらら

釘ぼろり服も私も古くなる

取り替えの部品無くても生きている

和歌山市 桜井千秀

寝転んで足でスイッチ切るテレビ

こぼれ落ちて芽吹く根性湧いてくる

無視すれば無視してくれる友が好き

自分らしく生きると他人疎ましい

春はもうすぐ心変わりはその後で

和歌山市 木本朱夏

恵方には金の成る木を植えておく

ひとつずつ予定を消して生きている

母の忌に水仙の香の残る部屋

触れられた順に花屋の花ひらく

捻子ひとつ抜けて男の更年期

和歌山市 玉置当代

笑ったり泣いたり介護二度童子

久々に母と遊んでいる介護

私にも襲いかかった認知症

三寒四温ひよいと顔出す路の臺

ころころとネタ湧いてきて視野無限

和歌山市 喜田准一

やる気ある限り明日へ続く道

愚図つて人へ答はあとにする

時流から少し遅れて生き残る

核心を一般論にすり替える

賛成の挙手は流れに沿うただけ

和歌山市 田中みね

楽々と勝ち得た椅子が反り返る

ラジオから終日もらう知恵袋

心を鬼につれなく帰す保証印

自己陶醉湯船に浮かぶ白い肌

惚れた弱味とことん妻を甘やかす

和歌山市 堀畑靖子

恋歌は昭和昭和のリフレイン

わたくしの夢の墓場にある昭和

展望がひらけた頃の夢だった

あげ底のあなたに気付き手を離す

ミッキーに会いたい孫の旅プラン

和歌山市 福井桂香

ベッドサイドの桃も微笑む春弥生

貝紫の着物一度は着たかった

毎年咲くのに桜花は待ち焦がれ

モンシロチョウこの春風に誘われて

ズキズキと手足が痛む菜種梅雨

和歌山市 榎原公子

和歌山市 山口三千子

何事かと孫の歓声チユリリップ
大根の花平凡が美しい

横糸をしつかり紡ぎ今日がある

総入れ歯これで夫にかみつける

川柳の醍醐味田辺聖子から

和歌山市 楠見章子

水ゴクリ春の時計はよく狂う

幸せをつかむ大きな手だ耳だ

つば広の帽子ななめに春の街

おとことおんな何時しかただの同居人

会いにいく森に小鳥がいるうちに

和歌山市 古久保和子

縫い代にゆとりがあつた母の笑み

大根の穴より母の抜けた穴

母逝つて胸のスイッチ入らない

工場の隅に社長の事務机

化粧ボーチの中はさながら道具箱

和歌山市 武本碧

遅咲きの春がウインクし始める

少年の壮志を守る登下校

百年の暖簾が重い一人っ子

胸割って話せば鬼も蛇も出ない

てのひらで踊る気はないうちの鬼

エゴイズム毒舌阿修羅背を押す

スーパリーの袋で足りるごみの量

鉢花が毎年届く誕生日

娘にケイタイ持たされ操作のみこめず

花吹雪顔もほんのり桜色

和歌山市 上地登美代

彩りにピエロのわたし誘われる

俸せの彩を探しに弾む靴

ホツとした時に段差を踏み外す

ジャンケンに弱い夫が皿洗う

死んだ振りひっくり返る虫の知恵

和歌山市 松原寿子

吹っ切れてきばるパワーを取り戻す

不器用だが心の芯は曲げずおく

ひとことの温みで肩の荷が降りる

内面のもろさ支える酒を酌む

へそくりでバランスうまく合わせよう

和歌山市 細川稚代

木の芽和えゆっくり日脚のびてくる

すばらしい美男でおわす仏様 故太茂津先生

アルバムをくればいつでもいい笑顔

おばあちゃんおいしかったと来る電話

思いつき泣く赤ちゃんがたのもししい

和歌山市 松尾和香

自負心で流れる静香唸らせる
練習のオーラが包む金の舞い
本心は仏と鬼で咀嚼する
平和の世ルール守って恙無い
回覧板地域の絆信じ合う

和歌山市 宮本三喜夫

小泉さんあと少しです頑張つて
談合の土産持参し天下り
定年で野党も少し若返る
人騙し夢敗れ去り捕らわれる
若者が世間を騙す知恵がばれ

海南省 三宅保州

放たれることを信じて羽繕い
足組むと腕も組みたくなつてくる
禁酒成功祝杯をあげようぜ
スポンサーのご厚意とのたまうテレビ
腹違いだから仲良くしています

海南省 堂上泰女

イナバウアーリンクの風も捲いだす
思いきり転けて自信の骨密度
ストレスは夫へすぐに差し上げる
永吉のロックにのってパンを焼く
あの方のオホホホには謎がある

鳥取市 田中瞳子

中流の定義を辞書で確かめる
他所の子を叱ると罪になりそうだ
決断をしたくて墨を濃いくする
下駄箱に入れてあるのは靴ばかり
割引券に売れない店は期限付け

鳥取市 平尾菜美

あいまいなけじめびしびし後始末
明暗を分ける握手はしておこう
ラプソディー奏で二の幕閉じたいね
柔軟に生きる火種を含んでいる
投げた匙拾う懐手が温い

鳥取市 福島庸二

お金では買えない宝思いやり
春うらら口全開の大あくび
他所いきの顔姿見は知っている
障害をのりこえた技胸を打つ
出番だよしっかりやれと背を押され

鳥取市 倉益一瑤

シヤクヤクもボタンもユリも恋仇
ロボットよ孫を産んではくれまいか
幸せな石です友に磨かれる
貯金ゼロだけど心に華がある
花吹雪やさしい言葉かけられる

鳥取市 吉田 弘子

鳥取市 富山 檳榔樹

三寒四温春を競って梅さくら
クスクスとつくしんぼうは眩しそう

長風呂の無事告げている十八番

諦めた財布が戻る温い町

三分で気分転換する化粧

鳥取市 杉本 孝男

サポーターの魂揺する金の舞

この僕の元気を引けばゼロになる

再スタートゼロの背な押す妻がいる

亡母に似るうしろ姿の老婆追う

俺の出る幕ではないと席を蹴る

鳥取市 宮脇 道子

母の愛葱を刻んだ風邪ぐすり

マスクして風邪を避けても追ってくる

雛祭り忘れて女捨てました

ありがとうすらすら言えて丸くなる

知りすぎた友に呆れて散歩する

鳥取市 西川 和子

今日もまたあれがそれをとコントなり

付合いに下戸が二次会三次会

老親を抱え不安のある同居

介護保険日々に老化を思い知る

五月晴薬も入れて旅支度

口紅をなおしてフアイト妻の朝

返り咲く夢は捨てない老い暦

母さんの遣り繰り上手買っている

大器晩成こせこせせずにマイペース

自由礼讃ロマンチックに生きてゆく

鳥取市 岸本 孝子

雛壇のお菓子に羽根が生えていた

ばんぱりを消してひな様寝ましようか

ロマンには遠く三度のめし作る

葬式のお金こっそり貯めている

何となく朝がしまらぬ休刊日

鳥取市 岸本 宏章

カルチャーのはしご土日忙しい

信頼をされているから叱られる

やせ薬よりも食べなきやいいのにな

熱し易い人だなたぶんすぐ冷める

すぐ顔に出るから隠すこともない

鳥取市 土橋 睦子

祝杯をあげて小さな幸に酔う

連休に自分の時間もて余す

噂にもならぬ夫婦の飯を炊く

春いちばんあわてて脱いだちゃんこ

泣き笑い繰り返しつつ歳をとる

鳥取市 録 沢 風 花

春めいて久し振り行く美容院
かけ声をかけて翔んでる水溜まり
どんぐりもどじょうも温む池の中
君が代を涙で歌う金メダル
春風に梅の香りと杉花粉

鳥取市 山 本 益 子

歳だから淋しいセリフ捨てようか
ほろほろの漢字字典とまた出会う
自己流の暦に標す赤の丸
喜寿迎え冒険スリルまだ続く
赤い指輪魔除けらしいが信じたい

鳥取市 中 村 金 祥

あせつても梅ウグイスに足を止め
ロボットに天下国家は語れまい
あの星に戦場なんかないだらな
一途さについ絆される孫の顔
寝台車夢をいっぱい乗せている

鳥取市 田 村 邦 昭

若いっていいなお世辞が下手くそだ
ストープにぬれ手袋が蘇る
告白が遅れて恋は宙ぶらり
割り勘はいつも早目に酔いつぶれ
天才というが努力を怠らず

鳥取市 武 田 帆 雀

大雪と格闘うまいめしと酒
受取りのサインは妻に來た小箱
常連に昇格一つ右上り
握手するのに両手出す借りがある
裏方に居て井を掻き回す

鳥取市 福 西 茶 子

申告書しぶしぶ書いて払う税
老雛は最上段へ奉る
マイカーも車庫でウズウズ今日も雪
喧嘩して笑って泣いて日々コント
この男に預ける骨と保険金

鳥取市 春 木 圭 一 郎

青空へ古い価値観脱ぎ捨てて
ユーモアを夫婦が分かる心地良さ
いつまでも今の役柄続かない
したいこと自分のためにだけにする
いやなこと忘れるためにまず寝よう

鳥取市 徳 田 ひろこ

合格の机に冬がスツと抜け
ひな鳥の愛だ恋だと騒がしい
若い樹へときどき苦い水をやり
忍の字をたくさん汲んで春がくる
旬のものの見つけて食べる若さかな

新調の靴へ足どり若返る

鳥取市 有沢せつ子

春色の生菓子まずは目の保養

やりくりが上手く可愛げない私

幸せな暮しメガネに支えられ

腹立ちはよそう鏡に現れる

鳥取市 近藤佳子

顔の皺以外歯も入れ髪も染め

雪被り山茶花凜と紅をつけ

義姉の忌は佗助を活けお茶を点て

わらべ唄うたい尽して寝てしまい

若い日の一直線をふり返り

鳥取市 鈴木一弘

火の用心焼けばつくいに水をかけ

風評で根も葉もないに花が咲く

根っ子から間違っていた木が育つ

ドロ試合水に流して着替える

井戸枯れてそつと裏口もらい水

鳥取市 植田一京

見栄という突っかい棒で立っている

あれこれの欲一つずつ捨てて生き

おぼろ月胸の憂さなど言ってみる

悠々人生これからが勝負

公園に子供の影を見ぬ時代

油断したつけが溜まった皮下脂肪

鳥取市 永原昌鼓

美人にもそれなり悩みあるらしい

若い気でいても背中に歳が出る

戦場へやるため産んだ子ではない

ひっそりと冬が逝くのを待っている

鳥取市 西村黙光

物忘れ心が浮気して困る

忘れてたことを忘れて大騒ぎ

酒瓶が眉逆立てた休肝日

挨拶はしたが名前が出て来ない

記憶装置修理きかない忘れごと

鳥取市 夏目一粹

見栄少し張ってほんのり酔ってみる

背中にも目のあるような怖い人

騙されてやる難しさ親の勘

自由とはこういうものか無位無冠

独りとは淋しいものよでも気楽

鳥取市 福田登美

着ぶくれて春に躓くアイスパン

日帰りの旅もお洒落に気を遣う

赤い靴履いて瞬間背を伸ばす

落日の今日に感謝の掌を合わす

お雛さま旧節句までごゆっくり

倉吉市 最上和枝

体脂肪お腹のあたり好きらしい

米櫃の底がからからよく喋る

耳に住む音痴の母の子守歌

消費税値上げの兆し胃に重い

負けた振りしても尻尾はつかんでる

倉吉市 野口節子

大盛りの夢がシャボンのように消え

ロマンチストな夫とさんまを食べている

泥舟と知りつつ乗った若かった

お隣に五台並んだ自家用車

初湯から大物らしい面構え

倉吉市 松本よしえ

談合に類が類呼ぶ天下り

類焼の老舗冷たい雨が降る

笹鳴きの鶯梅はまだ蕾

映画見に誘いうどんを奢られる

煮凝りを箸ですくって赤かしい

倉吉市 米田幸子

ハードルを下げてトップの座を目差す

笹舟を漕いでおとぎの国へ行く

足枷を外してからは老い進む

いざとなりや内緒の金があるを言う

這ってでも介護は受けぬ老いの意地

倉吉市 山本玲子

啓蟄だしぶしぶ動くなまけもの

春の野辺あの芽この芽にもう夢中

八十の手習い笑いなさるなよ

仲がよすぎて喧嘩もリクリエーション

ビンゴゲーム自然に任す時の運

倉吉市 山中康子

春うらら公園だんご待つさくら

一郎の歌に母の血あふれだす

ボンコツの命あたたためあう夫婦

同部屋に息を合わせる弱い腰

看護師にすっぱり吐いた胸の傷

倉吉市 淡路ゆり子

生きざまを眉間に寄せて男の譜

一ランク下げて私を取り戻す

子の便りわが家に春を連れてくる

溢れる品に押し潰される子供達

私の名忘れた夫に逢いに行く

倉吉市 猪川由美子

御懷妊で新たな章の始まりだ

妃を守る殿下の苦悩尽き果てず

国会議員の資質と品が落ちてゆく

当分はスケート熱が続きそう

美智子さまの幾星霜をお察しす

倉吉市 牧野芳光

私を叱りつけてる滝の音

妻と子が居てハンドルを過たず

マイカーは軽トラックに替えました

男気を出して失敗くり返す

酒を飲む心を解かすように飲む

米子市 中井ゆき

耐えて来た小さな芽にはシャッポぬぐ

もう父母も待ちくたびれた向う岸

いつだってソフトな声にだまされる

最終の旅の仕度ははかどらぬ

舞う雪とソフトな雪はまあ許す

米子市 門脇晶子

ひらめく星に母の居場所をさめている

暦をめくり一步一步の旅に出る(足のケガ)

うっかりと風邪の悪魔を引き入れた

ダイヤにまさる歩く仕合せ宝もの(足の怪我をして)

一病のチャンスで余生考える

米子市 野坂なみ

ご懐妊日の丸朱色ましてくる

燃え草に命が芽吹く古都の山

山野草みんな名前を持っている

切絵師のリズムいのちを乗せている

歩きつづけて野の果てがおぼろげに

米子市 光井玲子

未来図は計り知れない霧の中

打明けた内緒話に釘を刺す

息づまる成りゆき心静めよう

ほろ酔えば民謡うたう老父が好き

事あるごとにやさしい亡母を恋うている

米子市 木村春枝

五月晴れ青葉に恋し登山靴

鯉のぼり五月の空を呑み込んで

五月の海 女の愚痴を消してゆく

ジंकスがとかく私を指図する

セールのソフトな声に乗せられる

米子市 永井三津子

春の来て去り行きしもの産まるもの

病む母の今大切に介護する

春の風邪いただかぬようマスクして

文明が山も田圃も食い潰す

ホテルにはなぜか聖書が置いてある

米子市 白根ふみ

宝石になるかも知れぬ学び舎を

春の絵を透かしてみせる牡丹雪

喜寿の坂好奇心だけひた走る

しっかりと生きる約束などしない

中流のくらし椿の窓にいる

米子市 林 瑞枝

睡蓮と遊んで月の子が産まれ
糸を垂れて波止場にひとり海坊主
岩を打つ三角波も青春か
浮気にも帰巢本能あり女
握られて心の和む医者の手よ

米子市 青戸田 鶴

菜の花の海が見たくて途中下車
路面電車走っていたよこの道を
笑ってすぐに涙が出たよそつとふく
格差ひろがる成金さんをセレブとは
春の陽の中を私もまっすぐに

鳥取県 深田 倶久

忘れぬぞ三月十日の焼夷弾
六十五億乗せ宇宙船地球号
恕の字にも多くの意味が籠ってる
野良にして置くには惜しい猫ファミリー
涅槃図を私が描けばどんな図が

鳥取県 谷口 次男

草原を駆ける少女は輝いて
燦々と国を照らせよ政
散歩する裸木何か語りかけ
裏口がフェロモン発し誘惑す
入るなり出口を採す展示会

鳥取県 佐伯 やえ

れんぎょうが鬼門せましと咲きほこる
庭師さん春整える手のさばき
その先は聞くまい人をくるしめる
先祖に感謝大山さんと山陰線
おかげ様ことしもボタン咲きだした

鳥取県 山下 節子

趣味多く表札の名が賑やか
人形で再現させる古戦場
少年の一途な夢だ背を押そう
後継ぎで一途に守る一家言
歳ですな身軽な人もドッコイシヨ

鳥取県 石谷 美恵子

ジョークだと言ったが本音かも知れぬ
ごった煮へ九谷の皿は派手すぎる
二つ三つ一途な恋もあつた喜寿
満足と思うひとから愚痴を聞く
交代の席へ未練が少しある

鳥取県 竹信 照彦

孫の尻追って爺婆あーしんど
一年で孫は伸びるし僕縮む
春日和無事に済ませた墓掃除
鶯の初音をやっとな聞か
雪女さくら見たいか飲みたいか

鳥取県 澤 裕子

ふるさとに援助を受けた恩がある
席ゆずる少年の目が温かい
童心にかえるジャンケン輪が弾む
蹟いて気づく得ること捨てること
相席のお国訛りが心地よい

鳥取県 福 永 ひかり

臨時収入じめてた箍をつい外す
六本木ヒルズに媚びていた昨日
金メダル親の苦勞も報われる
やることがあつて遊びは後まわし
どちらかと言えば負け組なのかなあ

鳥取県 山 本 正 光

樹木の芽動きはじめて山うごく
神代から大山があり四季もある
春風と約束まもり散るさくら
旧姓で今も呼び合う同期会
自販機が人間不信の顔でたつ

鳥取県 下 田 茂登子

一途に愛注いでみても添えなんだ
着替えして浄土に逝つた兄弟よ
悲しさは波に向かつて泣くがよい
古希の坂ゼロから生きる覚悟さめ
政治家の嘔吐く口に苛立ちも

鳥取県 太 田 幸 枝

おひな様早く片付け未だ一人
義理チョコと知らずにもらいにぎりしめ
しぶしぶにもらつた嫁にいじめられ
エリートの子をバツサリと無知な母
合併をしたが良い事も無い

鳥取県 蔵 本 悦 子

トリノ見るコタツでみかん食べながら
天国へ行ける切符を申し込む
サーピスカ肉に背骨がついて来る
愛犬の散歩トリノが邪魔をする
やっかいな花粉が春をてこずらす

鳥取県 盛 田 夢 路

ゆつくりと朝のからだに螺子を巻く
川柳に骨を埋めればかつこ良い
引き算の下手な体重計に乗る
ちよろくさい男が酒にばかり逃げ
勝ち組についてひとまず風をよむ

松江市 三 島 淞 丘

消しゴムの肩がやる気を見せている
内緒ごと聞いて仲間になせられる
堂々と手の内見せて勝つ余裕
船酔いのまゑに焼酎二三杯
あれこれと祈れば月も雲隠れ

松江市 佐野木 みえ

出雲市 岸 桂子

猫の恋私は猫が好きでない
春色に髪染めて行く花の客

あの辻を曲がれば悩み打明けよう

どきどきとワクワクがあるひとり旅
胃の痛みまさかとてもで日が暮れる

松江市 津川 紫晃

渋いお茶話の種も入れ替える

逆風が吹いても負けぬオバタリアン
写真から父の握手が伸びてくる

ふきのとうおもしろい顔を出す
明日わびる言葉をさがすソバ枕

松江市 小川 注湖

お隣はお祝い続き威勢よい

君好きだ勇氣ほんとにいました

美容院老妻の髪黒光り

米寿祝い盃重い歴史入れ

恋知った牡丹は空に向いて咲く

松江市 安食 友子

雷鳴も狂ったように春させる

覚悟してどうぞどうぞとお愛想

ヒロインのムードに浸るストーリー

墓参して癒しをもらう紫煙です

別腹がたらふく食べていらっしやる

がらくたの中に落付くりアリズム
飽食の世に銀飯は死語となる

カタカナのメニユーへ注文指でする

亡母遠し亡父なお通し彼岸来る
水色の時間が好きで歩く朝

出雲市 多久和 敬子

孝行が出来ないままに母は古い

里の駅ちよつぱり笑顔こぼれ出る
旅チラシこたつに広げ春を待つ

妥協癖ついて平和な古い二人
この坂を越えたらきつと幸せが

出雲市 小玉 満江

夕焼けを背負うて急ぐ田んぼ道

物忘れ笑えぬ私もまた忘れ

山の湯へゆらりと浸り明日思う

今朝もまた友から届く春野菜

ばあちゃんの土産いつものたこ焼きだ

出雲市 吉岡 きみえ

幾重にもたたんでおこしい夢を

大根を煮てますうちの換気扇

春ですぬゆったりさせる水の音

掌でとうふころろあそばせる

早春の匂いわたしを若くする

出雲市 石 倉 美佐子

ひとり言ばつんと零す袋帯
花吹雪舞う友禪を出してみる
絹ずれをお久し振りと言う鏡
花あかり逢いたい人は皆遠く
博多帯また留守番の五月晴れ

出雲市 持 田 多輝子

明日への夢は捨てずに天寿待つ
まだ少し欲もあります愚痴話
折り返し出来ぬ若さは美しい
診察のカード今年も予約済み
境遇が似た者同士うまが合う

出雲市 佐 藤 治 代

向かい風お手やわらかに願います
若返るための鏡を探してる
朝夕のお願い袋重くなる
長くなる電話向こうも淋しそう
夢の中でもいいじゃない燃えたって

出雲市 伊 藤 玲 子

流し雛風の耳打ち快い
ロソクの明かり闇間に揺れている
一色の闇の凄さを好きになる
無愛想な男らしさと夢を追う
すでに銀髪なびかす風も嬉しくて

出雲市 小 白 金 房 子

五時からの計画集う男酒
言い訳をするから本音もつれ出す
コーヒーの苦みシコリも溶けて行く
説法へ心の扉開けて聞く
一鐘へ心清める春彼岸

出雲市 森 茂 美

針仕事男やめも少し慣れ
人が減り町名が消え冬寒し
飲むほどに故里自慢おらが村
満州という国だった古日記
ぎごちない歌で鶯春を呼ぶ

出雲市 小 豆 澤 歌 子

ときめきを包んで夕日消えていく
春風胸の模様を消していく
充たされて過去の模様に浸っている
輝いた亡友の挽歌を聞いている
日本っていいなあ四季の風がある

出雲市 富 田 蘭 水

気付く事それなりにある八十路坂
待つ人がある幸せをかみしめる
しっかりとした影だけどだまされぬ
性善が苦い話も戸を開ける
えんむすびなんて言葉が歯切れよい

出雲市 園山 多賀子

頂に正座を守る女偏

贅肉は匿っている縫いぐるみ

曖昧な答は出さぬ紙袋

陽が昇る昨日の悔いは没にして

原点に日の丸弁当ある限り

雲南市 毛利 幸

湯上がりの人肌ほてり朱に染まる

春眠を破って万物顔を出す

福笑いしたいが何故か顔がつる

人参の匂いが消えて世が変わり

若人が雪の里から消えていく

島根県 伊藤 寿美

無住寺の門を入れれば風の音

捨てる神拾う神あり生きられる

泣きにきた海がきらきら光ってる

本当は恐い童話を見た鱗

菜の花の駅特急は停まらない

岡山市 井上 柳五郎

まだ死ぬという大仕事残ってる

合併は山ばかりでも市と変り

千両や万両庭へ鳥運び

セールのソフト口調に老母負け

流行語入れて一句に味がつき

倉敷市 撰 喜子

恋猫の夢のやぶれて春の近く

浮き沈みあり金婚の花開く

上品な口で内情暴露する

熟読はしない斜めに新刊書

初孫に人気をとられふて猫

真庭市 福岡 智恵子

足痛を桜便りに癒される

春風に桜が匂う散歩道

水温み土手のタンポポ口遊ぶ

啓蟄の私も目覚め草むしる

ふきのとう苦い佃煮亡母偲ぶ

真庭市 国米 さくゑ

豪雪にも耐えて芽ぶいた路の臺

水ぬるむ山椒魚も目をさまし

ロマンスが芽ぶいて来そう春うらら

菓子箱の底に潜んでいる仕掛け

はや弥生 年毎日々の早く過ぎ

美作市 小林 妻子

子等巣立ちあつけらかんとした広間

訝しい戦の秘話は話されぬ

桜さくらサクラの咲かぬ年はない

至福だと思う我が家は三夫婦

雪消えて風倒木が目にも痛い

美作市 福原悦子

別れとや楽器の音色引きずって
ふつくらと愛が煮つまる落し蓋
原点に戻ると母の胸に着く
心配の種がつかない母の胸
水を撒く花の吐息をいとおしむ

美作市 山本玉恵

センサーの感度あの人来る気配
言葉にはならぬ想いを積み重ね
茶碗ひとつお皿二枚を洗い終え
自由におしとそれは放ったらかしなのか
許容範囲の中で体面整えて

美作市 大石 あすなろ

シーツ干す指が冷たい寒の朝
草萌えて大地に試歩の第一歩
正直に言えば野良着がよく似合う
スプーンからにぎり箸へのうれしい日
携帯のエリアで夫泳がせる

竹原市 森井菁居

意志表示する印鑑をしかと押す
笛吹けど踊らぬやからばかりいる
才気より根気ねばりが要る日なり
ひな祭り娘に貝を買ってくる
春や春掘り出し市を待ちこがれ

竹原市 岩本笑子

まず母で妻で女で乳房切る
カラ元氣明日は手術台に乗る
乳ガンはわたくしだけの傷でない
さわやかに老いたし三ツ目のガンよ
運命という歯車が動き出す

竹原市 石原淑子

牡丹の芽豊かな未知を信じます
桜五弁奇数の魅力かぎりなく
あの人へ梅馥郁と愛の詩
首振って小さな鬱をふりはらう
春ですれもーツアルトに雨の降る

竹原市 時広一路

介護施設おいくつですかなど聞かぬ
また今日も膝に湿布を所望され
セールス三度またまた鳴っている電話
日に三度磨いていてもまた虫歯
銚子一本これも私の常備薬

竹原市 正畑半覚

ヒロシマの不滅無言の平和の灯
朝刊を三段跳で読む平和
夫婦して風のハルカを見る平和
まわりみち道草昼寝する平和
フラダンス平和に腰を振れるかな

第94回 大阪川柳の会

日時 6月2日(金) 17時開場 18時締切
会場 梅田駅前ビル5F 第1研修室
宿題 △広い・田中節子△針・玉利三重子
△鼓動・松原寿子△変わる・磯野いさむ
会費 千円 欠席投句―6月1日迄(会員のみ)

お袋の味に計量器はいらぬ
つくり笑いしすぎいびつな顔になる
ちよつとした不良若さの秘訣かも
B面で話がはずむクラス会
どんな彩着でも似合っている美人

宇部市 平田実男

逆風が吹いて心が定まらず
結論を探せば増える負の遺産
時代錯誤難題だけがまだ解けず
業火しきり裁きの声を待っていた
控え目な男に解けぬわだかまり

美祢市 安平次弘道

晩御飯何にしようと言妻が言う
おいお茶では動かない重い腰
おしっこをしてから上る体重計
化粧する妻には猫が近寄らぬ
美人妻夫の知らぬ化粧代

東広島市 福島万年

川柳文学コロキウム 発足三周年記念誌上川柳大会

☆投句:自由吟3句を一組として一人二組(6句)まで。専用用紙またはB5原稿用紙使用。
☆選者:(石田柊馬、加藤 鯉、柴崎昭雄、広瀬ちえみ、なかはられいこ、赤松ますみ)全6名による共選。
☆投句料:一組 1,000円(定額小為替発表誌呈 上位入選句に賞あり)
☆締切:6月5日
☆発表:川柳文学コロキウム20号誌上予定
☆宛先:〒560-0044 大阪府豊中市刀根山元町12-33-706 赤松方川柳文学コロキウム編集部誌上大会係
TEL & FAX 06(6845)8086
Eメール:colloquium@tcct.zaq.ne.jp
※コロキウムホームページ:
<http://www15.plala.or.jp/senbuncollo/>

川柳たかね400号記念 第3回 全国誌上大会

▽課題「自由吟」2句詠 8名共選
▽選者 大野 風柳(新潟)
森中恵美子(大阪)
熊谷 岳朗(岩手)
高瀬 霜石(青森)
津田 暹(千葉)
大西 泰世(兵庫)
石田 一郎(長野)
川上 大輪(和歌山)
▽参加料 1000円(小為替)
▽用紙 自由(清記します)
▽締切 6月30日(消印有効)
▽発表 川柳たかね9月号(400号)誌上
▽投句先 〒421-2106
静岡市葵区牛妻2095の13
たかね川柳会 誌上大会係
▽問合せ 090(1989)4012 加藤 鯉
主催 静岡たかね川柳会

川柳塔の

川柳讃歌

⑪

木津川

計

ジョークでしか言えぬアイラブユーなんて

中居 善信

善信さんのお気持がわかります。僕もジョークでしか言えません。大阪弁では「好きやねん」か「好っきやねん」ですが、この二つを区別して『大阪学』の大谷晃一氏は「好きやねん」は「押しつけがましく田舎めいた言い方」であり、「好っきやねん」には「恥じらいがある」と言われるのです。ん？という感じですが、善信さん、僕らには大阪弁のどっちもジョークでしかありません。

国のため頑張りますと子沢山

奥村 五月

再び「産めよ殖やせよ」であります。「ほつといてくれ、夫婦のことは」と言いたくなりますね。中に従順な人がいて、国家のために頑張るのです。今号渡辺富子さんも「生め生めと国挙げていう姦しさ」で国の都合を叩き、中崎深雪さんは「こんな世じゃ子供生む

のはもう御免」と、生める世の中にしてくれとの異議申し立てです。深雪さんに賛成。

買って来た服が派手だと孫がくれ

江 見 清

けつたいな世の中ですね。姉娘に買い与えた着物を「わたしも欲しい」と妹娘がせがむと母親は「あんたにはこうとやの」とたしなめたものです。とにかく若いほど派手で、年寄りには地味、これが当り前でしたのに、当節は逆転してしまいました。ですが、これでいいと思います。見清さん、アメリカのお婆ちゃんのように派手を演出することです。

信じろと言ったばかりに疑われ

西村 哲夫

この句も人生としての川柳です。怪しまれた人物が「信じてくれ」と言つたらいよいよ怪しいと哲夫さんには思えるのです。何事かを犯した人物が事実無根だと言いい繕います。釈明し、突つ込まれるほどにボロが出てき、挙句「信じてくれ」はお手上げの逃げ口上なのです。「神明に誓い」とか「俯仰天地に恥じず」の政治家に何度か騙されてきました。

百円で僕の苗字が売られてる

牧野 芳光

一人前のライターもおれば百円ライターもいます。「牧野」の姓は一般的ですから百円印刷にありましよう。「木津川」をある

日、六角のケースを回して探しましたが見当りませんでした。だから僕は上等で芳光さんは違うなどとは絶対に言えません。古書店で亡父の本を見つけて歓喜した子息に、店主は感激、「タダで差し上げます」に子息は憤慨、「なら百円で」に「冗談ではない」。出久根達郎さんの出世作「親父の値段」です。

世の乱れ元はわたしの不心得

田岡 九好

「電信柱が高いのも郵便ポストが赤いのも、みんな私が悪いのよ」などと責任を問われた人間がふてくされて口にしたのです。九好さんははるかにスケールが大きく、「世の乱れ」の元は「わたしの不心得」からと、その責めを負われるのです。世の中、こんな方ばかりなら、どうしても乱れたりしましようか。

こんなにも美しかったのだこの世

正畑 半覚

大きな大きな句です。僕は名画「猿の惑星」を思い出しました。三人の宇宙飛行士が不時着したのは猿の支配する惑星でした。猿の追跡から逃れた飛行士は彼方に自由の女神の残骸を発見し、人類滅亡後の地球に茫然とするのです。半覚さんは昔の輝く何かに出会われたのです。それはかつて美しかった「この世」でした。現世への深い嘆きです。

『上方芸能』誌代表

自選集

仁部四郎

遠山可住

諸人は挙りて立てり炭化米
ヤミ米を没収したはトージョウカ
コメと読む漢字わが子に教えこむ
料亭でいただきました麦御飯
おそらくはたんまごはんは共通語

波多野五楽庵

友引きという斎場の公休日
タバコやめました鉛玉しやぶり中
非売品万病に効く母の愛
きなくさい風九条も年金も
極楽へ行くカーナビを予約する

土橋螢

芳地狸村

行く人も待つ人もありホーホケキヨ
幕の内弁当旅の味がする
煎茶より玉露をのんで恙無し
人間のこころを試す晴れ曇り
わたくしのために自動扉開く

西出楓楽

宮口笛生

満腹になって自分をとり戻す
吉報のたびに財布が風邪をひく
凜と咲く花でちよつぱり疎ましい
なりゆきで振った首から嘘ポロリ
満ち足りた時は無口になつてくる

神様の清いお水に列が出来
一点のしみも見えない清い肌
茶柱が立つてよろこぶおじいさん
鉛筆を立てて思案の受験生
たこやきをたべる平和な顔がある
八十路坂あと十年は無理だろう
生きられたなら生きたい百を目標に
日韓の主張竹島波荒く
冴えている頭宝くじでも買おか
肩凝る客送ってコーヒのみ直し

宮西弥生

裏のないひとと酌み合う縄のれん
どん底に落ちねば会えぬ阿弥陀さま
のし袋買うて春を待っている
前向きの靴が寄り道ばかりする
夢はまだ捨てぬキャンセル待ちの旅

森下愛論

冬眠をさせてやろうか老いた胃に
夕焼けの真ん中食べた血糖値
夕焼けの旅から醒めて亡母の地図
極楽も地獄も生きていて迷い
紅いバラ掴んで刺に笑われる

八木千代

老春の椅子に散りくる桃のはな
椿の木から足音がしてならぬ
黄なころも着て連翹と戯れん
約束がある木蓮の花首よ
身にまといたきは桜のうす衣

八十田洞庵

キタに来てミナミの味をほめて去に
晩闇の地球に鬼火迷うてる
ひたむきに生きすれ違うくらし馴れ
万策がつきたやっぱり酒が友
老いだろか浅い眠りの白昼夢

両川洋々

手話の指春をつかんで離さない
自爆テロいやだと神を手こずらせ
離農しても土の温さは忘れない
上中下あつて棺選びに迷う
合掌がすむと十指は隙だらけ

阿萬萬的

歳だから小さな不満切り捨てる
誤解とけぬ友思いつつ冬の道
出しや張って喋り墓穴を掘っていた
息拔きのたびマンネリな僕と知る
ズバズバと批判さびしいものんだ

石川侃流洞

ハイハイハイ三つ重ねて無視される
温暖化へともっとも寒い春の雪
適当に興味をこなして永らえる
みのもんだ試してかこつ医者通い
謝っておけばと反省アドバイス

板尾岳人

紫陽花の蕾のままで待つ五月
ポケットで恋をしているさざれ石
恋せよと風が囁く耳隠し
走らねばアナタが逃げるレモン汁
雨恋し相合傘が待ち倦む

奥田 みつ子

ひとり居に凜と覚悟の水仙花
憧れはあこがれのまま古日記
丁寧は今を生きてる明日生きる
ささやかな幸せでいい蕨餅
過去すべて刻んだ顔だ愛さねば

河井 庸 佑

来ぬ便り達者で居ると読んでおく
やんわりと祖母の説諭が身に染みる
お互いに碁敵来ぬか待ち侘びる
返礼はした誰だか出てこない
親友の忠告聞かず自己嫌悪

木村 あきら

嫁の座も不動となった鯉のぼり
領空の侵犯もあり鯉のぼり
花菖蒲我が世の春と咲き誇る
軽音楽流れて弾む自家菜園
寺の庭水琴窟も春の詩

黒川 紫 香

美しい顔してうそをついている
病院を出られず雨の音を聞く
言う事が言えない口のもどかしさ
退院の見込みがないと言われても
窓越しに聞き馴れた声がする

小島 蘭 幸

大きな家に新婚さんが来る噂
ブーさんのタオルよ嫁ぐ日が近い
前撮りの写真ひとりになって見る
四月に生まれ四月に嫁ぐ幸あれや
妻と長女の会話楽しく聞いてます

小西 雄 々

言葉では言い尽しても世間の目
迷路から帰った蜘蛛の知恵の糸
思慕いくつ天女ひらひら逢いにきた
後悔は読みの甘さへ自問する
一服のお茶へくつろぐ小商い

小林 由多香

どの雛が右か左かまた迷う
安いから使わないけど買っておく
履歴書の趣味欄何と書くかな
とつときの手段に媚びを出してみる
釣れてよし釣れなくてよし趣味の釣り

斉 藤 菰

ちちははの囲炉裏恋しい焼きりんご
福寿草咲いたと教え子のメール
逆転の代打いきなりホームラン
百点の子がスキップをして帰る
気付かれぬようそつと拭くもらい泣き

新家完司

木のいのち獣のいのち匂う春
ゴミになるものを掴んで帰り着く
あたたかい言葉ください風邪気味です
ほろ酔いの握手に深い意味はない
さて次はお花見というお楽しみ

田中正坊

まさかまさか脳出血で姪急死
老醜をさらさず臣子凜と逝く
母と娘が春の彼岸で睦み合う
老いの身にこたえる逆縁の供養
櫛の歯をひくよう身内消えて行く

玉置重人

胃カメラの結果を聞いた日本晴れ
ネクタイを結びなおして正念場
少子化のシッペ返しがおそろしい
以下余白鬼も仏もとじこめる
これからのこと考える不整脈

恒松町紅

八十路坂指には歳をとらせない
芸などはないが左手よく動く
可愛い芽摘んだニユースは泣かされる
生涯を貧にも耐えた母の墓
その昔家族の声がしてた門

第4回「川柳展望」現代川柳大賞

対象 新作10句（応募は一人一口に限りま
表題をつけて下さい）（無題）も可
用紙 B5判原稿用紙（便箋も可）を縦に使用のこと
応募 応募用紙をそのままコピーします
締切 1000円（1000円以下の切手代用可）
宛先 5月31日
〒567-0009 大阪府茨木市山手台4丁目6-3-101
川柳展望編集部

発表 第10回川柳展望全国大会（8月20日）「川柳展望」127号
表彰 現代川柳大賞 1名（記念楯と副賞3万円）
審査員 金築雨学、草地豊子、佐藤岳俊、新家完司
高瀬霜石、津田 暹、なかはられいこ、天根夢草
川柳展望社 URL: <http://www.ne.jp/asahi/temb/ouz/>

平成18年度川柳なごや800号記念川柳大会

日時 5月27日（土）10時開場
場所 愛知県産業貿易会館(052-231-6351)
(地下鉄「丸の内」下車①出口徒歩5分)
宿題 各題2句 11時30分締切
「素直」 坂井 兵選
「渦」 浅野 滋子選
「期待」 小林 映汎選
「刻む」 中野 要選
「歩く」 宮脇 西山 選
「風」 會田規世 選
「こころ」 川上 大輪 選
「ちらちら」 津田 暹 選
「のんびり」 松代 天鬼 謝選
事前投句 (はがき使用) 4月30日消印有効・欠席投句拝辞
投句先 〒488-0827 尾張旭市吉岡町3-8-15
佐伯幸宣 宛
会費 1500円 (800号特集号・発表誌)
賞 知事賞・市長賞・名古屋川柳社賞 他
懇親宴 男性5000円・女性4000円
(事前投句と同時に申込)
主催 名古屋川柳社
後援 読売新聞社他

水煙抄

板尾岳人選

吹田市 二宮栄子

母の意地失敗談は語らない
度胸なし自分を叱る靴をはく
追伸がやつと本音をしゃべり出す
何もかも許して母は星になる
筋書きになかった独りしています
作り笑い仮面の下の泣きぼくろ

今治市 塩路 よしみ

会者定離今日もしつかり生きてやる
風の彩読んで詩人の真似をする
焦点をあなたに絞る好きだから
意地捨てれば雨もやさしい音で降る
古手紙焼くには惜しい血が通う
許し通して人が好き花が好き

神戸市 両川 無限

言い過ぎた日の焼酎が胃に刺さる
年金の目減りを猫に言い聞かす
いい人のままで終った淡い恋

手の内にある幸せに気付かない
もう一度戻ってみたい始発駅
簡単に変らぬ父のリトマス紙

大洲市 花岡順子

焦るから一足す一が二にならぬ
笑わせるヒントピエロの汗に聞く
良薬の苦さを忘れずにいよう
会席のマナー見ている箸袋
若草の帽子で春の野に出かけ
風のヒントが聞こえませんか露の臺

鳥取県 毎田信雄

深々と頭を下げりや済むらしい
傘寿過ぎ保険の誘いしてくれぬ
生きているただそれだけで日々感謝
カタロケの美人しげしげ見えています
悩みごと捨ててのんびり生きるのみ
世界遺産夜もテレビで旅行する

札幌市 三浦 強 一

涙もろくなつた蛇口も私も
足元を照らす一灯広辞苑
振り向けばタラレバの影ついて来る
友見舞い癌の講義を聞いてくる
方向音痴ですカーナビは夫です

東京都 井上 つよし

しつとりと別れ惜しむか春の雪
春眠が勿体無いよ良い天気
民主党イナバウアーの裏返し
いざ出番茶柱ぐつと飲み込んで
引き潮に人の心の底が見え

国分寺市 野崎 勝

申告書また税金を絞られる
名曲を聴いて肩凝りひどくなる
年だねと嗤つてられぬ歳になり
ドラマ観る涙花粉のせいにする
S席で眠りこけてるコンサート

草加市 飯土井 健 翁

清貧も苦勞も宝 老いの幸
贅沢を知らぬ我が家の粗衣粗食
想い出の中にモンペの妻が棲み
無理するな言われてみても老い一人
前向きに生きて百への坂登る

日立市 加藤 権 悟

少年が虹をつかみに駈ける丘
森羅万象大地に溶けて行くみどり
葉桜をだれも振り向こうとはしない
農一途 大地に恥じるものはない
純白のぼたんに抱いている情痴

府中市 藤岡 ヒデコ

陽だまりをつくしん坊は知っている
一枚は脱げるつくしの出る頃は
顔ぶれは本音が言える午後のお茶
快眠と快食欲はまたにする
名案が浮かばないのでお茶にする

横浜市 布山 嘉 信

敵失を成果のように攻めたてる
騒がしい世に菜の花が春を呼ぶ
噂さけ八方美人の座を守る
祝い酒無口な父がギャグとばす
減反に農夫をよぎる隙間風

横浜市 巖田 かず枝

日本を救ってくれた金メダル
良薬と背中合わせの副作用
食べる事だけは気の合う二人です
厳冬に人花鳥が春を待つ
うぐいすが若葉マークを付けて春

横浜市 川島良子

モミクチャにされて縁談進まない
振り返る景色にいつも亡母がいる
団塊の世代が時代変えてゆく
教科書の通りに効いたダイエツト
筋肉が落ちて血糖値が進む

高岡市 青井はつえ

限定に弱いと知った空財布
念仏を唱え心を浄化する
スイツチを切つて自然のありがたさ
自然にと見せる演技で肩が張る
軽い靴買つてみようか春の風

佐渡市 高野不二

インチキでもうける人の記事ばかり
名が三つ続いて大銀行になる
初恋をやつとささやくクラス会
よそ行きに破れたズボンはいて来る
ちゃん付けで呼ばれて犬がやつて来る

犬山市 金子美千代

お誘いがかからないかな梅日より
若くいる妙薬恋をせよと言う
こだわりがみんな違つていて愉快
ほめられもせぬ主婦業に精を出し
運勢に従い今日は口控え

愛知県 片岡文男

ポケットに手をやるたびに忘れ物
寒いなと思うと肩が先に凝り
百均に一足早い桃桜
六星の本が我が家の今日を決め
愛用のカメラで梅と睨み合い

愛知県 八木百合子

はめることない指輪にも秘めた愛
正論の通らない世のもどかしさ
出不精もうきうき春の旅プラン
携帯と楷書で書いて持たぬ意地
子の理屈崩す糸口見つからず

京都市 榎本宏子

雨音が子への思いを断てと言う
ご近所のうわさを知って猫無言
富士山がなだけで顔を出す峠
もめごとの輪には入らぬ市場かご
ローソクの灯仏の慈悲をひとりじめ

京都市 清水英旺

スプリングハズカムなんとよい響き
春闘のデモに優しい風が吹く
植物になった命を見舞う花
日の丸でなく白旗の冬五輪
楽しむだけにトリノへ行つた内弁慶

大阪府 高木道子

よく聞けば根と葉全く別にあり
そよ風に抱かれ梅の香戸を開ける
私の都合信じる神頼み

不意に来る無礼な黄砂逆らえず
春萌えが押し合い出番待つ日向

大阪市 三浦千津子

表紙絵の美女に惹かれて買う雑誌
生き方を変えてよかつた回り道
クラス会笑い転げた日が戻る
定年後妻がチヨコチヨコ家あける
切り札を抱いてけじめをつけに行く

大阪市 池上清治

申告書書いて増税肌で知る
予備校も合格率へ必死なり
災害に予備の乾パン買い替える
登校の子等を見守る世の嘆き
談合で審議官から容疑者へ

大阪市 尾崎黄紅

酒好きな医者で飲み過ぎとはいわず
あの頃の恐い母さんいま赤子
例えばの話わたしの過去のこと
失恋の数も時効になつて老い
涙して叱る教師はもういない

大阪市 森田明子

花の罪愆にうずめてうなだれる
正直に答えもめ事ひとつ買う
心にもシャワーをかけて干しておく
眉描いて少し強気の風を着る
ひと山を越えてきた子ののど仏

大阪市 寺井弘子

昔なら金の卵も今ニート
どうしよう加速度ついた物忘れ
幸せは四季折々の花と住む
包丁が器を生かす京料理
恋揺れる女の顔の美しさ

大阪市 中井萌

生真面目が時に重たい枷になり
中流のゆつたり感が崩れゆく
寂しさと気楽はちようど裏表
胸の奥時々鬼が目を覚ます
心ない言葉が傷を逆撫でる

大阪市 平嶋美智子

春の母山菜求め山かける
母の文ひらがなで書く国言葉
年越えて影も踏みえぬ母おわす
春一番気付かぬほどのやさしさで
雨予報知つてか月もベール掛け

散歩道雀の声に安堵する

河内長野市 木太久 正 一

トリノから眠りのリズム乱される

難聴の妻の手となり足となり

明治生れ寝るが極楽母の皴

将来を背負う蓄を大切に

人科っていろいろあつて面白い

岸和田市 堤 楢 代

ひなまつり桃に菜の花そつと添え

ブライドがあるから一人背をのばす

ささやかなよろこび感じ木の芽あえ

春待ちの心うらはら花粉症

寄せつけぬ恐さの威厳あつた祖父

岸和田市 中 岡 香 代

迂回して涙を捨てて帰る道

ロボットに伺うときがきつと来る

絵馬でさえ三浪以上お断わり

点数の赤字は塾で埋め合わせ

喜びと不安ちよっぴりランドセル

岸和田市 坂 口 英 雄

いい汗と酒がつながる夜の膳

狸より上手に化けた前のギャル

温室で春夏秋冬知らぬ花

皇室典範待ったをかけたコウノトリ

人生の仕上げゆつくり考える

堺 市 大久保 伸 子

たのしみを毎日探しながら生き

適当に嘘が言えたら生きやすい

生きている朝一杯の熱いお茶

動乱の絶えぬ地球に身をゆだね

目が合った縁でわが家へ来た仔犬

堺 市 羽田野 洋 介

年の功も能率だけはままならず

操られる振りを楽しむ夫婦仲

不祥事が株式欄へ目を誘う

外面を使いつくせば後は楽

赤映える歳に限界来たようだ

泉佐野市 稲 葉 洋

気はこころ少しの紅に湧く活気

未来像一年毎の現実味

蝸牛お前は焦り無いのかい

開け放ち五月の風を仏間まで

願い事神に聞こえるようにいい

高槻市 杉 本 義 昭

もう一度いたずら小僧に戻る夢

幸せに近道切符ありません

寂しさをいたずら書きで紛らす日

母さんへ僕も市バスは無料です

高槻市 大崎 侑子

東大阪市 大塚 サキ子

遣伝子は努力の無駄を知っている
齒車がどこで狂うた青テント
へそくりが予備費に変わる予感あり
手持ちでは足らず予備費も使いきり
妻からの義理チョコ夫義理で食べ

寝屋川市 北田 ただよし

納豆がうまいまだまだ生きられる
迷い箸隠し球でも投げてみる
骨細も正義ならばと胸を張る
嘘の眼がたまに輝く時がある
浮いたままのピエロ見えぬ着地点

羽曳野市 森 下一知

罪人を一人こさえた無用心
妙薬の毒をカルテに見抜かれる
やりくりの妻のペダルに向い風
盆栽を育てるごとく児をいじる
一日の鎖ほどいて縄のれん

羽曳野市 吉村 久仁雄

ハンドルを雪があやつる大都会
激論を交わしたあとの般若経
ハイキング息を緑にして帰る
スーパで高値を選ぶ主夫の贅
宝くじで言えば一等賞の妻

携帯の灯が揺れて行く闇の中
帰り道待つ人無きに急ぐくせ
窓の陽がうららに見ゆる暖かさ
物干しで両手を上げて深呼吸
お隣はお花上手に咲かせはる

枚方市 伊達 郁夫

花びらが散って目立ったバラの棘
スランプを脱いだ顔だな柔らかい
急ぐまい片道切符の旅だから
つまずいた人に出す手は空けておく
枯れ木にも止まる雀が一羽二羽

枚方市 二宮 紫鳳

やわらかな日ざし散歩のベアシューズ
宅急便届いて春がやってくる
ぽかぽか陽気小鉢のお花植え替える
年金の暮し始めた日の笑い
再職の夫へ朝の笑顔かな

藤井寺市 西村 栄一

大根を濡れ新聞で包む知恵
すぐにでもオヘソを出せと春の風
いわし雲いつまで続くひとり旅
よろよるとこの世の旅がまだ続く
百選の水と夕陽の旅口マン

藤井寺市 俣野 登志子

八分目ここで辛抱してスリム
効果なしあくび出るだけ長説教
早咲きの桜と梅が競い咲く
肩の荷が降りて一気に老い感じ
散歩道ひとつふたつと春の色

八尾市 松葉君 江

知恵借りる傘寿我が家の宝です
それっきりお茶をにごしてうやむやに
先のさき読んで元気にする右脳
崖つぶち老いの裏打ち物を言う
すりへった膝が見ていた玉の汗

八尾市 脇 俊子

弾まない心を少し天日干し
独り言天にも地にも溶けていく
大勢の輪の中で知る孤独感
がらくたを宝といった児の瞳
金銭で計れぬ宝胸の奥

八尾市 平川 幸枝

誕生日ひとりの食器いとおしい
美しく負ける余生を認知する
可愛さが出てきて小鬼豆を撒く
それっきりやっては来ない福の神
プチ缶のビールが好きになった冬

子が巣立ち心の雛糸を抜く

春日和亡母に似てきた影法師

思ひ出のいいとこだけを抱いておく

言い訳を猫は黙って聞いてくれ

いろは坂もう戻れない戻らない

八尾市 笹倉 ひろし

推敲して更に深みにはまり込む

札束が僕の知らない夜に飛ぶ

思ひ出のかけらを拾い組み立てる

ガンに勝つよりも身内として同居

談合の橋ダム道を駆け巡る

八尾市 田中 トシエ

駅ホームポスター明るく花だより

ぶら下がる力は強い怠けもの

気がひける話を包むオブラート

前例をほどいた糸が結べない

体力が落ちても押せる横車

大阪府 宮守 正博

ひな人形はやく仕舞ったはずなのに

芸術といってヌードを描きたがる

遺言状妻が下書きしてくれる

なんとなく世界の天気みてしまう

次の世も一緒にいたいと怖いこと

大阪府 小栢 こずえ

けもの道行くよに同じ事をする
悪いことしていいのにけつまずく
居なくては困る人だが小うるさい
行き来する硬い石でも丸くなり
当てもんのような人生生きて来た

大阪府 神野 千恵子

見守れば花もやさしい顔で咲く
鴉にはやつぱり黒がよく似合う
守護神はやつぱり山の神だった
牛井にアメリカ産というスリル
鼻ぺちやも八重歯もない脱個性

神戸市 木村 忠義

ありがとうトリノの金の舞に酔う
ありがたいノルマノルマのない暮らし
大好きな人の風邪なら貰います
売れないんだなお魚に水をかけ
喜ぶと思つてしたが嫌がられ

尼崎市 小池 幸子

変わりなく余生手探る日々送る
冬の庭紅い椿と老い一人
今年また風邪に縁なく冬が行く
決断の時期誤った自己嫌悪
若よもぎ香りほんのり春に酔う

相生市 村木 信子

雑踏の渦へ碎けてゆく主張
六法の死角で狙う恋の火矢
裏切りも怒りもささり砂時計
座布団の位置は狂わぬ夫婦仲
諸行無常これが掟か娑婆の風

三田市 阪本 藤朗

ゴミ捨てて自分自身は持ち帰る
絵の餅を食つたと言つた人が居て
合併で町のまつりの名まで揉め
通信簿分かつたようで分からない
寿命とは思ふが命まなならず

三田市 白井 二英

渴きあり胸算用がみえた時
処理しよう思つて何年書架の本
しがらみをわざと取り込むこともあり
あだ花もあるんだろうなこの中に
中国の文字意外にも略字ふう

西宮市 片山 忠

心ではちよつとなりたい悪オヤジ
空元氣出してその場は逃げておく
裏の裏かいて結果が凶と出る
泣くよりも笑つてくれるいい仲間
芯からの笑顔にいつも飢えている

西脇市 七反田 順子

挫折感味わう時は負け戦

フライパンタマゴ焼きなら喜んで

タマゴかけご飯復活父の味

紙風船頭をよぎる葉売り

プライドは軽く軽くとタクト振る

兵庫県 安達 厚

残された親孝行は墓参だけ

生きてたい無にも空にもなれるから

八十路かと思えば四股をふんでみる

おしゃべりに無言の価値を教えられ

毎日の日の出昇んで気をもらう

奈良市 尾畑 なを江

寒月がついて来る来る背を押して

よく喋る嫁と姑も風呂敷に

老夫婦昔の金でもめている

化け合つてようやく車輪合つて来た

キッチンには妻の天下で丸く生き

和歌山市 土屋 起世子

ライブルと病院で会う安堵感

苦と楽と長さの違う二十四時

我が振りと思えば悲し青リンゴ

寝ていると下手な手付きで粥を炊く

女ですそんな台詞も褪せて春

和歌山市 柏原 夕胡

四面楚歌 影はわたしを見捨てない

びしょぬれのころはそっと陰干しに

傷ついて少しおとなになれまして

温もりがほしくて泣いた影法師

微笑みの仮面の裏が濡れている

和歌山市 山田 侃太

星ひとつ拾ってからの包囲網

やさしさを剥いても母色の妻

真実に触れるリンゴの丸かじり

連休の企画をたてる家具食器

中華まん彼氏にかぶりつくように

田辺市 大峠 可動

生物の循環だった杉花粉

花吹雪乙女になって樹をおりる

立春寒波神話の里は食べ残す

分権も人権もあり蓋二つ

核の世に日本は奏えた樹に凭れ

和歌山県 木村 徑子

梅干しの指定席ある朝の膳

この星を揺するメディアに脅される

不覚にも妻の家に成り平和

今ならばまだ翔ぶ自信朱を着る

川柳讃歌まだ見ぬ君のエール来る

和歌山県 辻内次根

フキノトウ皿にほんのり春の味
ため息をつくと心が干乾びる
脱皮しているのは何時も夢の中
ヒマワリを咲かせています自己暗示
昨日より今日が明るい春障子

和歌山県 森下よりこ

遠くから見ていただけの赤い靴
子の声が消えて鎮守の森荒れる
思い立ったら吉日にして生きていく
唇を噛んで出直す駅がある
まだやる気ばあちゃんガムを噛んでいる

鳥取市 岡田信恵

机には本が山積み欠伸する
ゴールまで期待は捨てぬ皮下脂肪
孫へ目が写真みつめて見比べる
合併をめざした町の落し穴
一輪の水仙香る甘い部屋

鳥取市 山岡紀子

好奇心いっぱい貰う春の風
親切を貰って歳を振り返る
正直に生きて器は中くらい
ティーカップ小さなうそも混ざってある
ティーカップ恋の行方が気にかかる

鳥取市 谷岡清子

七転びゆっくり起きる思案中
浮き沈み越えて白寿の峰仰ぐ
乳のみ児の匂い心を無垢にする
故郷の山は静かなる母のごと
唐辛子煩惱ゆるる人心地

境港市 中井虎尾

Vの夢村上フアンド虎のジャマ
ウインドーに春の顔した俺が居た
虎かいたつもりの絵だがこれは猫
ランドセル世間を背負う第一歩
春匂う鼻をピクピクさせながら

米子市 猪森スミエ

ふくらんでしほんで波を越えてきた
一泊の旅の準備に二三日
目薬が効いて選んだ相手です
苦いけどきつと効くぞと喉仏
ふくらんだボツケにきつとある宝

鳥取県 小飼和代

腹の虫騒ぎだしたら昼とする
満天の星もうらやむルミナリエ
泣き事の話せる友に救われる
咲く花へ待ったをかけた春の雪
はめられてそつと鏡を覗き見る

鳥取県 岩崎和子

漬物の小蕪の白とみどり映え
淋しさを店先の花誘ってる
気遣いを盛って微笑む朝の膳
外食で私の味を確かめる
毎日をプラス思考の波に乗せ

鳥取県 福光京子

ふり返り今日の足跡確かめる
深呼吸勇気をもろう朝を入れ
アンテナを張って笑いの種拾う
脳細胞目減り遅らす策を練る
気にしない自分らしさの花咲かす

鳥取県 大田勝誉

おいそれと希望の星は降って来ぬ
つまずいて吐いたことばはもどらない
切りようで紙一重ほどゆがんでる
快よい夫の返事は青い空
嫁がせて深いトンネル入る余生

鳥取県 橋谷静江

良く匂う花は亡姑が好きだった
早起きがつらい朝あり日が昇る
本当に泣きたい時は天を見る
泣く時はしっかり泣けば気も晴れる
要領が悪く失敗くり返す

松江市 山根邦代

優しさが励みになった温い風
草萌える足元からの春の色
啓蟄に一枚脱いで風邪もらう
春の雪身震いしてる梅の郷
スパイスのチョット効いてる田舎道

出雲市 川島和歌子

無口でも心の通う友が好き
氷山も地球もゆるむ温暖化
三寒四温梅はころびて春を待つ
スーパールの半額セール待つ日暮れ
雑用に追われて早い春の暮れ

雲南市 武島ちよえ

回り道桜さくらが呼び止める
豊かさの中で好みの色選ぶ
蒔かぬ種生えて雑草逞しい
悔しいが小銭の意見通らない
楷書には馴染めぬ角が多すぎる

雲南市 福岡博利

笹鳴きを終えてしきりに春を呼ぶ
日に三度しゃべって笑うお茶の味
老いぬれば自慢話の喉仏
捻子巻いて済ませたころの青い空
残りもの勿体ないと体重計

真庭市 矢谷 富士野

今治市 渡邊 伊津志

米ロシヤ越えて静香の金メダル
銀盤を舞うは天使か妖精か
お遍路の鈴の音色に春を呼ぶ
少子化で空家一軒また一軒
混浴の足湯お国を聞く訛り

府中市 馬場 利子

香南市 桑名 孝雄

春一番嬉しいニュース駆けて来る
力抜きゆつくり歩く古希の道
軒下のつららボトリと喋り出す
指折って春待つ花の彩を選ぶ
鍋いっぱい香りが溶ける路のとう

宇部市 高山 清子

香南市 近森 功

歳月へ恩讐越えて酌み交わす
ときめきが若さの秘訣喜寿傘若
追い越せば背中に刺さる後ろ指
風向きが変わらぬうちに席を立つ
小細工が過ぎて大きな穴穿つ

東かがわ市 中塚 寿々女

高知県 百田 幸

里帰り亡母が迎える蛇の目傘
あれこれと迷う心を映す月
植込みの中に小さな春を見る
陰口も許して旧友思いやり
貧しくも心豊かに日々過ごす

いい笑顔だからと鬼がついて来る
好きな人みんな笑顔でやって来る
あの笑顔こそ幸せを呼ぶ秘訣
ほほえみが御縁となった君と僕
惚れてます決して笑顔消しません
年一度お上りさんが履くわらじ
東京から江戸のおんなが消えている
集結は熱海と幹事やボなこと
土佐弁が風化しかけている仲間
来年も会える保証のない集い
特選はピカソゆずりの書道展
与野党の餌食とされるホリエモン
握られて握りかえして血がたぎる
底辺に住んで素直に空を見る
もったいない祖母の辞書から盗み取る
軽すぎて寝付きが悪い羽根布団
よくしゃべる友が静かで気にかかる
底辺を歩いて不安な余生
触れたくはない古傷にさわれる
空元氣五体どこかが文句言う

シドニー 内山 佳代子

幸せとキレイはいつも正比例
幸せの意味は何かとふと思う
一生の友に出会えたこの大地
あばたもえくぼなんと上手な言い回し

シドニー 坂上 のり子

昭和史の汚点アジアに蓋出来ぬ
ぐらついた足元にふと歳覚え
何もかも聞いて他言をしないネコ
残るなら遺す老後は物入りだ

シドニー 三谷 たん吉

いつからだ負けてヘラヘラ日本人
負けたなら隅にかくれて泣きまくれ
同窓に議員が居ないのが誇り
身内より親身になれる拾いネコ

メルボルン 藤原 ポン吉

ヒルズでも名ばかり我が家四畳半
少年の壮志飛び出す高い空
お酒より慰めよりも子供の目
鳥が来て猫が来た後友が来た

茨城県 葛西 清

聞く耳を背中にしよって喋ってる
六角のしがらみ重い雪化粧
勝ちたいと計算すまし先手打つ
春風に男の虫が穴を出る

柏市 河野 桃葉

晩学のパワー熟女はよく喋る
更年期愛を充電しましょうか
鈍行の旅お隣と時事談義
少年の夢についつい朱を入れる

東京都 笠原 乃りこ

風に乗り即かず離れず死と生きる
憎しみの去らぬ心と闇を行く
イケメンにそつと擦り寄る私痴女
イヤリング着けて耳から離になる

東京都 長谷川 康子

ゆっくりと春の日差しに馴らされる
朝寝して二日がかりを干している
えいままよロックが治す不眠症
喋りすぎですよメジロもひよ鳥も

横浜市 長島 亜希子

主婦はいいミスで国家は倒さない
時たまは背広で出かけたらしい
新しい帽子連絡先を書く
温そうな日差しに薄着して悔いる

横浜市 金森 徳三

国のため産めよふやせよ策の無さ
厳冬で記録更新ガス電気
目の中に入れたら痛い孫となり
中国の脅威それでもODA

横浜市 中尾 哲代

添削の赤字が減ってくる不安
受付の美人は僕に無反応
お寿司屋の湯呑みで知った魚扁
目葉が的をはずして歳を知る

岐阜市 平野 あずま

花時計喜劇悲劇を見て飽きぬ
泣き笑いの人生だった皺の数
しゃぼん玉弾けて散った片想い
残業を熱いうどんに励まされ

可児市 鶴留 百合

コート脱ぎこんなに軽い肩回り
陽光に洗濯物の笑い声
覆面のパトと気づいて車間距離
給料のうちと苦言を消化させ

静岡市 中西 雅

年下の訃報悲しいシャボン玉
砂と風 風紋生れる恋の歌
野仏の丸いお顔は愛でしょう
愛の辞書いつ消えたのか雲に問う

浜松市 杉浦 恵夢

国連の机を濡らす血と涙
雨上がり枯木がふっと目を開けた
あした敷くレールがあつてきようは寝る
春一番新婦のベール雲を掃く

犬山市 関本 かつ子

親の名を一字貰った良し悪し
飛ぶことも落ちるのもない顔になり
日溜りも手持ちぶたさな遊園地
作り方誉めて夫の自立待ち

犬山市 吉田 幸子

チャレンジはきついらくだの乗り心地
見るだけのつもりパピルスのめり込み
春を呼ぶ雨に躍動する萌え木
ズボン丈また縮めてる母の背

尾張旭市 三浦 きぬ

この歳になつても手相気にかかる
水仙の花芽が春を告げる庭
何時の事預金 貯金に変わるの
国会に女性議員のファッションショー

京都市 三宅 満子

美しいだけではないと知った雪
卒業式第二ボタンを外す見栄
今日咲こか明日咲こかと沈丁花
正直に年齢語る足の裏

京都市 西村 益子

うるさいと嫌われてても世話を焼く
夢の中昔のままの母がいる
スーパールのチラシに頼るお献立
お隣もおでんらしいぞ換気扇

土鈴雛飾る私も若返る

耐えて咲く梅一輪が凜として

忍の字を抱いているから生きやすい

食べる人いる幸せの夕支度

大阪市 吉内福世

喧嘩には勝ったが皿を洗う羽目

息詰まるシーンに水差すコマーシャル

父に似てよく利く鼻で見張り番

父親の血筋を引いたばかり癖

大阪市 伏見雅明

御懷妊慌てて典範引っこめる

ぼろ儲け株でしてるが無職です

お粗末な東大卒で揺れる党

田圃売り私学行かせた親の愛

大阪市 平井露芳

ポケットに子どもと話す小さい飴

虫眼鏡覗けば見える亡夫の顔

あの頃は母の日がない割烹着

曲り角娘と会ったタイミン

大阪市 吉田富美

うちのボチご主人つれて散歩する

泥棒に尻尾振ってたうちのボチ

タマだけが三つ指ついて出迎える

恋をした相手ベルシャの長毛種

大阪市 中村忠敬

シンブルなお雛様には御馳走を
団塊の卒業鬼の来る気配

格落ちの政治を見せた偽メール

すんなりと白旗あげぬ春の風邪

池田市 多田契子

鳴かぬなら勝手にしろと不如帰

縁側の猫春の陽を独り占め

育児書も無くて猫の子よく育ち

春翔る初音の歌も拙くて

池田市 北出北朗

妻の愚痴春の欠伸を噛み殺す

好きだった春のイタズラ花粉症

団塊の世代へ春のほろ苦さ

自画像をちよつと美男に描いて春

池田市 上嶋幸雀

もったいない沢山買ったやせる本

マニキュアが若さアピール老いの指

午前様後悔してる水を飲む

帰り道子犬と遊ぶランドセル

泉大津市 助川和美

すこやかになりたく紅を淡くひき

恋ばなし今日もはじまる日向ぼこ

黄昏れて何も手つかず無為の今日

般若面笑うてごらん楽しいよ

泉佐野市 備後三代子

柏原市 伴 洋子

薫風へカーテン替えて誘いこむ
バタバタと飛び立つ春の子供部屋
自己弁護すればするほど首絞める
花の闇涙をそつと拭く影も

高槻市 安田 忠子

絵手紙を額に飾って春を呼ぶ
通勤車二十歳の頃の淡い恋
めがね替え世の中広く見えて来た
無料バス恥かしくって切符買う

門真市 矢 阪 英雄

梅の香を句集の中へ封じ込め
紙を折り手づくり句集胸はずむ
手くばりの句集受けとりあたたかい
ホッチキス胸のよろこびとじる音

高槻市 住友 佳一郎

神だのみ釣り銭ないかと御さい銭
精一杯孫の気を引く百面相
見栄張ってハッターリ言って後さみし
母の愛今さら思う我が子見て

河内長野市 黒 岩 靖 博

細胞で一家支える屋台骨
残り火がくすぶり続く六十路過ぎ
雷も落ちる間は大丈夫
夕闇にかすかに響く子守り歌

豊中市 源 田 啓 生

平成を花の十八春の雨
どつぷりと浸れば酔うている平和
草遊び川の遊びも出来ぬ児等
氷上の無心の舞いに湧くトリノ

堺市 萩 野 像 山

三面鏡嫌なとこまで見せたがる
空腹へ焼芋の笛たまらない
大根のへたから生さる気をもらう
生かされて用もないのに歩いてる

富田林市 古 田 千 華

なら町に聞える小唄和を意識
休日はジーンズ似合う芸妓さん
ジーンズが似合ってたうれし古稀の春
本当の金持派手に振舞わず

吹田市 早 泉 早 人

寝屋川市 岡 本 勲

愛でるか妻の指図で飲むくすり
旅便りちよっぴり色も加えてる
どの国も神から見れば脛に傷
大の字でおとこを磨く露天風呂

捨てもせず使いもしない荷物増え
期待されすぎて分解竹トンボ
浅はかと言われてもいい老いの恋
宇宙からのお叱りですか大寒波

寢屋川市 長濱賢山

どちらかが敗けねばならぬ千羽鶴

ブランド品夢の中では買い放題

進んでたはずの時計に油断した

終着駅棚にドラマを置き忘れ

寢屋川市 森田麗

稚拙な文字は精一杯の母の愛

髪切った過去思い出す花嵐

あの人の好きな桜の便りくる

播粉木の母に手を貸す木の芽和え

羽曳野市 永田章司

忠告を聞かず墓穴を掘る驕り

おだてられ財布の中身軽くする

隣組顔も知らない人の通夜

スランプと言いつつ通るうちが華

羽曳野市 松本静子

水仙が雪の舞い散る場所で咲く

梅の花匂いをつれてきてほしい

春を待つ人の心は彼岸まで

花便り待ちわびている花に恋

羽曳野市 仲谷真一

ランドセル何度も背負い春を待つ

春来れば何か良いことありそうな

バネ持つてそこまで春が来てるけど

卒業式わが師の恩は消えにけり

枚方市 小川良吉

花粉舞う街はマスクで春謳歌

歳かさね好きとは言えぬもどかしさ

好き嫌い気分で選び悔い残す

老い夫婦好きから愛の春遍路

藤井寺市 増井ヨシ枝

春休みお昼は孫と豪華版

家が建ちつくし畑が消えました

母さんのお迎え嬉し草を摘む

手をつなぎ熟年散歩あたたかい

藤井寺市 吉田喜代子

目覚めよと春の女神が戸を叩く

春うらら妻の帰りが遅くなる

鈍感な私の鼻も花粉症

おふくろのくぎ煮匂わぬ台所

藤井寺市 伊藤アヤ子

菜種梅雨三寒四温風邪を引き

もう居ない背中を押してくれた母

薄水とけて池にも春の色

ふわりふわり積った雪の迷い道

箕面市 寺井柳童

豪雪の雪の重みに耐える町

どつしりと座る居場所のない孤独

メーキャップ素顔に戻る終電車

結婚記念日うつかり忘れ月と居る

八尾市 寺川 はじむ

天秤にかけても揺るがない頑固
着飾りの女房をさりげなく褒める
もう止める誓った言葉笑い出す
一発をかましてからは来ない球

八尾市 田邊 浩三

もう少しゆっくり来いよ誕生日
定年後気付き宝の持ち腐れ
誓っても駄目よあなたの目はテレビ
ここだけの話は聞かぬことにする

八尾市 西川 義明

本当の真相いつも藪の中
キッチンに家族が揃う温かさ
平和の灯祈りに誓う千羽鶴
この先も妻一筋と誓います

八尾市 中島 春江

歳とらぬ難美しくうらやまし
誤字脱字神もあきれる受験絵馬
鳥帰る空に落書きするように
釣り落す魚大きく山笑う

大阪府 若月 祐作

幸せを感じる人と手をつなぐ
日朝の話は何時も平行線
誘いにはのつたらあかんよお嬢ちゃん
羽根布団ふわふわすぎて寝られない

大阪府 西川 冷子

鶯の妥協許さず鳴き誇る
お水取りやはり寒さを連れて来た
春だからマップ旅では物足りぬ
路の薔摘みたて揚げて爛控え

大阪府 畑中 節子

晴天のいのち短し春の雨
種まけば毎日のぞき託す夢
春の葱意志ある如く尖りおり
言葉では無理しなさんなと言う他人

大阪府 吉川 弘泰

新緑を気ままに歩く土踏まず
目録を書いて順番不同です
ただ一つ君が代びびく金メダル
テーブルにイカとくぎ煮の春の海

神戸市 武田 恵美子

一番にあいさつにでる犬のゴロ
いやしんば今日一日はがまんでき
息子より親孝行の嫁宝
さがしてる顔をカバーする美容院

神戸市 山田 婦美子

盆梅の香にひとときを癒される
親孝行愚痴も自慢も聞いておく
親孝行と思って同じ話聞く
当り前のことが嬉しい老いの境

尼崎市 古川 正子

体操で元気な朝が動き出す

三田市 石原 歳子

お年玉孫よりもらう歳となり

ドラマだと思つていてもついぼろり

雛飾り楽しい事を想い出す

忙しくてやさしい昔の台所

お水取り松明走り火の粉待つ

子の名前連ねて書いた古希祝

尼崎市 桑原 東園

宝塚市 丸山 孔一

弱い者いじめか福祉頭打ち

活字との対話に余生ひっそりと

富士山も地球も遠目美しい
雪解けの雫と遊ぶ空の青

歯が疼く今日も明日も寒厳し

つくしんぼう冬土の黒抜けて伸び
春だねと土筆の親子あくびする

思いつきり布団を叩くひとりもの

尼崎市 河津 正治

宝塚市 河津 寅次郎

どん底も切り抜けて来た共白髪

乗らぬ化粧妬心見透かす三面鏡

姑の歩調に合わず嫁の知恵

積み過ぎた欲に奇跡は寄りつかず

篠山市 谷田 多美子

一善を天へ預金をして傘寿

一人食べ一人で生きて片手鍋

啓蟄にお地藏さんも春の帽

一坪の庭を慕つて春の虫

三田市 上垣 キヨミ

西宮市 石野 照代

誘われてハートが走るお洒落して

もう五段待つてくれずに発車する

叱り過ぎ寝た子へポロリしずく

三回忌仏の話題は出ず終い

何見ても幸せ感じる春日和

進歩なし十年一日習いごと

アーケード切れた所に花の乱

ごきぶりをそつと見のがす歳になり

年越せどまだ花盛りシクラメン

兵庫県 岩本 美緒子

暇と年金おだやか八十路リフレッシユ
晩成ひらく言葉鶴呑みで呆けられず
彼岸まえ日割り草引き果さねば

兵庫県 永井 かほる

イチゴ好き妹のお墓に久し振り

ふきのとう石の割れ目で顔出して

雨ごとに新芽も伸びて春感ず

テレビ見てオカラコンニャク味如何に

兵庫県 黒崎 美紗子

取り扱い注意と表示何かしら

久しぶりつくる楽しみミシン踏む

整然と並ぶ写真に見とれます

カラオケでストレス払う声を出す

奈良市 乾 春雄

七光りの椅子が未来を甘く見る

句読点やたらと多くなる余生

夕暮れて過疎は墨絵の中に寝る

神さまに貰った朝という白紙

奈良市 矢野 良一

義理チョコにもてた証しと勘違い

頭にもそろそろ偽装考える

ウォーキングホケキヨホケキヨと靴が鳴る

春うらら花と小鳥と草団子

若者は忠告してもはね返す

生駒市 小西 みのる

忠告に感謝しないでさかうらみ

春近し医者も手こずる花粉症

子育てに手こずる娘身にしみる

橿原市 藤永 実千代

参加することに意義あるはずだった

腰伸ばしイナバウアーと洒落てみる

芸人をいじめて稼ぐ視聴率

事故情報明るい声で報じられ

和歌山市 根田 よしこ

お絵かきしこんなお家がいいと言う

飼い主に似たのか小犬さわがしい

同窓会帰る時には主婦の顔

幸せは大きすぎたら掴めない

和歌山市 田中 すず

向こう岸に時々電話したくなる

人は人川の流れに癒される

煩惱を浸す水音風の音

雑念を払う絵筆に春を盛り

和歌山市 たむら あきこ

千年を軸に巻かれる仏たち

わたくしのレールに曲がる癖がある

深い息吸ってわたしを入れ替える

目線すこし落とすとみえてきたけしき

和歌山市 坂部 かずみ

一次二次やつと山越えさくらさく

押し入れて迷っただけのひなまつり

ドレミファと歌い出したよ春の雨

ストレスも溜まると言って夫婦酒

和歌山市 寒川 武

思い切り叱ってほしい時もある

救急車がうちの近くで鳴り止んだ

あれこれと指示をしてから妻は旅

期待などするから腹が立つのです

海南市 小谷 小雪

おしゃべりをせずに帰ればもの足りぬ

鳥のためみかん半分載せておく

つぶれ梅名前以上に味は良い

大切な時のケータイ電池切れ

和歌山県 村中 悦男

句読点正しく打って謎が解け

この岐路を越えればあとは迷わない

陽が昇る何故かわくわくした気分

あいまいな返事でにごす遠い耳

鳥取市 河田 のり代

旅しても心は留守の夫想う

捜しても同じ顔なく神の知恵

知恵が出る苦の日暮しをありがとう

八十路まで生きて背丈が縮み出し

鳥取市 近藤 秋星

幸せは今年の桜にも出会う

お花見のプランもちゃんと組んである

隣まで来ていて春の遅いこと

すんなりと春にはさせぬ冬の意地

鳥取市 横田 春名

皿割って治まる喧嘩ホツとした

はしゃいだ声の若者目が暗い

雑草もしつかり萌えて美しい

何もかも任せたつもり胃が重い

鳥取市 中宇地 秀四

幸せは何時も一粒宛で良い

微笑みを忘れぬ妻が手網取る

負け犬は黙るしかない日が暮れる

金も無い地位も無いから平和です

鳥取市 山口 千代子

陽が落ちて無事な一日感謝する

もう少し命下さい米寿欲

花生けて眺めつつ飲む茶の美味さ

唄う人聞く人がいて楽しめる

倉吉市 大森 孝恵

少子化で子猫ばかりが増えている

憂さ晴らす一人芝居の独り言

鶯の声が追い出す冬將軍

アラ嫌だ老化のサインドッコイショ

倉吉市 前田 喜美子

携帯もカードも持たぬのが自慢
足許の自然崩れる温暖化
せせらぎを聞いてふくらむ猫柳
ロボットが育児介護を思案中

倉吉市 酒井 美美子

嘘っぱち並べ面目ないと言う
ずるがしこ他人に罪をなすりつけ
てくくと貴方を信じについて行く
あわ立ちが悪い世の中汚れてる

境港市 遠藤 那珂子

みじん切り人参かくし食べさせる
若い風あちらこちらで荒れている
せつないねなごり残して別の道
歳重ね味を出し合う三姉妹

米子市 小塩 智加恵

盆栽のふくらむ梅と話す
募金箱小銭が無くて通り過ぐ
若返り出来れば無理し薬買う
ストレスを一夜で捨てる特技もつ

鳥取県 北村 稔

味噌汁にタクアンあれば生きられる
雑草だつて命がけだよ奄るなよ
あまりにもゼイがすぎではいませんか
戦中のくらしをすれば金たまる

鳥取県 岡村 孝明

難題を吞んでじっくり策を練る
争わぬ指切りしても撃つて来る
一歩ずつ師に近づいて恩返す
わずらわしい妬き過ぎ妻のふくれ顔

松江市 松浦 登志子

スランプに暮参りして仰ぐ空
自我強くまわりの空気動かない
台風と豪雪耐えた木は切れぬ
花を愛で蓄も愛でて散歩道

松江市 相見 柳歩

水が湧くようにアイディア出てこない
福引きのようにはいかぬ恋のくじ
お祈りで仏と縁が結ばれる
雲に乗る愛する君に逢うために

出雲市 荒木 英子

冬眠から散歩道にも春の色
満開の桜今かと待つあなた
毎日が空しく思え独り言
水仙が昇る朝日に花蕾

雲南市 菅田 かつ子

一つずつ忘れて余生面白い
寒風になお水仙の楚々として
おしゃべりが無口になると気にかかる
夢のある話やっぱり眩しすぎ

安来市 原 煩悩児

出雲弁何時の間にやらもう古語に

出雲弁聞くと心が温まる

普段着のままで話せる出雲弁

神様が話合いです出雲弁

島根県 福岡 左余

あなたほど燃えてはいないハガキ主義

春を待つ破れ障子と猫の子と

ガラス越し根雪の夢をみる弥生

音読に声張り上げる昼独り

府中市 岩本 雅代

雑草の花も春陽に憂い咲く

病窓に梅花が見えて春をくれ

介護する顔にも化粧して笑顔

春なのにケンカも出来ぬ老い二人

唐津市 岩崎 實

余命なお誠実無心一直線

向き向きでそれでいいよと和み合い

赤い実に小鳥野鳥の姿なし

晴れわたりよこれが目立つ部屋の中

東かがわ市 赤澤 貞月

長電話砂時計まであくびする

宵越しの金はやっぱり要る老後

花の名は覚えてるのにお母さん

ごめんねが言えず今夜もだんまりで

東かがわ市 向山 治延

菜の花に蝶がたわむれ春遍路

新緑の薫かぎつつ遍路道

鈴の音も何か淋しい老遍路

木洩れ日が背なに影さす遍路行く

(前月分) 高槻市 杉本 義昭

定年後結びなおしていく絆

人間が好きで仲間と飲むお酒

嫁が来て可愛いエプロン一つ増え

桜咲き遠回りする散歩道

母恋し形見淋しや内裏雛

第51回「全国川柳作家年鑑」 作品応募要領

1. 句稿 応募用紙あり(申し付けて下さい)
作品7句新旧可
2. 応募費 3,000円 ジュニア 1,000円
定額小為替か振替口座
3. 刊行 平成18年9月下旬予定
(参加者に年鑑一冊送付)
4. 締切 6月20日(火)消印有効
5. 投句 〒673-0046 明石市藤が丘1-24-12
送金先 上原 翔 宛 TEL 078-922-5494
6. 郵便振替 00960-2-269928
ふあうすと川柳社
7. 応募資格 どなたでも可
8. その他 エッセー(原稿用紙2枚)
カット(ハガキ大以内)
(採用はご一任下さい)

ふあうすと川柳社 主幹代行 赤井 花城
全国川柳作家年鑑 刊行委員一同
(参加者住所は市区郡のみの掲載とします)

愛染帖

新家 完司 選

大阪市 板東 倫子

わたしには掃除に見えるカーリング

(評) トリノで注目を集めたカーリング。必死になって氷をこする姿はまさに「床掃除」。

池田市 北出 北朗

腕時計はずしてやっと我が時間

(評) あらゆる約束事から離れ、誰からも束縛されない自分だけの時間に腕時計は不要。

大阪市 柴本ばつは

花束がわたしの前をすつと抜け

(評) またまた、華やかなスポットライトを浴びるのは他人。自分の番はいつなのだ。

倉吉市 野口 節子

私はどんな病み方するだろう

(評) 事故以外は何らかの病気で死んでしまう私たち。さて、私はどんな病気なのだろう。

松原市 玉置 重人

犬の服犬の意見をなぜ聞かぬ

(評) 雪原でも、自前の毛皮だけで平気な犬たち。綿入れなんて迷惑ではないのか。

東かがわ市 池内かおり

口に出す恨みはたかが知れている

八尾市 生嶋ますみ

賽銭箱五円百円同じ音

浜松市 杉浦 惠夢

メールうつ誰も傷つかない場所へさびしさにいつそかたちがあるといい

鳥取県 竹信 照彦

日が伸びて寿命も延びる心地する

和歌山市 古久保和子

花粉には負けぬ粗食に耐えた人

くしゃみして二行ばかりを読み飛ばす

他人同士軽い話をする足湯

弘前市 高瀬 電石

売る人も買う人もいる盗聴器

酒好きでにんげん嫌い 僕もそう

藤井寺市 若松 雅枝

戸籍謄本一人になった肌寒さ

ばつさりと髪切り揃え春野行く

和歌山県 辻内 次根

ちゃんと効くようになって玉子酒

遮断機の向こうに同じような顔

西宮市 緒方美津子

食べてしゃべって景色みるのを忘れてた

また飲もう見舞いの客の合言葉

西宮市 牧淵富喜子

わたしにもテキパキ出来た日があつた

炬燵から長い電話をかけてくる

堺市 山本 半銭

名は知らずいつも私を見てる星

金平糖がおしやべりしてる壤の中

鳥取市 岸本 宏章

ライバルへ見えないように薬飲む

和歌山市 木本 朱夏

ドラエモンのポケットにある海鳴りよあかちゃんかわらつた桃の花におう

和歌山市 池 森子

年金の額で回遊する金魚

貧しさをウフと逃がすモナリザよ

富田林市 池 森子

早起きのたつた二三分が出来かねる

堺市 和田つづや

定年です公園デビューいたします

堺市 加島 由一

板塀へのへのもへじ懐かしい

八尾市 高杉 千歩

血圧を測り直している不調

和歌山県 三宅 保州

天ぷらをするたびなぜか作りすぎ

大阪市 渡部さと美

弔電披露順不同にもある順序

唐津市 宗 水笑

ふわふわとおいしい話春の耳

八王子市 播本 充子

予算より少し安目の肉を買う

寝屋川市 籠島 恵子

新しい恋で蓋する古い恋
大阪市 三浦千津子

自己採点いささか甘くなっている
寝屋川市 森 茜

往路徒歩復路はバスの散歩法
岡山市 井上柳五郎

二日ほど経って出てくる旅疲れ
東京都 岸野あやめ

八十一歳腹立つ事が減りました
豊中市 安藤寿美子

米を研ぐ自分が生きるために研ぐ
今治市 塩路よしみ

当たつたらを口にするなど叱られる
大阪市 前 たもつ

今日書こう明日にと遺書の白いまま
大阪市 星野きらり

遺書かいてはつと心が軽くなる
香芝市 大内 朝子

だんらんのひととき祖母の初恋記
唐津市 仁部 四郎

旅人に雨は幾度となく襲う
米子市 政岡日枝子

一人ぐらしの甘酒いつも飲み過ぎる
和歌山県 森下よりこ

都市砂漠風より寒い無関心
奈良市 乾 春雄

警報のやたらうるさい街になる
松江市 松本知恵子

大小屋に表札孫が書いた文字
茨木市 藤井 正雄

大小屋に大きな窓を描いている
大阪府 初山 隆盛

仏壇の扉開くと母が居る
高槻市 瀧本きよし

仏壇へ孫が受験でございます
兵庫県 中上千代子

居眠っていても相槌だけは打つ
堺市 村上 玄也

徘徊の母バトカーに送られる
唐津市 市丸 晴翠

亡き母と蓬を摘んだ春が来る
鳥取市 有沢せつ子

長考の煙草の灰が膝に落ち
枚方市 海老池 洋

大相撲座布団の舞うシーン待つ
唐津市 井上 勝規

J Aの手拭似合う父の首
東かがわ市 川崎ひかり

ウォーキング歩数が増える春陽気
奈良市 矢野 良一

たらの芽がハウスの中で目を覚ます
鳥取県 岩崎 和子

シンブルに暮せば年金で足りる
尾崎市 田辺 鹿太

絵のような家からも出るゴミ袋
樺原市 居谷真理子

進化論ヒト科はもはや蚊帳の外
豊中市 水野 黒兎

娘が嫁ぎ朝の騒音なつかしむ
和泉市 横山 捷也

杉箸の匂いは神様のおかげ
藤井寺市 太田扶美代

少し笑ったこけしお土産にひとつ
寝屋川市 富山ルイ子

浅ましいお世辞を言った自己嫌悪
吹田市 穴吹 尚士

飲む打つ買う男やもめの合併症
大和郡山市 坊農 柳弘

何もないから大切にする笑顔
大阪市 小泉ひさ乃

血圧計買うと血圧高くなり
横浜市 金森 徳三

地下茎をのはすわたしの天地まで
和歌山市 たむらあきこ

塀越えて用足しに来る癪な猫
河内長野市 坂上 淳司

オペラ歌手も演歌好きだとホツとする
シドニー 坂上のり子

疲れてる心が酒を飲みたがる
吹田市 太田 昭

死ぬ時は苦しいのだろ茶にむせる
大阪市 小栢こずえ

新品の靴底心まで弾む
鳥取県 谷口 次男

大阪市 神夏磯典子
金平糖に会うとやさしい顔になる

米子市 林 瑞枝
ミネラルの補給にとても良い便り

三田市 阪本 藤朗
花の芽を確かめながら春の道

倉吉市 松本よしえ
富士山が見たい窓辺の席さがす

京都市 高島 啓子
一泊の留守でも家は死に体

藤井寺市 鈴木いさお
かやくめし一番おいしいのはおこげ

大和高田市 鍛原 千里
春はいい転ばぬように気をつける

和歌山県 村中 悦男
奥様をなくした友のうすい影

高槻市 左右田泰雄
ラップでチンするとじやがいもから悲鳴

西予市 黒田 茂代
好きだけでは続けられないボランティア

安来市 原 煩悩児
出雲弁酒よりお茶がよく似合う

海田市 小谷 小雪
梅干しを送って海の幸もらう

米子市 青戸 田鶴
久々の友の便りに元気でる

高槻市 富田 美義
野の風に触れた心を持ち帰る

東京都 清原 悦子
頂上でひと味違うにぎり飯

交野市 田岡 九好
上の空で生きてこの世に雪が降る

出雲市 園山多賀子
負け犬が沈む夕陽に屯する

弘前市 高橋 岳水
小心でいつも真ん中辺にいる

大阪府 畑中 節子
立春の朝日くまなく枯れ草に

倉吉市 福光 京子
幸せの便りを運ぶ春の風

兵庫県 黒崎美紗子
待ちかねた種を蒔きましよ春の土

寝屋川市 長濱 賢山
バーゲンの朝から妻は腕まくり

唐津市 坂本 蜂朗
特大の画布を与える親心

西宮市 片山 忠
年金で妻との絆守り抜く

弘前市 宮崎ヒサ子
三年日記迎れば四季の花に逢う

境港市 遠藤那珂子
サケの味北の便りを食べている

西宮市 坪井 孝一
体脂肪数値と欲が一騎打ち

八尾市 村上ミツ子
男は度胸なんて昔のことらしい

米子市 白根 ふみ
輪郭がほんのり迷路抜けたらし

唐津市 北村 松風
メーデーの赤旗乱舞過去となる

芦屋市 黒田 能子
歳の差のもう無くなってきた夫婦

池田市 栗田 久子
自立した女多くを語らない

唐津市 久保 正剣
加害者を守る条文ばかりある

西宮市 西口いわゑ
誰彼に背中押されて生きている

三田市 北野 哲男
硬骨で奥さん以外菌が立たず

西宮市 門谷たず子
開き直って歩けるだけは歩こうか

尼崎市 長浜 美龍
微温湯につかって好奇心うせる

尼崎市 春城武庫坊
幕の無いドラマ続けて二人生き

大阪市 津守 柳伸
桃さくらあんに逢える草津の湯

羽曳野市 吉川 寿美
文才もなしありふれた女です

美作市 福原 悦子
耕せば生きる指針の畑仕事

松江市 三島 淞丘
人類が減び地球は蘇る

第21回 国民文化祭 やまぐち2006

川 柳 作品募集要項

～ 維新と川柳胎動のまち萩から ～

一、応募受付期間 平成十八年四月一日(土)～六月三十日(金)(当日消印有効)

二、応募規定

(1) 作品 一人各題二句詠(未発表作品に限る)
(2) 応募料 一人につき一、〇〇〇円

(但し、海外投稿者、身体障害者手帳の写しを添付された方、及び小・中・高校生は無料とします。)

(3) 応募方法 山口県市実行委員会作成の「作品募集要項」をご覧ください。所定の応募用紙を使用してご応募ください。
(4) 応募先 〒758-8555 山口県萩市江向510 第21回国民文化祭萩市実行委員会事務局へ郵送

三、宿題・選者(事前投句) 高校生・一般の部

雲Ⅱ平山 繁夫(兵庫) 開くⅡ岩田 笑酔(静岡) 土塀Ⅱ井上 博(徳島) 走るⅡ黒川正之進(奈良)

(事前投句) 小・中学生の部

雲Ⅱ波多野五楽庵(青森) 開くⅡ安藤 紀業(東京) 走るⅡ小林由多香(鳥取)

(当日投句)

翼Ⅱ住田英比古(大阪) きらきらⅡ渡辺 梢(埼玉) 夏みかんⅡ堀江 加代(千葉)

第二次選者

今川 乱魚(千葉) 柏原幻四郎(大阪) 木野由紀子(三重) 久保田半蔵門(大阪) 竹本瓢太郎(東京)

四、賞(予定) 文部科学大臣賞・国民文化祭実行委員会会長賞・山口県知事賞・第21回国民文化祭・山口県実行委員会会長賞・山口県教育委員会教育長賞・萩市長賞・第21回国民文化祭萩市実行委員会会長賞・萩市教育委員会教育長賞

(社)全日本川柳協会会長賞・山口県川柳協会会長賞

五、発表会場 川柳大会(当日投句受付、入選発表、選評、表彰式)

平成十八年十一月四日(土) 10時30分～15時30分 萩市民館

六、問い合わせ先と募集要項の依頼先 入選作品は、「作品集」として発刊し、応募された方(小・中・高校生は入賞者)に無料で配布します。

〒758-8555 山口県萩市江向510 第21回国民文化祭萩市実行委員会事務局 宛

TEL 〇八三八―二五―三五九〇 FAX 〇八三八―二五―三四二〇

七、主催者 文化庁・山口県・山口県教育委員会・萩市・萩市教育委員会・(社)全日本川柳協会・山口県川柳協会

第21回国民文化祭山口県実行委員会・第21回国民文化祭萩市実行委員会

誹風柳多留一篇研究 9

増田 忠彦・山口由昭

小栗 清吾・伊吹和男

山田 昭夫

清 博 美

53 公家ならばどふしなさるとかねを付

増田 「公家ならばどふしなさるか」といながら女がお齒黒をつけている、の句意とありますが、すつきりとする情景が浮かびません。ご教示をお願いします。こじつけの景を一つ。女がお齒黒をつけている傍らで男が「女は厄介だな、毎朝面倒だし、それに臭いだろう、男に生まれてよかったぜ」などとお節介なことをいうのに、女が「そうおっしゃいますけれどね、あなた、もしお公家さんだったらどふなさるの」とやりかえす。

山口 女が鉄漿をつけている場面で、男が「まるでお公家さんのようだ」と言ったのに対して「公家さんだったら私をどうします」

という一種の媚態ともとれるが。

伊吹 公家のむこひつ付合てかねを付ケ

明四桜 2

と、男性であつてもおかしくない。

山田 礎のような場面であらう。

清 措辞不足で、いろいろに解釈できそうである。

54 けいせいにくめられて居る惣仕舞

増田 妓楼を買い切りにする物仕舞、一番の広座敷が集まった遊女たちで埋められる。

山口 賛。金もかかるがバラダイス。

小栗 物仕舞をした客が、遊女に取りまかれ

ている、ともとれるが。

伊吹 賛。座敷もお大層も。

山田 賛。小栗兄説の方が面白い。大いにやに下がっている。

清 小栗説でしょう。

55 きせるにて届かぬと妾う人をよび

増田 キセルをのばすのが限度、見えている物を取るにも人を呼び使う。妾の不遜。

小栗 賛。

ついそこに有つても妾人をよび

四 23

山田 賛。小栗兄引用句そのままの景。

清 賛。

56 あなとつてげい子合イの手なしに弾

増田 宴席で客の下手なやはり唄に三味線を合わせる芸子。客をみくびつて合の手（間奏曲）などは省いてしまふ。客は留守居か浅黄裏か。

山口 賛。合の手を入れても入れなくてもいいくらい下手なのだ。

小栗 賛。合の手は、邦楽で、歌と歌との間に楽器だけで演奏する部分（「日国」）。ちゃんと弾いてやると、

合イの手を弾くのにめつたうたふなり

安一亀 1

ということになるほど下手なのである。

清 賛。

57 かんざしでかきやと山出ししかられる

増田 頭をかくのにはかんざしを使いなさい、と山出しの下女が内儀にしかられている。下女は何でかいていたのでしょうか。

小栗 賛。太い指でガリガリと。

清 賛。

58 角田川二十三な子をたつね

増田 隅田川での子共探しといえは、いたくない梅若丸（隅田川）では十二歳）と決まったのですが、今の世は二十三の息子を母親が探している。ドラ息子をつたねる母親。

山口 賛。息子は吉原です。

小栗 賛。

角田川今でも母に苦をかける

廿三の子の尻も母ぬくひ

五三六
二七二三

清 賛。

59 赤イかと御さいに顔を見て貰ひ

増田 酒の色がまだ残っているか、と女中が

供の御業に顔を見分してもらっている。代参で外出した御殿女中が、芝居茶屋から出た茶屋に寄り道をしての帰り。

小栗 賛。少しくらい赤くても帰らねば門限に遅れる！

行方内にさめると御業せりたてる

安元天1

清 賛。

60 見る人の無イが紅葉の名所なり

増田 正灯寺や海晏寺の紅葉狩りを口にする男は多いが、売り所の口実にされるばかりで素通りしてしまふ。江戸では見る人のない所が紅葉の名所になっている。

小栗 賛。紅葉を口実に遊里行き。

松洞寺何かれつばとすぐ通り

海あん寺真赤なうそのつき所

六三八
四三

清 賛。

61 入むこの謡四五人の弟子がつき

増田 入り婿の若い男が謡の稽古場をはじめたら、さつそく弟子が四五人ついた、という句意。なにをいいたいかよくわからず、こ

教示をお願いします。

婿に望まれるほどの真面目男だから、謡も遊び半分で身につけたものではない、あの謡は本物だぜという評判。謡とは別の意図を持つひやかしの悪友たち、敵は美人の内儀か、あるいは婿の幸運をやつて元で元の遊びに引つ張り出そうとでもいうのでしょうか。いずれもすつきりしません。

入り婿の座をねらつての弟子入りとするのには、字句に無理がある気がします。

山口 よく分からない句である。

安元仁5

入りむこと間男迄にあなとられ
入りむこか居るに男とちくるひ

安八信3

などの句があるから礎説でもふれている通り、美人の内儀を張りきた男達ではないか。いずれにしてもプロの稽古場を開くのはおかしい。アマチュアのサークル。

小栗 謡講を売って吉原へ行くドラたちとは違つて、入婿の悲しさ、

吉原さなど、入婿謡講

第三二七

と謡の練習に励むものだから、他人に教えられるほどに上手になったというわけ、という説明をしないと、句の本当のネライが分からない。

清 小栗説賛。

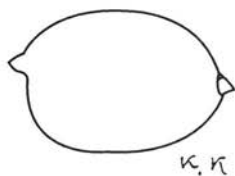
共選欄

檸檬

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)



「ほんのり」

仁部 四郎 選

コーラでもほんのり酔える幹事役
 ほんのりと酔うて候ボージョレ酒
 ほんのりの酒にとどめて達者です
 ほんのりのあたりで止めるいい酒だ
 充電の欄ほんのりと和ませる
 ほんのりでやめれば失敗しない酒
 会釈してシャネルの五番すれ違う
 自画像にほんのり紅を差しておく
 髪染めて妻が女を匂わせる
 同伴の妻はほんのり化粧する
 ほんのりと少女を抜ける薄化粧
 退院へ紅ほんのりと朝の窓
 泣きますか笑いますかとおぼろ月
 ほんのりの味を楽しむフルムーン
 ほんのりと処女の香りのするレモン
 校門の桜ほんのり過去を追う

茨城県	葛西	清
鳥取市	徳田ひろこ	
大阪府	升成	好
美作市	小林	妻子
和歌山市	松原	寿子
唐津市	久保	正剣
唐津市	山口	高明
香南市	桑名	孝雄
今治市	塩路よしみ	
三田市	久保田千代	
羽曳野市	森下	一知
富田林市	片岡智恵子	
米子市	中井	ゆき
大阪市	鶴田	遠野
黒石市	相馬	一花
松江市	津川	紫晃

「ほんのり」

藤田 泰子 選

一合がほんのり孤独温める
 かすかなる殺気ただよう名刀展
 団栗の集いほんのり平和主義
 ほんのりのあたりで止めるいい酒だ
 紅をひくだけの十八ほんのりと
 ほんのりと残り火かしら桜餅
 郵便受けにほんのり春の気配する
 ほんのりと時が漂う流し難
 ほんのりと少女に戻る十三夜
 ほんのりと香華が揺れる寺の鐘
 ほんのりと万作山を春にする
 沈丁花ここにいますと匂わせる
 告白をしそうほんのり回る酔い
 平均寿命生きてほんのり紅を引く
 ほんのりと匂うあなたの膝枕
 定期券ほんのり桜三分咲き

和歌山市	たむらあきこ
京都市	高島 啓子
大阪府	高木 道子
美作市	小林 妻子
三田市	久保田千代
橿原市	安土 理恵
尼崎市	春城武庫坊
唐津市	宗 水笑
和歌山市	桜井 千秀
大阪市	川端 一步
弘前市	福士 慕情
兵庫県	中上千代子
大山市	金子美千代
唐津市	市丸 晴翠
和歌山市	玉置 当代
大阪市	津守なきさ

ほんのりと春風にのる良い噂
 手鏡のほくにはほえむ詩がある
 仁丹の匂いが似合う父だった
 アベツクをほんのり照らす春の月
 ほんのりと残り火かしら桜餅
 ひし餅のよもぎほんのり亡母匂う
 勲章と思えば傷もあたたかい
 ほんのりと七十歳はいいお歳
 これが孫ほんのり春に包まれる
 ほんのりと恥らい母の車椅子
 ほんのりを抜けて激しく脱皮する
 追伸の一行ほんのり彩がでる
 ほんのりと酔うた程度でやめなはれ
 同窓会ほんのり化粧して行こう
 かすかなる殺気ただよ名刀展
 アロマセラピーりんご一つを置く机
 紅少しつけて夫を待っていた
 お接待弘法大師のお手のよう
 ほんのりとしてゆつたりの酒になる

秀句

軸吟

和泉市	横山	捷也
弘前市	相馬	銀波
和歌山県	三宅	保州
尾崎市	田辺	鹿太
橿原市	安土	理恵
鳥取市	岸本	孝子
弘前市	高瀬	霜石
東大阪市	谷口	義
篠山市	遠山	可住
和歌山市	福本	英子
富田林市	池	森子
和歌山市	楠見	章子
大阪市	古今堂	蕉子
米子市	門脇	晶子
京都市	高島	啓子
堺市	矢倉	五月
京都府	稲葉	冬葉
今治市	渡邊伊津志	
堺市	奥	時雄

ほんのりの味を楽しむフルムーン
 まだ恋もしてます喜寿の薄化粧
 ほんのりと生きてほんのり夢をみる
 ほんのりと大阪弁で誘われる
 糖衣錠ほんのり甘い舌の先
 ほんのりと空気が甘い弥勒仏
 枯野にもほんのり色香のせて春
 ほんのりと命の讃歌春がすみ
 酒とろりほんのり酔って甘えたい
 ひとくちでほんのり口が軽くなる
 背信がほんのり匂う午前さま
 ほんのりが今のわたしに欠けている
 紅少しつけて夫を待っていた
 ほんのりと蓄は自我の色を増す
 実家もうほんのり出来るところでなし
 命抱く土ほんのりと暖かい
 ほんのりと春の刹那を抱いている
 びん付けとくる大阪の春の場所
 百恵の風にはんのりしびれてる
 泣きますか笑いますかとおぼろ月
 勲章と思えば傷もあたたかい
 タラの芽よ春はほんのりホロ苦い
 ほんのりと時の流れの為すまに

秀句

軸吟

大阪市	鶴田	遠野
箕面市	出口セツ子	
枚方市	伊達	郁夫
芦屋市	黒田	能子
西脇市	七反田	順子
浜松市	杉浦	恵夢
鳥取市	吉田	弘子
相生市	村木	信子
東大阪市	北村	賢子
八尾市	高杉	千歩
奈良市	米田	恭昌
堺市	矢倉	五月
京都府	稲葉	冬葉
和歌山市	榎原	公子
宇都市	平田	実男
熊本市	永田	俊子
富田林市	池	森子
堺市	志田	千代
八尾市	宮西	弥生
米子市	中井	ゆき
弘前市	高瀬	霜石
藤井寺市	太田扶美代	

鯉

高野 宵草選



鯉織団地サイズで終りそう
池の鯉七時になると顔を出す
いい鯉をあげて悪友呼び寄せる
海に住みまだ鯉くも知らず老い
宮邸の空で泳げよ鯉のぼり
五十鈴川鯉も一緒にみそぎする
鯉の街清水大事に守ってる
家族だと思ふ鯉です話しかけ
家の猫さすが高値な鯉狙う
少子化に菌どめの乱舞鯉のぼり
失恋と知らずに鯉が寄ってくる
錦鯉の知らぬことです超高値
山古志に早く戻れよ鯉の群れ
鯉を飼う池がないから金魚鉢
あぶくブクブク文句の多い鯉である
観光地津和野の鯉は肥満気味
園児みな個性豊かな鯉振って
ひな節句過ぎた途端に鯉泳ぐ
鯉口を切ったばかりにとばされる
大国はすぐ鯉口を切りたがる
鯉織見えず少子化進む路地
絵手紙の鯉は元氣におどり出る

かずみ 勝 視 かおり あずま みのる (岩) 康子 ルイ子 晴 翠 弥 生 充 子 すす 東 吉 那珂子 扶美代 正 剣 五月 宗 明 恭 昌 修 セツ子 敏 子

ひよいひよいと成金御殿に跳ねる鯉
滝登る鯉の力を子に願う
諦めのいい鯉わたしなら騒ぐ
サバイバル賭けて組上の鯉になる
滝登り知らぬ鯉ですニートです
主という鯉にもあつた浮き沈み
初産に鯉の料理をさとの母
鯉こくの流動食に義母の笑み
竹の園待つております鯉のぼり
青い眼がまぶしく仰ぐ鯉のぼり
あらいより私は泳ぐ鯉がよい
五月鯉少子化の世を背負われ
空泳ぐ鯉も空気がまずかるう
瀬を上る鯉も大志を抱いてる
急流を泳いで見たい池の鯉
佳
医者の腕信じて眼閉じる鯉
色彩が決める運命を鯉知らず
給料と比較して見る緋鯉の値
包丁も刀もイヤと鯉は言い
掛軸の値踏み鯉の目が刺さる
人
郷里にもう鯉がこがれる滝がない
地
まな板の鯉を日本にダブらせる
天
許すとは言わずに届く鯉のぼり
軸
鯉のぼり腕白だらう尾が跳ねる
虹 汀 日出子 日 恵 岳 水 愁 女 北 朗 章 久 方 子 代 (志) 千 子 章 司 遠 野 こずえ 小 雪 不 二 深 雪 俊 子 雄 々 四 郎 英 子 霜 石 寅 次郎 渡辺富子

お 茶

蘭田 猿杵選



良いニュース見つけた朝の茶がうまい
茶どころと縁は切れぬ新茶くる
くよくよを曳きすっている午後のお茶
お茶請けが来たとお隣から呼びに
田の畔で腰を揉み揉みお茶にする
赤もうせん野立のお茶に風薫る
お茶飲んで行けと田舎の温かさ
これからの戦いが待つ朝のお茶
肥えた舌お茶のよしあし選り分ける
方言のお茶接待が温かい
ボトルにもまたそれなりのお茶の味
年金の暮らした慣れた午後のお茶
旅帰る茶漬けを食べてどっと寝る
富士山とお茶とみかんのおらが故郷
ひとり暮らしはつと三時のお茶にする
満腹と言いつつやはり茶で締める
新人はお茶にしようの声を待つ
貴婦人と一緒に茶会気が疲れ
お茶だけで女の話限りなし
折角のお茶も冷めます長電話
お茶菓子に前に説教長すぎる

玄 也 勝 巳 扶美代 英 子 秀 四 順 子 順 子 孝 一 久 峰 俊 子 九 好 道 子 一 壺 いさお たす子 冷 子 東 吉 雄 々 シマ子 弘 風 時 雄

初歩教室

題——そうだ

三宅保州

3Sを心掛けた作句を

次の「3S」を念頭に置いて作句すること
を常に心掛けてほしいものです。

Style——スタイル——形
Sense——センス——感性
Spirit——スピリット——心

定型の「形」を基本に、「感性」の良い、
作者の「心」が存在する句を心掛けると、自
ずと佳句が導き出されるものです。

今回の題の「そうだ」は皆さん苦勞された
ようですが、その苦勞を重ねることが、今
後の作句力に生かされることでしょう。

【同想句】

原 会議ではそうだとすぐ賛同 宣子
添 根回しでそうだと多数決
原 多数決そうだと多数決 幸雀
原 多数決そうだと押し切られ 秋星
原 意見なくそうだと議事進む 孔一

原 何事もそうだと云う族 順子
【添削・批評句】

原 そうだやっぱり信じるよ サキ子

破調すぎます。定型を心掛けましょう。

添 泣いているそうだとやっぱり信じよう。

原 旧暦でそうだと私の雛祭り 萌

添 旧暦で間に合いそうだと雛祭り

原 そうだった弥生三月申告期 千華

添 そうだったもう三月の申告期

原 誕生日尾頭つきで想い出し 章司

添 尾頭付きそうだったのか誕生日

原 あ、そうだった今日は結婚記念日だ 善江

添 そうだった今日は結婚記念日だ

原 あっそうだと追伸に又書き添えて 貞月

添 あっそうだとまた追伸に書き添える

原 約束を忘れてそうだと今日の日を 稚代

添 あっそうだと約束忘れ大慌て

原 勝てそうだった時に打つ悪手 たん吉

添 勝てそうだったと思ったときに打つ悪手

原 高そうだと値段さくのはやめておく 亜希子

添 時価という値段如何にも高そうだと

原 勧誘も裏ありそうだと高利潤 松風

添 裏がありそうだと儲かる話には

原 鬼が留守そうだと出前で寿しにする ミヨノ

添 鬼の留守そうだと特上寿司を取る

原 お粥さん土鍋で炊いて旨そうだと 柳節子

添 土鍋で炊いたお粥がとても旨そうだと

原 この味がそうだと本場のウーロン茶 柳歩

添 そうだったのかこれが本場のウーロン茶

原 杉木立花粉の雨が降りそうだと みのる

添 花粉の雨降って来そうだと杉木立

原 そうだと歳相応ですよと医者は言う 道子

中十音字はいただけません。

添 そうだとね歳相応という主治医

原 鞆中降りそうだと傘を折る 開子

添 降りそうだから鞆に傘を入れて行く

原 老いの目に孫の無邪気が良いそうだと 信子

添 孫という特効薬が良いそうだと

原 一病息災過ぎそうでも逝かず 象山

添 一病息災まだまだ生きていけそうだと

原 死にそうだと何度も子らを出して 乃りこ

添 死にそうだと何度も子らを呼ぶ

原 来るそうやいやまたでと大地震 藤朗

添 来るそうだがいつかわからぬ大地震

原 あの人の談義は長い早よ逃げよ 冷子

添 長話になりそうだから早よ逃げよ

原 相談もそうだとわねえと回答なく みね代

添 相談もそうだとわねえと生返事

原 生返事そうだとすうすうとは言えず 光子

添 そうだとは言い切れなくて生返事

原 そうだねえ相槌打って子と語り 映子

添 そうだねと相槌打って聞き上手

原 口先でそつだそつだと風見鶏 つよし

添 風見鶏そつだそつだと空回り

原 そつだよねいつもあいつち丸く生き 満子

添 そつだねと相槌打つて丸く生き

原 そつだ生きるため心を丸くする 利子

添 そつだ明日からは心を丸くする

原 そりやそつだと自分の心を忘れてる 俊子

添 そりやそつだけどと自分を主張する

原 孤立無縁そつだ怖れる何もなし 徑子

添 孤立無縁そつだ怖れることもなし

原 噂風そつだそつだと伝え来る 那珂子

添 そつだつたのか風の噂に乗せられる

原 いけそつだ思つていても出来ずいる 河洋子

添 できそつだど暗示を掛けてやり遂げる

原 ベテランの助言に思わずたたく膝 賢治

添 ベテランの助言にそつだなどと思う

原 そつだつた昔教えてくれたこと みち代

添 そつだつた亡母が教えてくれたこと

原 仲よしの二人結婚するそつだ (白) 信子

添 あれ二人やはり結婚するそつだ

原 そつだ子は自分の世界持つ大人 のり子

添 そつだ子も自分の世界持つている

【少し工夫すると佳くなる句】

原 異議ありへそつだそつだの応援団 孝明

添 異議ありと言えはそつだと言えものに

原 長生きが出来そつだみんなやさしくて キヨミ

添 みんなやさしくて長生き出来そつだ

原 誰だつけそつだ隣の小西君 昇

添 誰だつけそつだ隣の息子さん

原 美人の湯とくに美人に効くそつだ 雅明

添 美人にはよく効くそつだ美人の湯

原 どうしてもそつだと言えぬ線がある はじむ

添 そつだとは言えぬ線がある 智加恵

原 想い出すそつだそつだの父のくせ

添 父の癖そつだそつだと思ひ出す

(以下、一部添削した句もあります)

若者と走りそつだな歳忘れ 賢山

そつだそれ急げ間に合う終列車

旧友とそつだそつだと呑み明かす 美恵子

そつだよね皆を納得さす意見 寿々女

初鳴きにそつだ心の窓も開け きぬ子

反対もしないがそつだとも言えぬ 起世子

【佳句】 武

仲直り今朝できそつだ茶が旨い 和子

そつだつた古い日記がなつかしい こずえ

退屈死しそつだなんて贅沢な 益子

空いてるが女性専用車だそつだ 寅次郎

ライバルはボクシング部に居たそつだ 浩三

またいつか流行りそつだと古着増え (高) 洋子

そつだ哀土への切符キャンセルしておこう イセ

よしそつだ革靴脱いで出直そう 清

そつだ春新調の靴歩き出す 弘子

そつだつた後悔だけはしたくない 福世

そつだつたあのひと言が多かった (吉) 節子

そつだねと言えは誰かを傷つける アヤ子

妻の愚痴そつだそつだと聞いてやる 早人

ストレッチこれくらいなら出来そつだ 千代子

背が伸びたそつだピラティスしてるから 忠子

(注「ピラティス」は流行のヨガの一種)

振り向いたそつだね夢を見たのかい ただよ

【今月の推せん句】

そつだつたやはり私も日本人 中宇地秀四

五輪の応援や外国旅行では実感するもの。

切り替えてみるとそつだと解ける謎

発想の転換や視点を変えることの大切さ。 坂部かずみ

そつだねと言う妻が居て頑張れる 吉村 幸

それが活力であり最高のしあわせ。

そつとしておいてやるのがよさそつだ

時と場合には何よりの思いやり。温かい句 毎田 信雄

はほのほのとさせられます。

【私の句】

そつだつた母もおんなであつたのだ

発見がありそつだから途中下車

秀句鑑賞

同人吟 川端 一步

— 4月号から

初心者ばかり十名で川柳勉強会をはじめ昨年十二月で五周年を迎えました。

テキストは川柳入門書と毎月の川柳塔誌の

「秀句鑑賞」「初歩教室」を使っています。

いちばん楽しいのは「秀句鑑賞」の輪読と意見交流の時です。「何でもこんな上手な句がつくれるねん」から回を重ねると「この表現にしびれる」など一人前のセリフまでに……みんながいちばん腹に染みて、重宝にしているのは「初歩教室」はじめ数行のやさしい提言・柳論です。

お蔭をもつて会員の中から誌友や同人も生れ、本社句会にも出席して、一句抜けたら欣喜雀躍、その正直さ新鮮さを目の前にして嬉しい限りです。

「秀句鑑賞は柳誌のエッセンス、そして達意の文章を学んで下さい。一年先のあなたは手紙がすらすら書ける」と宣伝してきただけに、この担当は面はゆい気持です。

一八七九句から二十句を選ぶことは広い砂浜からダイヤを探すような苦勞でした。

花吹雪友は地球の裏側へ

（本間満津子さんブラジル永住）

神夏磯 典子

勉強会で「本間満津子さんという目の見えないすばらしい川柳作家がおられます」と話しますと「その方なら知っています。むかしヘルパーをしていた時にお世話をさせていたできました」といわれ、偶然の縁にびっくりしました。ブラジルにいる息子さんと一緒に暮らされるとか、大変でしょうがみんなで彼の地のお元気を心から祈りましょう。

少子化の世にサボテンの子だくさん

乙 倉 武 史

国民の関心が高い少子化をとらえて、サボテンの子だくさんとは憎いほど上手な表現、下五で国への願いを静かに訴えています。

たがやせ母の大地はよく笑う

山中 康 子

日本の農業技術は世界に誇るものなのに、外国に胃の中まで握られてはご先祖さまに申し訳がありません。作者の「大地」は他のこ

とも指しているように思いますが……

東京の冬空に描く胡蝶蘭

播 本 充 子

この句は作者の決意と仲間へのメッセージと受けとめました。路郎先生の川柳への情熱の片鱗を見た思いです。凜と大きく咲いた胡蝶蘭を心から期待します。

かんざしを挿して句集を嫁がせる

林 瑞 枝

「作った句は自分の分身」と小出智子さんに教われました。その集大成から選りすぐり作った句集はまさに秘蔵っ子。上五のかんざしが作者の句集への思い愛しさ、情がにじみ出てぼつとした温さを感じました。

雪国のハンディみんな分かるうよ

谷 口 次 男

記録的な豪雪で死者百数十名の被害。何もできない自分を情けなく思います。

せめてこの訴えに応え、ベンの方でこの地へ政治が届くようにしたいと思えます。

そつとしておくのも深い思いやり

録 沢 風 花

時節柄、入学入社、ときには恋愛の失敗もあるでしょう。家族なら一層気になります。でもとりあえずはそつとしてあげましょう。隣の部屋で老夫婦のヒソヒソ話。

添いとげるつもりあくまでもつもり

安土理恵

ただただ感嘆するばかり、これほどしなやかな言葉でおんなを表現した句は今まで出ていません。「あくまでもつもり」が憎い。

増税のボディーブローが効いて来た

井伊東吉

税務署に不満や抗議の電話が殺到しているそうです。六月になれば新しい課税が来ます。いよいよノックアウトになりかねません。時期をとらえたヒット作品。

お薬を飲まないことにして元氣

藤田泰子

薬害で身内が入院した経験があります。「飲まないことに」がおもしろい。日常茶飯事をうまくとらえています。

小さい椰揄「元氣」がいい。

ほんもののパッションにおうピカソ展

飛永ふりこ

ある高校の先生が勧めてくれた「絵の本」でピカソの「ゲルニカ」を見て感動しました。まさにほんもののパッション（情熱）にふれて人間ピカソを知りました。

作者の絵画への思いはとてペンにできません。

歳月をのせてまあるくなった背な

政岡日枝子

ゆっくり声を出して読みました。まるで母親が読んでくれる童話を聞いている響きがあります。自然体の美しさに魅かれました。

悪筆は俺だけでない安堵感

蘭田猿杓

この句にどれだけ多くの「俺もだ」という共感があったことでしょう。川柳は共感の文学です。私も大悪筆、連帯の握手。

手漉き和紙の賞状しかと子等巣立つ

小白金房子

子どもたちが手漉きの和紙を作っているテレビを見ました。賞状を受け取った子どもたちの笑顔が彷彿と浮んできます。

悔しくて奥歯をギョツとでも入れ歯

江見清

ユーモアの句が少ないと言われています。久し振りに爽快な句に出合い思わず吹き出しました。さすがが人生の達人です。

質問に医者のかぎりお歳です

北野哲男

お歳です。言われた人が多いと思いがましました。でもねお医者様、人は成熟するにつれて若くなる（ヘッセ）と言いますよ…。

白旗をあげているのにまだ攻める

浅野房子

白旗と言えば沖繩の少女をいつも思い出しますが、この句はもっと身近な日常生活の出来事でしょうか、白旗を上げた攻めなののが武士の情け。作者はきつと優しい人。

呼び水をしないと脳が働かぬ

谷口義

まったくの同感。この句を読んで僕も私もと共感のメールが作者に来そうです。呼び水がいい見付け、あなたの呼び水は何ですか。私は「ユーモア一日一言」が呼び水です。

湯たんぼの効用今に平成に

井上森生

この冬、湯たんぼが「省エネ」と「安全」の理由で見直され売り切れ増産とか。作者は湯たんぼを取りあげていますが、外にも忘れられているものはないかと問うています。

お手洗いにいこうか長いコマーシャル

高田美代子

本当にコマーシャルの間はいない方がいいのです。ものの本によりますと、くり返されるメディアに長く対置していると、感覚人間になって理性が働かなくなるそうです。だから私は一人の時は消音対策をしています。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 4月号から

中居善信

残雪よ汚れは悲しみの証し

やまぐち 珠美

私の住んでる大洲市は東野太八さんの生まれ里でもある。一般的には温暖な土地と言われているのだが結構雪が降る。三十センチくらいは毎年降っている。四―五日で消えて無くなるのだが、北受けといわれる場所では根雪となつて何時までも融けない。農夫たちはじつと春の来るのを待っている。雪はだんだんと汚れをましてゆく。雪の汚れは農夫の忍耐のようにも見え、農夫の強さにも見える。

人間が好きで指切りしてしまふ

塩路 よしみ

そうなんですよね。何度も何度も裏切られた思いがあるのに、何時かその痛みを忘れる。そしてまた指切りをしてしまふ。人間が好きでたまらない。

天皇もきつと胃薬飲んでゐる

河川 無限

今、皇室典範が騒がしい。愛子様が天皇になられるのはいい。だが愛子様が成人してどこかの国に留学をし、青い目の青年と恋に落ち結婚される。そして青い目の子供がお生まれになる。そのお子様が天皇になられるのは困る。ここまで来ると何とも言いがたい。右往左往している陣笠、僕たちも胃が痛む。軽く流して、とてもきつい風刺、胃薬から後が面白い。

身構えて深い帽子とすれ違ひ

関本 かつ子

怖いですよね。隙一つ無い服装で深く被った帽子、得体の知れない女（おとこ）とすれ違ひ、挨拶もしない、目にも動きがない、何を考へているのか？予測できない。

だんまりの夫婦におかき割れる音

中井 萌

とても大きな声で話してる夫婦、口数の少ない夫婦、何方も夫婦なのだが、どっちが正しいとは言えない。この夫婦、きつと仲のいい夫婦だと思う。「おかき割れる」何とも温かい響きが漂ふ。

この句からするとある程度の年を召された夫婦と思える。いい句だ。

信じてはもらえぬ過去の人見知り

青井 はつえ

人間、五十年も七十年も生きていけると化けの皮が剥けたように変身してしまふ。

べらべらまくし立てる、話の中へ入り込む、うっそー、と友達に言われる。

嗚呼平和とさくら吹雪を見ていたリ

加藤 権悟

いい人生なんだな、はらはらと桜が落ちてゐる。働いた過去の苦労は何処へやら、戦後の物不足も、子供の学資の事ももう心配はない、桜の散るさまをじつと見ている。

豆腐屋の湯気の向こうはあたたかい

清水 英旺

朝、寝起き様に散歩がてら豆腐を買いに行く。豆腐屋の夫婦がせつせつせつと湯気の向こうで働いている、仲のいい夫婦である。湯気の向こうが効いている。

灰になるまで賞味期限を切らさない

花岡 順子

賞味期限を聞かれたら、火鉢の灰をつくのもいいだろう。

山古志を知り津南町また覚え

寺井 柳童

ドナーカード一枚だけが我が遺産

上垣 キヨミ

元氣なうちの

辞世川柳

井上桂作

大昔から仏教では、この世は「無常」と説いていました。わかり易く言えば、この世は「はかない」ということです。無常が人の命を奪い去ることを、花を散らす風に譬えています。我が国では死という矛盾に気づきながらも、譬え死んでも魂は生き残るものと教えられてきました。仏教で、人間は生前の行いしただと説いてきたのは、生命の連続性を大事にしようとする考えでしょう。

人は今の暮らしを見直したり、自分の辿ってきた生涯を振り返ったりして、その有り体を想像します。そうして今の心境を述べようとして「辞世の歌」を詠むようになります。同じ短詩型文芸でも「短歌」では昔から世を辞するに際して、自己の生涯や覚悟を詩歌に託する習慣がありました。

最近、季語も季節もおき離れた「辞世の俳句」が、川柳らしい難解の森に誘いこんでいます。俳句は川柳に最も近い親戚であり、

歴史が古いだけに、油断ならぬ隣人でもあります。川柳の表現力を回復するには、その歴史を学ぶことが大切であると学者は説いています。

川柳による辞世の句は、余り見かけないように思われましたが、毎月拝見していますと『川柳塔』にも、それこそ「元氣なうちの辞世の句」が観られました。今回はまず川柳塔の自選集の中から、引用させて頂きます。

一つぐらいの秘は墓場まで持つていく

ペテランの女性作家八木千代さんの句は、毎月のように拝見しています。本当に女性らしい詩と言われる先生の句は、月例会のお話のとき、度々引用させて頂いています。人間の死は、すべて「無」にひとしいと言われてきました。一つぐらいは墓場まで持つていくかないものか、誰しも考えることかもしれません。元氣な間はなにくれと考えるのも楽しいことでしょう。

本当の幸せは今生きている 田中 正坊

この句は尊敬する正坊さんの句で、八十路を過ぎて元氣で作句に活躍中の人なればこそ、このような句が生まれたのでしょう。現代人は死を迎えることがわかっていても口にしたくない。そう考えておくと案外安心して生きられるかもしれません。安心して生き

れることほど幸福なことはありません。

残照見事生きるべし笑うべし 奥田みつ子
笑いながら生を全うできる幸せに越したことはありません。大空や山頂などに残っている夕日の光のようにありたい。決して見苦しい老いにはなりたくないとする決意のほどが窺えます。川柳塔では千代さんと並ぶ老練な女性作家の一人です。

同じように自選集の作家で、例会などで指導仰いでいる阿萬萬さんの句に

甘えかも知れんが老いの夢を持ち

人間、年老いても夢を持ち続けながら生きている人は本当に幸せです。これからは老人が増え、しかも少子化で遠慮しながら生きていかねばならなくなります。そう思うと老人の夢ははかなく消えるのではないか。川柳はお互いに、人間真実の諷刺詩であるから、私も老人として胸を打ちます。

余生とは侘しき言葉 蟬時雨 石堂 潤子

悲しいことに我々は自分の脳に入ることしか理解できない。余生を「安楽」などと言われても誰でも不安になるのは当然です。蟬時雨は、セミががしきりに鳴き立てるさまを、時雨の音に例えている言葉のようですが、比喩的には、死を控えて涙を流すことも言われています。

川柳と

クラシック音楽

藤井 則彦

川柳を嗜む方にクラシック音楽ファンは沢山おられるが、私もその端くれである。

クラシック音楽は明治時代の脱亜入欧の尖兵として入ってきたもので、学校教育にもいち早く取り入れて普及が図られた。昨今はCMで流れたりして大分日本人の暮らしに溶けこんできたが、まだちよつと取り澄ました感じで、歌謡曲や演歌ほどには馴染みがない。そんな中、これまでの川柳にクラシック音楽がどう詠まれてきたのか少しく興味があったので、私なりにひもといてみた。

一つは作曲家の名前を入れた句である。その人となりや曲から浮かぶイメージが句趣を引き立て、曲の雰囲気も連想できる。

ぜいたくな居眠りバツハ聞きながら

田中 正坊

ハイドンを聴く醍醐味は晴れた空

田中 光夫

過去すべてベートーヴェンで送り出す

鎌田やす子

シューベルト只今見合い中の部屋

梶川 一譜

初恋忌ひとり聴いてるブラームス

松田 浩子

次は曲名や演奏家名が入った句で、メロデ
イがつい口をついて出てくる。

ローレライふと口ずさむ亡母の影

星野ひさ子

ハーレルやみんな神の子美しい

森田 文

永遠の今をボレロが繰り返す

小池 正博

魚河岸でババロッティに似てる声

立石雄枝子

クラシックの句で一番多く見られるのは楽
器が登場する句で、そこには視覚が伴うから
演奏者の姿とも相俟って読む人の胸を打つ。

漆黒のピアノから出る海の音

橘高 薫風

オーボエを吹く頬に風本に風

時実 新子

バイオリン鼻梁の高き人が持つ

森中恵美子

尋常の姿で吹かぬサクソホン

月原 宵明

愛されているフルートのいい音色

国清 佳子

四番目はクラシック音楽の言葉が直喩的であ
るいは隠喩的に巧みに入れられた句である。

手術なお交響曲が鳴りつつけ

橘高 薫風

名曲をゆつくり聞いている仏

小出 智子

指揮棒の先に無数の音がある

谷藤美智子

シンフォニー宇宙の果てを想わせる

上野 峰子

紙幅の関係でごく一部を概観するに止まっ
たが、今後このような佳句に出会った時は
耳を研ぎ澄ませて味わいたいと思う。



久保まさおさんを偲んで

奥田 みつ子

「今日もまさおさん来ておられるかしら」と皆で話し合いながら、句会場から昼食会の孤山茶屋に向かうのが常でした。予約してある部屋への入口に近い席で、まさおさんはここにこそ私達を迎えてくださいました。軽い脳梗塞でしばらく休んでおられ、その後、「句会が無理ならせめて昼食会だけでもお顔を見せてください」とお誘いしたのでした。

その笑顔が見られなくなつて四ヶ月、御入院と伺つて、皆で寄せ書きしましたが、二月十九日朝、奥様から「二月十六日にまさおは亡くなり、十八日に葬式を済ませました。」とお電話がありました。思わず「何故知らせてくださらなかったのですか」とお尋ねしましたら「身内だけで済ませ会社関係にも明日知らせることにしているのです」とのことでした。すぐ御自宅にお参りして、ローズ川柳会の皆様の分も心をこめてお線香をあげさせて頂きました。

まさおさんは熊本の旧制五高から京大を出られ住友化学で要職を務められたエリートでしたが、とても細やかな心遣いをされる優しい紳士で、ローズ川柳会の皆さんとも気さくに話して、時にはメダカに熱中して、メダカの飼育の講義もしてくださったほどです。

まさおさんが川柳を始めたきっかけは、先に朝日カルチャーセンターで川柳を受講しておられた奥様から頼まれた「川柳でんでん太鼓（田辺聖子）」を図書館から借りて読まれ、面白かったので御自分も川柳をしなくては。西宮ローズカレッジを受講されたそうです。

それが平成四年のこと、その三年後、阪神大震災でローズカレッジが閉講となりローズ川柳会となつても熱心に川柳を続けられ、平成八年に同人となられ、十年出版の合同句集『ローズ』にも参加されました。

いくさなき地球を祈る福寿草
メーデーをそつと見上げる赤い薔薇

いのち千せと梅雨のはれ間や雨蛙
気にかかる友の入院つゆ明けず
八月のいのち見つめる朝の露

また平成十六年の『ローズⅡ』にも出句。

震度七吾がゴーマンを打ち砕く

長城で太極拳舞う古稀の春

友眠る高潮つづく北の海

北の海風鳴り止まず友の声

遅れてもおいでおいでと芒の穂

いつの日か母に会えそう天の川

友の計を知るや知らずや曼珠沙華

人生マラソン走りつづけて八十路かな

海へ出て還らぬ友や月見草

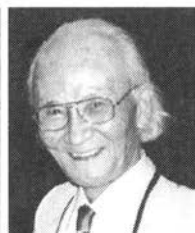
生きてたら便り下さい流れ星

このように御自分は戦地に行かれなかったけれど、戦死された友達を偲んでおられます。

朝日カルチャーとローズカレッジ、教室は違つても御夫婦共に橘高薫風先生に師事されて川柳を楽しんでおられました。奥様は三十年來、続けていらした日本画一筋に進まれて川柳から離れられました。

新聞社から頼まれてチャリティバザーに日本画の色紙を出品された奥様と、まさおさんの川柳の二人展を夢見ていらしたのに実現出来なかったのが惜しまれます。

真顯院政学博綜居士 行年八十八歳



野村太茂津相談役を悼む

平成十八年二月二十七日没

観高崇保信士 享年九十一歳

実りある川柳人生

牛 尾 緑 良

昨年の句報に見つけた一句があります。

ストレスを癒し白梅香くわしく

玄関に名も告げず届いた梅の小枝に寄せた
太茂津先生の一句です。最近の安らかな心情
が感じられます。その梅の開花を待ち兼ねた
ように悲しい知らせが届きました。

かつてD51の愛称そのままに各地に川柳を
携えて走り回られた先生の姿がありました。
いま北海道から九州まで川柳の交流がありま
すのも先生の足跡です。同時に先生のおかげ
で川柳を生涯の伴侶とされた方々を多く知っ
ています。川柳の種は確実に引き継がれてい
るのです。

平成四年には和歌山市で全日本川柳大会の

実行委員長を勤められ、参加者一五〇〇人、
出席者七五〇人の大きな大会を成功されまし
た。今年十四年目を迎える和歌山県川柳大会
の礎はこうして出来上がったものです。

所沢陸軍飛行学校に入學後、中国大陸、東
南アジア、満洲への転戦は青年期の心に強く
影響があつたようで、当時の話を語句まで覚
えるほど何度も聞かれました。一方酒もあ
がらないのに興が乗れば南洋の唄を怪しげな
手ぶりと腰つきで、宴席を和ませていただき
ました。久しぶりに聞いた先生の句集にはカ
メラを提げて得意満面の姿がありました。

麻生路郎先生の選考風景も得意な話でし
た。気に入らない句は右に左に切り捨てると
うに没にして……と語りながらも、剣道五段の
背筋はいつもピンと伸びていました。

津田与史氏、若宮武雄氏等と編集に参加し
たことでは多くを学ばせていただきました。
先生宅の一室で柳論を戦わせ、時にはまだ高

校生だった桑原道夫氏も同席しました。意見
の多くは太茂津先生が提言し、与史氏が幅を
広げて武雄氏がまとめるパターンでした。

会員の受賞報告には殊のほか上機嫌で、祝
賀会を楽しみにされていて終始満面の笑顔で
過ごされていたのが印象的です。

近年は少し無理を言われて、福本英子さん
と二人に呼び出しがかりました。柳誌の形
態を変えてはどうか、題字を自分の名前で書
き直したい等の案が出されましたが、同人に
図つてみまうと言つたままになつてしまいま
した。

かつて垂井葵水先生と共に開墾された和歌
山で私たちは実りを味わっています。

「空青し山青し海青し」のこの地を愛し、
この地でなければの句を摸索されていたであ
ろう先生の遺志を、みんなで受け継いで行き
たいと思います。

謹んでご冥福をお祈りいたします。合 掌

D51の太茂津先生

福 本 英 子

野村太茂津先生が亡くなられました。

二月二十七日どんよりと曇ってきたお昼すぎ、ご長女の恭子さんからお知らせをいただきました。あまりに早かったので「どうして」と聞き直したほどです。

昨年十一月ご入院されましたが、ご意志で皆さんにお知らせ出来ませんでした。

暫く過ぎて落ち着かれお見舞した時には、いつもの通りお元気なお声で「まだまだ死ぬへんで、白寿まで生きるんや」と嬉しそうに話されたので安心していました。

思えば五十年に余る年月を川柳一筋に打ち込まれて今日まで、沢山の川柳人を育てられました。

業績の方は緑良主幹が書かれると思いますので、私は違った思い出を少し。D51の太茂津さんと言われて故西田柳宏子さんと二人で突っ走るのをご自慢にされていました。

でも本心は気の弱い処もあって、いつも回りのことを気にされて困られることもあり、本心を明かせずペンを弄ぶ

木刀で岩を打つ日もある怒り

肝炎の奇襲に一本ペンを折る

物差しを当てれば腹が立つばかり

下り坂妻のブレーキ効いてくる

こんな句を拝見すると本心が出て、背筋をぴんと伸ばし徳川夢声の髪型を真似、どうだと偉張っているのが可愛かったものです。

昭和四十八年垂井葵水さんの急逝で、後を引き継がれてからは、それはもう同人・誌友を増やすのに一生懸命でした。皆を大勢引き連れて、北海道から九州まで地方の大会へ参加させて下さいました。

今沢山の柳友とお付き合ひ出来るのもそのお蔭といつも感謝しています。

現在、川柳塔わかやま吟社に牛尾緑良主幹を始め川上太輪さん桑原道夫さん他、女性を含めた大勢の若い後継ぎが出来ているので、心残りはなかったことでしょう。

反骨の根性日に日に老けていく

言い訳へ妻はそっぽを向いたまま

買いかぶられて窮屈な日が続く

かというて泣きつく袖は振りきれず

大らかに生きたスバツと斬られたし

観高崇保信士 享年九十一歳

どうぞ安心してお休み下さい。

梅の香に誘われ急ぎ雲の峰

合掌 英子

太茂津句抄

種時いて裾野は茂る夢ばかり

前へ前へと進むしかない足の癖

天狗の鼻折って天狗になつてゐる

一度しか死ぬぬスバツと斬られたし

罪意識あるから痛い天の声

これしきのことで苦しむのは止そう

友情のメロンで夏を生きのびる

このあとも走るレモンをひとかじり

熱帯夜 眠れぬわけは別にある

億単位指一本で事が済む

老兵の八月 正常では居れぬ

残念無念紙屑籠が盛り上がる

生きるとは気力なりけり梅雨晴れ間

靖国の弟と会う夢で逢う

寄せ書きをなぞる指先温くなる

ガン告知傘寿の命助けられ

殊更に切腹したと言ひ触らす

妻の背が丸い去年より丸い

傘寿金婚スタート台に立つ思い

我武者羅に生きて傘寿に風優し

反省は地獄へ行つてからにする

白寿への笑顔の旅は夢がある

卒寿まで待つて下さい俱会一処

薫風一周忌

本社 四月句会

四月八日(土) 午後一時
アウイーナ大坂

故橋高薫風名誉主幹を偲ぶ一周忌の句会は桜が満開になった四月八日、百七名の参加を得て夜間開催。お話は奥田みつ子副主幹。始めに句集「遠き人へ」を紹介。

川柳のPR、社会化に尽力された薫風先生のお役に少しでも立てればと、出版のいきさつを明かし、出会いからお別れするまでの交流を語る。

細やかな心遣いで、人と人とのつながりを大切にされ、しかも楽しみながら川柳の発展に尽力された先生のエピソードを披露。

記憶力抜群、研究心旺盛であったが、ご自分の句を間違えられたこともあったと、ユーモラスな一面もとらえ、その大きな足跡をしみじみと偲んだ。

初出席は升成好氏、吉川卓氏。
月間賞は加島由一氏(堺市)に輝く。

(司会)朝子・玄也 (記名)朱夏・義
(受付)倫子・睦子 (清記)直樹

席題「薔薇」

出口セツ子選

薔薇の香に包まれ巡る恩師の忌
川柳へ紅薔薇のごと燃えた亡師よ
普通の日普通でない日薔薇は咲く
薔薇千本党首しつかりタノミマス
胸の薔薇大きな顔になっている
窮極の愛なら欲しい青い薔薇
明日は散るその間際まで薔薇の赤
純愛を造花の薔薇で試される
喜寿傘寿バラのアーチがよく似合う
君よりも薔薇を見つめていてご免
とほけることが苦しい薔薇で刺がある
未来図を薔薇で囲んで若返る
薔薇色の風をまよって逢いにゆく
悲しみの色には染まぬバラの花
自問自答ばらも悔いもつ時がある
おだやかな空気を乱す黒い薔薇
定年の悲哀知つてるバラの花
愛子さまのバラもお庭に咲いたかな
野に生きた薔薇の香は嫌いぬく
日本の白バラ貴方への鎮魂歌
薔薇園の赤い夕日とはぐれ猫
ジェラシーの風に耐えてる赤いバラ
人許す愛の起伏の薔薇の棘
薔薇一輪心変りは許されず
ラビアンローズ女の過去は秘密めく
薔薇の刺あなた信じていいですか
うめばれた私をちくり薔薇の乱

たもつ 朝子 公誠 みつ子 太郎 則彦 直樹 則彦 義好 弘一 一風 朝子 萬の 義子 みつ子 一步 日出子 ダン吉 倫子 房子 洋 柳弘 義 美龍 重人 美代子

苦勞した薔薇だな刺が見当たたらぬ
老妻に薔薇一輪でこまをする
薔薇の香よ人間好きになつてくる
テールにあなたひとりのために薔薇
罪な方ワタシに赤い薔薇なんて
佳
本当は寂しがりやの赤い薔薇
気まぐれに贈ったバラの軽い罪
たつた一人の卒業生の胸に薔薇
青い薔薇イナバウアーと不老不死
赤い薔薇ひととき香る薫風忌
人
四季咲きの薔薇ですこうしお人好し
地
百本の薔薇にひそんでいる打算
天
バラの花似合う女性が僕の妻
軸
私にも薔薇にも秘めている主張
兼題「笛」 米澤 俣子選
笙の笛雅楽の調べ増す風情
勝負あり笛が空気を二分する
横笛は朧月夜がよく似合う
ご先祖のリズムを変えぬ祭り笛
補聴器に愛の口笛だけ残る
口笛で楽しい風が動き出す
指笛の応援遠くまで響く
九条の危機に警笛高くする

潤士 尚士 ダン吉 瑠美子 俣子 能子 萬の 俣子 直樹 富美子 美代子 重人 弘風 庸佑 美義 時雄 弘一 集一 能子 ダン吉

ババが吹く草笛で行くハイキング
 行進曲トランベットの音が冴える
 少年が草笛吹いた終戦日
 ひよつとことおかめが踊る祭り笛
 オカリナへ遠い山なみ暮れなすむ
 どんぐりのお喋りが止むホイッスル
 びーひやうり妻の魔笛に無抵抗
 迷路からかすかに聞いた亡母の笛
 組板と口笛合奏してる朝
 どの笛で間違つたのか独りぼち
 今朝もまたケトルの笛が唄い出す
 閑白の父を踊らす母の笛
 口笛はちよつと吹けるが音痴です
 指笛を吹いて若い日呼びもどす
 十五歳母の笛には踊らない
 口笛が聞える今日の子供部屋
 満月へフルート吹いてみたくなる
 夢のせて汽笛鳴らした移民船
 草笛の余韻幼い日の慕情
 景気回復チラシが笛を吹いている
 入れ歯です口笛うまく吹けません
 笛の音もテープに変わる過疎の村
 春の笛神様が吹き桜咲く
 霊柩車別れを告げるクラクション
 家中の風を動かす母の笛

利昭 倫子 一步 朋月 萬的 朱夏 直樹 いわゑ 弘風 扶美代 千里 遠野 富美 千代 幸雀 賢子 萬的 恵子 いさお 希久子 玄也 洋 直樹 天笑 見清

母の笛父の笛よりよく響く
 口笛に春のペダルが軽くなる
 人
 終了の笛巻き起す明と暗
 地
 口笛を吹けぬ子供の塾通い
 天
 月も笑うきつと天女の笛太鼓
 軸
 小抽斗ハーモニカ吹く桐葉笛
 兼題「奪う」 海老池 洋選

楓楽 能子 東吉 冬葉 修 螢 美義 信子 扶美代 美籠 保州 舞夢 遠野 高栄 富美 ルイ子 美代子 かりん 朱夏 千代 房子 昭

エプロンを夫が奪ってくれました
 少しずつ記憶奪われ日向ぼこ
 奪い合い絶対しない蟻の列
 未知数を奪い取る気の若い夢
 積み上げた汗から奪うものがない
 奪い合い分け合いそして無二の友
 娘を奪った憎い男に親も惚れ
 奪われた刻を遺影と生きてゆく
 飽食が奪う我慢という二文字
 この世仮の世奪い合うこともなし
 奪われてみたい黒髪あつく炎え
 溺愛の奪う翼に気付かない
 略奪の愛へ日陰の鳳仙花
 夢だけは奪われません木瓜の花
 水中花愛を奪ったことがある

潤子 希久子 寿美 萬的 准一 五月 光久 幸雀 義 寿子 富美子 朝子 萌 岳人 恭昌 玄也 睦子 千代 恵子 章久 みつ子 昭

兼題「凄 い」

長浜 美龍選

凄い人だと敬遠されている
寝てる振りそれより凄いききた振り
凄いいことしたとは見えぬから凄いい
肺半分師の凄きかな一周忌
凄いでしょ恩師の口調覚えてる
イチローが光って見える凄いい腕
半分は凄んでいます牛を買え
鉄骨を減らせと凄いいことを言う
カトリナジャズの町まで呑みこんだ
今更に心齋橋の変わりよう
凄いいすこい驚いてやる通信簿
黙らせた拳が凄いい謀反
金メダルやつぱり凄いい威力だな
箱書きに老舗の格をのぞかせる
時とこ相手構わず振る尻尾
人の和の凄さを感じるボランテア
壮絶な椅子取りゲームする序列
王ジャパンやつぱり凄いい世界一
都市壊す直下地震のエネルギ一
辞める腹凄いい意見を吐いている
一ダース子供を産んだ母である
千年の塔に釘一本がない
雑草の意地踏まれても踏まれても
二世紀半生き続けてるモーツァルト
凄まじい過去を肥やしにして女
ブレッシヤー凄く感じていた恩義
叶姉妹家一軒を身にまとい

正坊 美義 時雄 昭 信子 日出子 ダン吉 一歩 賢子 真理子 正雄 昭 かりん 千代 幸雀 富美子 夕胡 准一 玄也 准一 夕胡 卓 富美子 楓楽 朱夏 千里 遠野

優しさは要らぬと女の凄いい意地
情という凄いい奥の手チラつかず
凄腕の彼にわたしを賭けました
はんなりと男の骨を抜く女
佳
いも虫はアリの凄さを知っている
凄いい目で睨み返したのが返事
好奇心凄いいパワーを秘めている
凄いいことしていただいた手術台
凄いい顔母に本気で叱られる
人
頑固だが凄いい優しい涙壺
地
ガン告知捻れたように日が暮れる
天
凄いい鯛だったと釣竿だけ帰る
軸
喝采の熱い余韻の中にいる

課題 「ひよいと」 三宅 保州選

理恵 扶美代 光久 朝子 たもつ 洋 楓楽 五月 庸佑 きよし 千恵子 シマ子 淳司 正坊 美義 由一 楓楽 セツ子 扶美代 桃花 見晴

ひよいひよいとやって来ました認知症
旧友とこんなところで火葬場
目が合った猫に会釈をしよう
忘れてた漢字をひよいと思ひ出す
忘れてた記憶がひよいと花の下
要領のよいのがひよいとつまみ食い
春風がひよいと跨がす水たまり
春の風ひよいとスカート持ちあげる
春雷にひよいと疼いた脛の傷
春風にひよいとジョークが飛び出した
ひよいと会いひよいと別れた風の辻
ひよいと来てひよいと心をさらう風
ひよいひよいとティッシュ配りもプロの技
マジシャンもひよいと気を抜く四コマ目
顔ひよいとあげたばかりに白羽の矢
花万葉妖気がひよいとのりうつる
ひよいと振り返ればアカンベリしてた
真夜中にひよいと浮かんだ明日の知恵
午前二時ひよいと魔界へ踏み入れる
ベッドからひよいと尻尾を垂れた妻
生きるのに邪魔な尻尾をひよいと切る
ひよいひよいと旅人となるバスボート
叱られてるさ中にひよいとひらめいた
佳

睦子 卓 真理子 倫子 希久子 瑞美子 月子 理恵 文 希久子 たもつ 朝子 直樹 正雄 美龍 正子 玄也 能子 朱夏 昭 美代子 修 ただよし 千恵子 洋 ばつは 潤子

人

万策が尽きたかひよいと手を握る

雅文

地

ひよいひよいと分けられ雑魚の群れにいる

ダン吉

天

つまずいてひよいと覗いた別世界

篤子

軸

舞台からひよいと降りたいときがある

兼題「島」

河内 天笑選

橋が出来島の言葉が消えてゆく

求芽

橋出来てからは島にも排気ガス

玄也

島へ来る嫁を迎える大漁旗

集一

島絵出花嫁さん待つ波止場

寿美

ここが好き母は頑固に出ない島

きよし

島へ来る医者様は神様仏様

正雄

水軍の遺跡が残る瀬戸の島

萬的

水軍の子孫の姓で島守る

(矢)五月

打ち寄せる怒涛が島を削り取る

章久

ヒートアイランドに非常口はない

ただよし

無人島のまわり何やらききな臭い

茜

基地の島にまた難題を吹っかける

ダン吉

玉砕の島に観光客あふれ

睦子

親も子もここで生まれた基地の島

真理子

手の届きそうな島だが他国領

玄也

パソコンさえあれば仕事のできる島

信子

観光スポットつくと島が墮落する

弘一

(志)千代

島国のホクロのような街に住み

姉さんが島にいるので帰ろかな

画架提げて島を丸ごと描きにゆく

トラファンがやはり居た居た離れ島

島流しみたいな部屋に住んでいる

腹いっぱいゴミを食つて夢の島

島巡り干し蝶でも買いましよう

軒先に蛸を干して島の家

島中のニュース知つてる日向ぼこ

富美子

島唄はざわわざわと人を恋う

千里

海鳴りを枕に島の子は育ち

恭昌

語り部が小島をささえ統けてる

いわゑ

墓だけになつても帰る島がある

扶美代

列島を感動させた王ジャパン

遠野

佳

無口な娘島に帰れば體が漕げる

真理子

陽を受けて自転車で来る島の医者

美龍

島一つ買つて油田を掘り当てる

高栄

雲囲気は無人島だな妻は留守

尚士

故郷の島に根っこは置いてある

和夫

のんびりと歩く姿が島にある

恵子

ばあちゃんに拝まれている島の医者

正坊

島の子はよく挨拶をして通る

由一

竹島にロープをかけて引つ張らん

軸

第五十六回 京都塔の会

春の吟行句会

月日 5月31日(水)

時間 10時40分厳守(11時発鞍馬行乗車)

集合 叡山電車「出町柳」駅(京阪が直結)

行き先 「くらまおんせん」

(電話075-1741-2131)

京都市左京区鞍馬本町5200

鞍馬駅から送迎バス 到着後昼食

句会 1時開始

課題 「当日雑感」「声」「扶む」「天使」各三句

会費 5000円 当日頂きます

申込み 都倉 求芽 宛

〒600-8438

京都市下京区万寿寺通室町西入る長刀

切町210-1 コスモ室町2003

TEL075-351-4109

締切り 5月20日

帰途 地下鉄「国際会館」まで送迎バス

今回は、ほとんど歩くところはあります。

従つて、木々の茂みを縫つて山路

を分け入る電車や、送迎バスの窓から古

い街道の面影を残す両側の情景を汲み取

つて、吟行にしたいと思います。

をばゆ

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

八尾市民民柳会

富西

弥生報

喜びも大変ですと春財布
何もかも豊か桜を待っている
にんげんをまーるく変えていく器
難聴も余興の一つ笑わせる
列島へ青空くれた金メダル
ルノワール豊かな胸の美女の宴
初化粧女の扉あける鍵
何もかも捨てて素顔に戻りたい
春の空ミルク色した雲ひとつ
がぶ飲みミルク入試に耐えている
ばさばさの心を満たす感受性
祖父ちゃんばうすも色のシャツ似合う
豊かさに甘え明日の事思っ
孫受縁糸断ちか酒か揉めてます
馬鹿です時々神さまに挑む
化粧した言葉空しく地に落ちる
ミルクティぐらいで父は騙されぬ
豊かさをくれるビールをボンとぬく
ランドセル影もスキップ踏んでいる

加津子
ますみ
欣之
欣子
はじむ
幸生
宏至
民
レイ子
秋雄
あかり
シマ子
春蘭
浩三
アキラ
柳伸
一風
いつみ

ジーンズを履いて口紅だけにする
もう少し跳んでくらんよ星がある
美しくなろうと整形に挑む
古里の小学校は消えてゆく
たつた一個ミルクキャラメルへの思い
ミルク瓶下げて抱きあう保育園
豊かな声で笑うと冬がちぢこまる
ありがとございましてと満ち足りる
三月が笑えば疼く旅ころ
梅の香が遊び上手にして豊か

川柳おっぱひ吟社

木村あきら報

中立の笑顔左右に振り分ける
石一つ投げて波紋の大きすぎ
亡き母の一言今に効いている
古ボケた辞書に残っている初心
サクラ咲くメールに胸を撫で下ろす
年金が生きろ生きろと背を押す
皇室に一石投じたコウノトリ
言訳に小鼻広げるくせがある
いい夢を見たくて寝返りばかりする
過疎の家水も空気も澄んで居る
目の高さ変えろと友も多くなる
枯草の下で新芽が競い合う
ブライドもかなぐり捨てておらが春

川柳みぞくち

小西

雄々報

半蔵門
正典
定男
たもつ
ダン吉
きらり
美子
美代子
國治
弥生
ひかり
あきら
放任
賢
かおり
いさむ
八重子
寿々女
よしみ
治延
文仙
初恵
貞月

訳などは言わず昼間の月に会う
パソコンへ少し昼寝で元氣だす
さあ昼だ愛妻弁当うれしいな
ビルの谷間でランチ求めて昼休み
定退へ時計にせぬ昼御飯
雪模様散歩は昼にしておこう
ぐつぐつとおでんの小言聞いて飲む
昼告げるサイレン待つて人動く
昼寝などいなくてもない蚊の列

高槻川柳サークル卯の花 瀧本きよし報

智恵子
弘子
鈴枝
公美枝
和代
静江
正光
信雄
雄々
祐作
治三郎
石舟
佳一郎
比呂志
郁夫
萬的
尚士
郁郎
昭
重人
宏章
稲子
武史
義一
泰雄
典子
乃りこ

六法を読んでいけずを武装する

年金が余ればせめて湯の宿へ

年寄りが余り赤ちゃん足りぬ国

有り余るお金にも惚れ男にも

ひとときの余日を埋めているシヨパン

余ったら貸して下さい生きる知恵

帯が余るほどに悩んでみたい秋

それなりに達者余生の酒の味

極楽の余り風かも乗ってみる

入れ知恵をされた意見と見透かされ

原点へもどす時計の捻子をまく

夜明け前もう戻らねば玩具箱

川柳塔おとしり

鈴木 一弘報

お節分鬼も仲間と豆拾う

ひらひらと頭の中で散る昨日

ひらひらと記憶さ迷う夢の中

記念日に国旗ひらひら懐かしい

請求書ひらひら僕に飛んでくる

想い乗せ落葉ひらひら山越える

ひらひらの衣装金魚と憧れる

堀のなかりンゴ芽吹いて咲く日まで

大空に咲く航空シヨールきれい

タミフルも心配だから先ず予防

二日酔い休む理由は風邪をひく

母の愛を刻んだ風邪ぐすり

立ち話頂いたのは風邪でした

母強し風邪などひいていられない

風邪薬こころの風邪は追い出せぬ

美 義

(#)照 子

勲 弘

きよし

美 籠

活 恵

公 子

秀 夫

律 子

庸 佑

高 栄

葉 子

一弘報

清 子

芳 光

黙 光

ヒロ子

真 一

以和方津

幸次郎

(#)和 子

小 生

風 花

一 弘

道 子

登 美

知 恵

艶 子

付き合いが良すぎてはやり風邪もらう

川柳塔のぞみ八王子支部 野崎 勝報

由多香

勝 報

方 子

美登里

里五郎

満智子

訓 調

タツエ

洋 子

由紀子

リ ツ

哲 代

康 子

勝 勝

桃 葉

恭 子

昭 夫

芳 子

登美子

川柳塔のぞみ

播本

充子報

海老になり火爐を抱いて凌ぐ冬

手術後は酒豪の婿も甘党に

麦秋の海にふると近くなる

おばあちゃん甘い言葉に超弱い

知ってるかい海老は猫には毒なこと

伊勢海老の髭がセレブを主張する

単線の駅で肩書脱いで置く

佳句地十選 (4月号から)

近 藤 豊 子

寒村の六十歳はまだ少女

雪かきに汗が背中を押してくる

作物も一筋植えは出来がよい

大かばちこいて火の粉が降りかかる

先ほどのかばち明日は変えるなよ

断っておくが私は男です

やむをえず犬のシャンブー借りている

その歳で再婚なんて止めなはれ

夢中で生きたリンゴの歌にはげまされ

誰もかも願う平和のむずかしさ

民営化ローカル線がまた消える

アバウトな質でのんびり生きている

お汁粉も人の情けも濃いが良い

日当に一杯がつく雪下ろし

甘い顔したらあかんと妻の釘

週一日三回だけはバスも来る

野仏と春の話をして帰る

海鳴りを耳にしながらか飲む地酒

甘海老が舌にとろける北の宿

時時は甘えてくれる妻でよし

生かされて今日も仏の甘い水

のんびりと鳥取砂丘陽が沈む

野仏を巡るいつもの散歩道

幸せな眠りカノンを聞きながら

精一杯演技拍手を浴びている

茶 子

彰 子

かほ

金 祥

善 夫

郁 夫

つづや

積 子

一 風

哲 子

ダン吉

紀伊子

清 子

由 一

一 歩

哲 男

美代子

朋 月

つよし

恭 昌

千 里

那珂子

方 子

哲 代

勝 勝

春の海昔むかしの淡い恋

輪になってマリアを唄う手話の春
春風の中をマリアに会いに行く
生きている限りやり直せるのです
昭和つ子夢の并当海老フライ

川柳ふうもん吟社

夏目

一粒報

風と契つて天女が春を産み落とす

三面鏡にける若さを紅がほう

乳母ぐるま戦火の土は踏まれぬ

メダルゼロ救う荒川金の舞い

戦場へやるたの産んだ息子ではない

ミサイルが老いの疝気で済めばよい

妻入院通話料ゼロ一カ月

鼻息の荒いおとも背は寒い

見返りはゼロです母の丸い背な

事件事故ゼロの朝刊待っている

幸せを一途に探す蟻の群れ

あの星に戦場なんか無いだろう

チャイルドシートゼロ歳眠る夢こち

戦場で欲しい油が燃えている

人形で再現させる古戦場

川柳へ一途のまんま逝きました

欲がどつぷりあつて人間なんです

戦する朝は真つ赤なルージュ引く

九条を一途に信じ母が近く

一途な恋未婚の母となりました

いちがいと言うな彼には借りがある
若者の研究一途なものしい

康子 桃葉 宣子 充子 和香 洋々 一瑤 美恵子 圭一郎 昌鼓 志緒 重忠 茂登子 裕子 無限 秀夫 金祥 益子 善夫 節子 雅女 美雪 かをる 穀 由美子 蟹郎 春名

野菊のように一途な愛でゴールイン
若かった頃の一途がなつかしい
元祖です一途な味がよぶ暖簾
一途でも捨てて行く句が痛ましい
飛びたいがこの一途さが邪魔をする
一人つ子戦場知らぬまま育つ
主婦業を一途に勤め皆元氣
いい顔になるまで苦労はつてみる

竹原川柳会

時広

一路報

霧水キラキラ神も天使もいるこの世
かき氷わつと掻き込む河童たち
かき氷レモンの蜜よ初恋よ
水にくぐろくさい忘れてしまいたい過去
勝負師の顔も笑えばあどけなし
百年を刻んだ顔が素晴らしい
がまんの子真つ赤な顔で寒けいこ
逆境がつくる素顔の美しさ
呼べばすぐ時空を超えて亡母の顔
顔顔顔みなかがやいている句会
苦労した笑顔優しいわきざむ
お主の針目が孫の顔とて
眉を引く少し一日を確かめる
父さんと少し似ている彼が好き
私にも取れる人生の金メダル
水仙の一途さ春のドア叩く
雪すこしかぶり波殺草の青
春よはる六十路の電車夫という
ローカル線わたしの生きる性と合

孝男 一京 義徳 行男 房江 はつ江 喜子 一粒 船は電車に電車は船に素つ気ない
天下り電車が走るローカル線
あなた行きの電車に乗った悔いはない
終電車宇宙人とも乗り合わせ
動き出すドラマ新幹線走る
縄電車いつか一人となる夫婦

川柳塔唐津

仁部

四郎報

伸び伸びと河原でランチ三代
一幅の軸に残せる句が欲しい
大岡の新白酒三本目
空振りもあるさとトリノ後にする
期待の子有らぬ彼方を走つて
二月すでに空白目立つ日記帳
五月雨をかわして友の家に寄り
冷奴辛子に妻の差し押さえ
いいことがありそに思う夕茜
介抱をされてもみたい酔った振り

長柳会

村上

直樹報

飽きるほど人間やつてまだ小僧
プロの技見せて下さい元巨人
老い生きて気になる本の大往生
無言でも心は一緒影二つ
飽きんとも言えず夫婦の長い旅
母さんの手料理どれもプロの味
寒空にテント追われる自由人
瘦せたいが飯がこわくて板挟み
プロの味盗み取れない妻の腕

静風 比呂子 輝恵 一路 笑子 晴翠 勝視 實 正剣 蜂朗 水笑 虹汀 四郎 輝夫 高明 直樹 ひろし 正一 史 輝子 靖子 もこ 美代子 武男

国産の力士蚤の心臓らし
救急車迎え看護師プロの顔

メールには飽きた手紙をしたためる
プロなひと他人に言われて鼻天狗

頑固さもプロ級並みで生き字引
来世も一緒と契る嘘二人

飽きもせず妻は鏡にらめつこ
長旅に疲れて休む夫婦坂

飽きもせず金婚迎えるのけ合
プロ真似て作る料理を子が食わぬ

白百合を散歩に誘いふふふのふ
熱爛と一緒に過ごす妻の留守

仁王門匠の気魄そのままに
いつ見ても飽きぬ笑顔の富士に会う

限界をプロはつぎつぎ乗り越える
すき間風背にして座る母がいる

戦争のプロなどいらん平和主義
故里で一緒に暮らそ好きやから

人生のプロだ皺まで美しい
教育のプロが悩んでいる我が子

川柳塔きやらぼく

福代

天雀報

淳子 正子 和子 不二雄 芳野 明子 たけし マサ 明信 幸雄 靖博 英美 敬二 三和子 富美子 正博 よしお けい子 一慧 正美

おみくじの末吉信じ時期を待つ
亡き人の賀状ばかりを残して

節分のひらめき鬼と豆がつき
真夜中ののりまき夢に消えてゆく

レジの前うっかり財布入れ忘れ
百人一首に父母の十八番は取らせない

おべんやら言わぬ鏡にほれました
ダイエット頭のすみに焼付ける

立春に第一号のいい便り
ライバル意識捨てて阿呆になっている

川柳塔鹿野みか月 土橋
雛壇にゆずる一間にぎやか
川波に振り向く雛の手は振れず

ヒナタマゴのように曾孫をそつと抱く
幸あれと黄色い雛も嫁に行き

雛さんを飾るたんびに亡父がいる
行く末を心配しない流し雛

雛壇から見下されてる弱者たち
啾啄音雛は果立ちの殻やぶる

床に着く今日の平凡感謝して
雛まつりただ今牡の奪い合い
桃が咲く雛と笑って咲いている
温もりを肌伝える和紙の里
古漬けに亡母のコント生きている
コントです部屋から消えた影法師
役者なら嘘のコントはお手のもの
世が変りコントのような親子孫
四コマのコントが紙面からあふれ

初枝

天雀

ふみ

雪江

紫泉

やえ

那珂子

春枝

瑞枝

螢報

八十の脆さで丸く聞くコント
春の野でコントになったメール便

コントには似合う男と住んでいる
ゆめ背負う十二単が重かろう

コウノトリ男雛女雛と騒がしい
輪の中のコントに紐がついている

ひよつこのコント真似して笑う孫
古傷に触れたコントが温める

金婚に老女翁の夫婦びな
コントにはごとんと落ちがついている

ぬくい風呂ああ極楽じゃ満足じゃ
あの頃とおんなじ顔の雛よりよ

日の丸を揚げるコントを繰り返す
川柳塔なら 坊農 柳弘報

小菜園間引くひとてま春の風
青虫の命預けた菜を間引き

寝坊して会社人間脱皮する
間引かれてどっこい生きている別天地

もう君は間引かれたのにしらぬ顔
異端者を間引く勇氣を持ち合わせ
子沢山一人も間引けぬ母の愛
いざ行かん進軍ラッパあの飲み屋
土笛が鳴るとくつろぐ埴輪たち
肩書きは社長サンマを焼いている
ハイテクの社内にあった村八分
何べんも泣かれました社の掟
少年の草笛一途恋を追う
夜の口笛男が泣いているらしい

きみ子

えい子

富久江

茶子

節子

かおる

みどり

八重

幸子

照彦

盛桜

完司

敏子

とし子

博一

ふりこ

春蘭

冬葉

春雄

弘風

孝子

重人

真理子

千梢

富子

理恵

オアシスの風が雅楽の笛になる

判捺して社長椅子を棒に振る

冬の底脱して源流から活氣

望まれた命と間引かれた命

間引くなら間引けと首を洗つてく

ぐい飲みに活氣の花が脳に咲く

骨太の胸に抱いてる祭笛

九条が危ない笛を高く吹く

透明になって社前の鈴鳴らす

象の目になって社会の奥を見る

にんげんに疲れ悲しい笛を吹く

間引かれてそれから先の幸不幸

翻転とはためく社旗のある安堵

風を抱く男の胸に笛がある

間引かれて根づいた花の逞しい

貧乏な頃はいきいき生きていた

川柳さやま

遠山

可住報

本当の冬の恐さを知った年

寒い日がひっぱり出した後遺症

ストレスも寒さも煮込む鍋料理

春の花夢見て冬の土返す

ストレスも雪も沢山溜る冬

雪野菜埋もれた中で生きている

路の臺にがみの風味春一番

生きている幸せ風味な膳に酔う

曾孫の小学生のファンです

大都市の機能マヒさす雪五寸

冬籠り準備酒屋へ二三本

卓

和夫

弥生

美千子

一風

隆盛

道子

ダン吉

完次

茂雄

國治

比呂志

六助

秋雄

朝子

良一

雪見酒どころか家があぶないぞ

三幸川柳教室

古久保和子報

可住

信子

宏夫

幸

徑子

昇

当代

桂香

登美代

朱夏

智三

さち子

保州

嘉平

孝義

一歩

かずみ

章子

三千子

イセ

准一

町子

起世子

次根

公子

武

和子

何一つ芸せぬボチの食べっぷり

今日もまた犬と同じ物を食べ

血統書付きでもワンとしか鳴けぬ

犬掻きの一生で良し友白髪

岸和田川柳会

原 さよ子報

国宝の落書で知る古代人

へそくった分だけ赤字増えている

おめでどう多くて我が家赤字です

人生の赤字を趣味で埋め合わせ

身の程をわきまき生きて赤字なし

あの頃は赤字だったと母はつり

晩年は妻に上手に活かされる

魔法の手古着活かしてニューモード

人柄を活かす人の輪笑いの輪

才能を活かして二度の職につく

想定外のチョコにいのちを活かされる

伺って思い違いが溶けてくる

そのうちに伺いますで二十年

伺いはするが心は決まってる

進退を伺い慰留なくそう

合格のついでに恋も願う絵馬

お相手がほしいとそつと絵馬に書き

サクラサク報せに絵馬もホツとする

大量の絵馬が押し寄せ笑う神

絵馬奉納お守り買ってな不安

身の程を知らぬ願ひに絵馬もなく

合格に十五の春が弾む絵馬

岩田帯添えて授かる犬の絵馬

みね

千秀

幹子

碧

寿海

ゆり子

和美

房枝

弘子

ダン吉

岩夫

珠子

ゆい

みよ子

甚一

さよ子

幸子

香代

蛙城

洋

植代

浅子

ふみよ

みつ江

力子

守

仁緑

遠い日に軍艦書いた落書帳

川柳茶ばしら

板山まみ子報

東吉

出不精も旅の広告だけは選り
きままろのネタにされてて笑いこけ
意気込みはどこへ解明まだ遠く
右利きも左親指器用です
結婚へ母親業の荷を下ろし
新しい家落ち付かぬ身の回り
ピラミッド砂漠に歴史刻み込み
カプセルを埋めて再会誓い合
きのうより卒業式は大人びて

大原川柳社

山本

玉恵報

都会の子仕事いちいちこざかしい
種明かし出来ぬ浮世の義理ばかり
老い二人今日も話の種がない
曖昧な妥協苦勞の種残す
四季の種まいて手向けの花作り
甲種合格だった父の種です
種豊富話し上手に聞き上手
種明し出来ぬ女の泣きどころ
人間の種が寄ってる家族の輪
種まいて優しい花の夢を追う
やさしい種と暗喩の種は祖母が蒔く
噂好き種をさがしにやってくる
新客に話の種をさがしてる
義兄弟種が違つてうちとけず
今日も無事沈む夕日に手を合わす

みづえ 敏夫 さちこ 地佳平 南花 妻子 辰江 悦子 喜美子 巴子 美佐子 みさえ たつ子 静子 絹子

いつからか童話になった柿の種
独り住む胸の火種はまだ消えぬ

高知川柳社

川竹

松風報

あすなろ 玉恵

平凡な顔で名刺の名に負ける
コーヒード無かった頃の古名刺
肩書の名刺にたかる屋台酒
この人にこんな柔和な顔がある
花名刺ふるさと捨てた跡がある
三次会名刺の顔は何処へやら
指切りの軽さを知っているネオン
約束はしなくても咲く野辺の花
忘却の日々約束が朽ちて行く
楽しみの約束弾むカレンダー
針千本飲ませましようか建築士
約束が全部流れた母介護
さようなら言わずに逝った友偲ぶ
約束を果たせぬままに墓指う
指切りを信じ続けている小指

川柳塔まつえ吟社

三島

沁丘報

新調の晴れ着にしみる親の汗
新調の豊お酒を飲まされる
新調の靴に虹をつめている
白足袋の白颯爽と喜寿を抱く
新調の晴れ着に泣いた親の臍
成人の新調春へ向き直る
しあわせがずっと素通りしてしま
う
合格の通知に絵馬が笑つて

房子 久子 たけし 治代 茂美 多賀子 多喜 雪代

健康な喉が何でも通します
怒鳴つてもそれら顔の猫通る

屋久杉の命を守る通り雨
手の平を幾度通つた雨風
無智無雲とつこい生きた芽の根つ子
幸福の芽に再婚のむずかしさ
春の陽を受けて私も芽を伸ばす
藍染めに芽吹く柳の高瀬川
皮一つはいて生芽の深呼吸吸
発芽せぬ種の言い分聞いている
主婦という城で動けるから元気
煩惱の命するままに手が動く
正直に映す鏡へ動かされ
爺ちゃんの振り子時計はまだ動く
ペン皿は多彩に動くきのう今日
決心が動かぬように楔打つ
歌会のお目出た運ぶコウトリ
忙しくなると蛙が歌い出す
君が代を歌うわたしは日本人
老雄のころに生きている軍歌
春には春の歌が芽生える胸の奥
飲むとよく軍歌を口にした昔

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

生きているこんな愉快なことはない
おしやれるあなたにだけは見せたくて
愉快だねまだジョーカーを持っている
笑つてこらんほら愉快になつてくる
茹で玉子つるり陽気な花の下

保子 順子 大輪 夕胡 朱夏

宏

政子

長吉

知恵子

紫見

小生

蘭水

和歌子

昌枝

喜美子

螢

ちえこ

幸子

日出子

玲子

注湖

静恵

桂子

淞丘

吊り橋で笑い袋が震え出す
 よつしゃあと愉快な喝で湧く力
 愉快だね庭いっぱいに蝶がくる
 愉快だな興味津津生きてます
 おしゃべりが揃い愉快な花畑
 愉快だね釣れなくなつてにしない
 休耕田植えて愉快になつた私語
 オンリーワン心の襷に畳む愛
 無人駅乗降客は僕一人
 オンリーユー聞いたわたしの有頂天
 さすがは男傭いっぱんの底力
 あなただけになんて言うからむず痒い
 放浪記さすがと思ふ宙返り
 転んでもさすが自分笑う知恵
 迷つたらさすがに亡父の道しるべ
 さすが亡父遺産は何も残さない
 聞き及ぶさすがと思ふ語り口
 グルメ旅さすが大きなビール腹
 八起き目もさすが昭和の叩き上げ
 ドサ回りさすが芸人人を食ひ
 長い道さすがの僕も疲れ気味
 背を伸ばすおしやれ卒寿のプライドで
 濁る世はせて心におしゃれして
 春風にゴートの裏が見えかくれ
 おしゃれしていそそと行くデイクアー

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

徑子 登美代 輝子 克子 よりこ 三喜夫 和子 和香 三男 さと子 寿子 あきこ 富美子 学 怜 泰女 准一 小雪 精子 佐一 和 英子 泰 紀久子 稚代

浪花の女三人寄れば姦しい
 孫四人女性ばかりで気の重い
 イナバウアー女性極美金メダル
 米寿すぎ紅ひとすじの女です
 かき裂きの過去が匂つてくる女
 見向かれぬ佯びしさも好し花時計
 縮かんだ背筋を伸ばす花便り
 寺町の土堀明るし句会かな
 ワルツ舞う縮んだ脳のストレッチ
 生年月日誰にも匿したことがない
 出すほどのゴミのなければ雑炊炊く
 鳥の糞頭に落ちて鬼瓦
 西宮北口川柳会 黒田 能子報

昭三 正子 幸子 千恵 芳子 東園 純 しづ子 寛之 年代 薫 宏一 春蘭 比ろ志 婦美子 歳子 紀乃 静子 石舟 千代 江美 奮水 求芽 新太郎 松煙 哲男 貴代子

気にかけるものがないから出来る旅
 消しゴムの滓が残つたラブレター
 消しきれぬ恋の残り火燃えたがる
 不安消すそれはあなたの厳つい手
 名簿からとても大事な人を消す
 待ちばうけもうれしうぐいすの初音
 いかなこの一匹すつにある命
 梅から桜梅が余寒を離さない
 サプリメント明日の何かを期待して
 ビカビカの一年生に父母祖父母
 終章は看取り合う気の夫婦坂
 網とりへなにわの春にひとときはり
 価値観は似てるが違ふ動き方
 フイクシヨンの世界だ好きなこと言える
 過去形になると痛みも懐かしい
 ほたる川柳同好会 水野 黒兔報

朋月 五月 光久 忠 章子 鹿太 昭三 孝一 曙蝶 正和 二英 房子 美籠 契子 見清 雪子 昭子 正三郎 柳童 桂子 禮子 長一 肋骨 信男 久子

煩惱が赤信号を曇らせる
つらいこと母が解凍してくれた
制服も和み茶室のういういし

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

眠らない時計の音で眠れない
お喋りなカラスに聞かす子の出世
文案のお初が見せる人の情

出世などその場の運で風まかせ
自動ドアのようにはいかぬ出世道
雛人形はどは浮かれぬ武者飾り

捨てた恋春の肩籠から拾う
人形と共に嫁いで苦楽知る
雛人形亡き娘をしのぶ桃の花

女の業乗せて行きます流しビナ
吾輩は猫であるのが出世作
根性があれば大根褒められる

口達者暑と寒さは身にしみる
戻り寒義理固いの程度もの
反感を羨望にする出世株

招かれて雛人形をはめている
人の世話しないでわたしの世話をし
手の取れた人形が泣く玩具箱

栄光の過去は閉ざしているけれど
美 朋 月 美 龍

京都市の会

都倉

求芽報

子の意見時には耳を傾ける
動かぬ者食うべからずと他人様
行間から本音こぼれる人となり

鹿 太 春 鹿 太 春 鹿 太 春

ふりこ

黒 兎 勇 治 勝

白すぎてポリウム淋し胡蝶蘭
ポリウムの足りない分は笑い声
髪の毛の一本ずつが立つ計報

朝市でお国訛りの束髪
白髪に重い人生かいまみる
アデランスして朗らかになりはった

小春日の予報も嬉し冷える夜
節分の声が冷え込む京の寺
少し距離置いたら頭冷えてきた

温度差の違う夫婦で冷えたまま
花冷えが二人の肩を近づける
冷えころのビールで流そわだかまり

晩学へ冷えた頭脳を試される
株遊び果ては悲劇か独居房
財産も悲劇の的になる予感

有頂天 思わぬ悲劇待っていた
週刊誌他人の悲劇読ませ売る
戦争が生んだ悲劇がまだ続く

来世もと思っても妻は別らしい
ひよっとして明日は悲劇の主役かも
悲劇のヒロインなのにお腹がすいてくる

長生きが悲劇だなんて言わせない
川 柳 大 阪 長 井 善 純 報

欠伸する命の重さ考えて
直球で行こう腹案など持たず
ホリエモン案外だったと人は言う

許すことできないものが多すぎる
素晴らしき明日へ刻む花時計
求 芽 報

求 芽 報

芳 香 一 歩 喜 楽 丹 吉 洛 醉

許してはならぬ九条つぶす案
案は無い出たとこ勝負どんとこい
秒読みにまだ思案する石一つ

改正案色鮮やかに軍事色
見た目より案外きつい嫁の口
バラ色のカルテ禁酒を許される

許すこと覚えて円くなる心
欠伸さえうかつに出来ぬ時の人
どうなんや好きか嫌いか手をとって

年金にすがりし糸が細くなる
中身より容器ほしさに買うグルメ
焦らずにゆっくり輸入決めてくれ

大臣は遺憾と反省くり返す
同じなら美人の欠伸うつりたい
不器用で世渡り下手を許す妻

どうなんや聞かれて困る不味な味
にこにこ若返ります春の風
黒髪を染めてくれるは孫娘

割り箸がきれいに割れた牛どん屋
心許し温い会話になった夜
思案した割には答えこれかいな

案するなライブの株も買えなんだ
手をそえて欠伸する人しない人
ふるりの家族案じる雪の量

許し合う友が私の一〇番
わ か あ ゆ 川 柳 会 松 本 は る み 報

重 人 一 風 章 久 い わ お 鉄 心 朝 子 い つ ふ み 宏 信 醉 功 司 か よ こ ひろゑ 五 月 珠 生 東 吉 福 世 隆 司 孝 一 美 花 利 昭 彦 太 照 月 ま つ お 善 純

求 芽 報

輝 美 欣 之 萬 的 英 子 啓 子 克 治 き よ し 典 子 宏 子 満 子 百 合 子 昌 乃 ま す お と し 子 庸 佑 福 子 正 坊 美 義 則 彦 葉 子 益 子

欠伸する命の重さ考えて
直球で行こう腹案など持たず
ホリエモン案外だったと人は言う

許すことできないものが多すぎる
素晴らしき明日へ刻む花時計
求 芽 報

求 芽 報

芳 香 一 歩 喜 楽 丹 吉 洛 醉

許してはならぬ九条つぶす案
案は無い出たとこ勝負どんとこい
秒読みにまだ思案する石一つ

改正案色鮮やかに軍事色
見た目より案外きつい嫁の口
バラ色のカルテ禁酒を許される

許すこと覚えて円くなる心
欠伸さえうかつに出来ぬ時の人
どうなんや好きか嫌いか手をとって

年金にすがりし糸が細くなる
中身より容器ほしさに買うグルメ
焦らずにゆっくり輸入決めてくれ

大臣は遺憾と反省くり返す
同じなら美人の欠伸うつりたい
不器用で世渡り下手を許す妻

どうなんや聞かれて困る不味な味
にこにこ若返ります春の風
黒髪を染めてくれるは孫娘

割り箸がきれいに割れた牛どん屋
心許し温い会話になった夜
思案した割には答えこれかいな

案するなライブの株も買えなんだ
手をそえて欠伸する人しない人
ふるりの家族案じる雪の量

許し合う友が私の一〇番
わ か あ ゆ 川 柳 会 松 本 は る み 報

求 芽 報

芳 香 一 歩 喜 楽 丹 吉 洛 醉

許してはならぬ九条つぶす案
案は無い出たとこ勝負どんとこい
秒読みにまだ思案する石一つ

改正案色鮮やかに軍事色
見た目より案外きつい嫁の口
バラ色のカルテ禁酒を許される

許すこと覚えて円くなる心
欠伸さえうかつに出来ぬ時の人
どうなんや好きか嫌いか手をとって

年金にすがりし糸が細くなる
中身より容器ほしさに買うグルメ
焦らずにゆっくり輸入決めてくれ

蛇とりのうまいあなたについてゆく
余生など気にしないよとたくましく
流行についてゆかないへソ曲り
流行歌わたしの思い出よみがえる
流行に飽きた女の真知子巻き
流行におくれまいぞと言う刺客
流行をきつりためている筆笥

富柳会

池

森子報

降り続く試練の雪を踏みつめる
シナリオを変えて度胸を試される
捨てる神拾う神ありそれでよし
人も街も老いて泥だらけの虹だ
ベント横付けで見回る葱畑
メールにはないときめきの封を切る
試行錯誤まだまだ諦めはしない
開花まで人それぞれの種を播く
目の前の誠一字と対峙する
だんだんと猫に似てきた妻の顔
わたくしと夫の間に置くベツト
鬼去った後の静寂星仰ぐ
甘言は一切聞かぬ冬の棚
とりとめのない話です著「膳
四季もなく生きた証を子に重ね
共生の森生き活きとふつふつと
ベツト国難民の子が目につかぶ
試みに君に意地悪したけれど
宇宙時代なれども老いの雪おろし
お互いのベツトなので共白髪

伸子 聖子 恵美子 好栄 博利 清泉 一慧 和子 淳司 紅紫朗 冬虹 鐘造 澄子 丹吉 和代 扶美代 初太郎 欣之 彦次 伸雄 已代一 隆彦 アキ 深雪 あかり

裏がわの不信を知っているベツト
昔話がつとも好きになつげの櫛
人間の器を試す雪しきり
合掌の手からこぼれる深い欲
海鳴りへ迷いの続く冬の靴
アングルの外に狙いの菓子があ
行く先を春の眼鏡に聞いてみる
吉来いと南南東を丸かぶり
機は熟し今一陣の風になる
試すのはよそう真つ直ぐな命

翠洋会

谷口

爪まるく切つて終止符打ちました
子育てが終ると爪も長くなり
足の爪細いヒールに堪えている
爪かたく元氣もろてる親子です
ビリでいきつと見つける残り福
通夜の席に残る人と会い
子供には美田残さずとは言えど
旅偲ぶ夫の残した玉椿
残照が彼岸桜の紅に映え
トラブルと聞けばわりこみたい私
悔い残し懲りず重ねて生きてゆく
トラブルを起して時の人である
子は親のトラブル姿みたくない
春ふわり一年生がくる門
春が来ていつそ淋しい車椅子
怒らない許す心を常に持ち
戻り寒バイオリズムが狂い出す

正典 信子 ひろこ 宏至 鬼焼 哲史 萩乃 高鷲 奏子 森子 義報 理恵 日の出 志華子 春 昭 舞夢 千梢 水昇 正雄 蕉子 すみ子 れんげ 叡子 捷也 恭昌 満作 美龍

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

赤色が一番好きな戦中派
ある日ふと視線が合つて赤い糸
赤ちゃんは女系男系関知せず
つましく生きて赤字のない暮らし
叱られておどおど尻尾下げるボチ
おどおどと静かに上る体重計
おどおどと態度に出てる自信なさ
おどおどとするからばれる摘み食い
今どきの猫は鼠におどおどし
おどおどして掴みそこねているチャンス
おどおどとしたジョーカー寄つてくる
人間の世界にもいる女王蟻
あそびか蟻に教えたキリギリス
生涯を蟻で通した父の汗
ひと休みしたいのいる蟻の列
蟻の列脇で二匹が呑む相談

尚士 桃花 孝一 富子 久峰 さと美 絹子 千歩 義報 照子 みつ子 敏 かつみ 章司 志洋 たけし 和夫 フジ 光男 いさお 泰子 みつこ 昭平 六平 惠勇 庸佑 猿杓

どんぐりよりゴルフボールの沈む池
分譲地池を殺して立つ幟
小さな池つくりメダカを飼っている
酒好きの夫が池を覗いてる
寒い冬凍った池を見て回る
禁猟の池だと鴨が動じない
何もかも許して白い骨になる
無駄骨を覚悟で走るのも男
こんなにも軽かったのか亡母の骨

南大阪川柳会

吉川

寿美報

手を置いたあなたの肩が杖がわり
私には心杖です頑固でも
窮すれば藁一本でも杖にする

類杖をつけば広がる小宇宙

ここからのドラマあなたの杖になる

現金を見てやる気湧くケンキンさ

現金で払えば気づく浪費癖

現金があつても出れぬホリエモン

現金の中で生きてる一円貨

現金へわたしの心非売品

薬より現金が効く病気でず

彼奴にはこれに限ると握らせる

現金な奴だ飲んだらもう寝てる

お金なら出どころなんか問いません

もの言わぬ女と過す差し向い

兄弟を他人にさせた遺産分け

ぎくしゃくが消えぬ甘栗むいてる

りつえ 一知 ヨシ枝 一壺 保江 ダン吉 美代子 重人 悦子 福世 千里 祥昭 雅文 奈々恵 奈津子 聡美 志華子 朝子 弘風 利昭 章久 (吉) 修 柳伸 遠野 直子 (棚) 修

肘鉄を覚悟で彼女の手を握る
冷たい手握りさすつてくれた友
手を握る母さんこれが最後かも
からくりを握れば闇がふかくなる
切り札を握っている目が笑う
握手する度に個性が消えてゆく
生き残るために敵とも手を握る
妻の手綱で程々に翔ぶもよし
人相に過去の軌跡が映つてる
そこそこの顔だが漫画にされる顔
挨拶も顔は覚えて名前出す
大きな鏡です美人が消えました

倉吉川柳会

竹信

照彦報

釣つて来た鮎は今夜の鮎のネタ
川柳のネタはないかと春の街
懐にピンチを救うネタがある
川柳のネタを拾ったバスポート
あの悪をやつたがネタがない
ネタを探しに用もないのに路地のぞく
ガセネタが国会議事録に載った
魅力ある姑でありたい薄化粧
魅力ある余生を送る策を練る
人間の個性が花となる魅力
白無垢の魅力一度きりの花
八十路来て今なお探す我が魅力
お互いに魅力無くても結ばれた
笑わせる魅力があつておそろしい
芽を出して繁つてやがて枯れてゆく

弘子 なきさ ダン吉 憲太郎 郁夫 栄子 楓楽 たもつ 東吉 萬的 弘泰 アキラ 幸子 鬼一 玲子 節子 瑞子 玲子 園喜美子 玲坊 きみ子 かつみ 龍枝 萩江 ゆり子 泰輔 螢 次男

雪を降らせ雪を解かして日が巡る
川柳で自然解凍される脳
古里のよしみ自然と出る詠り
文明の利器も自然に逆らえぬ
昂ぶれば自然に声も高くなる
美味しそう自然に笑みが溢れだす
自然減り熊いのししが家覗く
組紐の端を握っているあなた
三流が三人組んでビッグショー
カップルを撫でて通るの春の風
腕組んだメーデーの日の青い風
高下駄でやつとあなたと肩を組む
宝くじ組違いにも当たらない
取り組んで大恥かいた偽メール
魅力ある男になれぬままの春

あかつき川柳会

山本

柳昌報

木洩れ日の中で思案をふくらます
朝寝坊春の日差しが眩しくて
真冬日の日差しにエンドウが勇む
九条は春の日差しのようなもの
春の陽にもたれざんげを繰り返す
精一杯のなにもに燃えよと言われた
激励の声とともに聞くお腹の子
顔を見るだけでやる気が湧いてくる
激励のたびに私を見失う
激励のはやし過ぎるそなたのヤジ
アメリカの激励ろくなことがない
激励の熱いキッスに応えねば

完司 重忠 季芳 賀寿恵 京子 和枝 日出子 よしえ 石花菜 和枝 克枝 ひろこ 由紀子 満彦 照彦 紀乃 紀雄 祥昭 美花 喜八郎 美智子 蕉子 正 善純 重人

激励を背によちと初シューズ
貴方の激励で迷いふつきれる
ついでだから君の荷物も背負てやる
改革で負担は庶民ばかり増え
札束を背負う夢みて唄の中
家はなくローン背負つてどこへ行こ
憲法が背負つてくれた六〇年
天辺でキレイな嘘を背負わされ
帰り道忘れた母をおんぶする
責任を背負うて頭下げどおし
戦争を起さぬ願ひに託す
死ぬまでは元氣妻との合ことは
おひなさま三十路の娘嫁がせて
女です男が側にいてほしい
願わくば薔薇の根のその中に
この国の行く先案じ菜の花忌
スノボーをやつてみたいと喜寿登寿
青テント壊して何所へ行けと言ふ

城北川柳会

吉岡

柳昌
まつお
シマ子
鈍甲
良知
千鶴子
たよし
柳弘
生枝
修
勝久
たもつ
勝弘
一步
森子
富美
義
正坊
修報

七十路になつても明日を夢見てる
寒つばき残り僅かな命の賦
くされ縁結んだ糸がほどけない
絡みあいひとつになつてゆく絆
イメージを変えて静かにプロポーズ
イメージを壊す女優の著書
イメーヂを壊す女優の著書
拝まれて拝み返して逃げて来た
赤と白なむつまじく梅が咲き
妻に勝つ手品の稽古しています
右左往来まだ目的が見付からず
門灯が点いて賑わう影法師
マドンナの返事はいつもそのうちに
一本の葉にも縋りたい初日
午後一時手に持つ本が滑り落ち
やさしさが薬元氣を取りもどす
年金の範囲の中にボチがいる
普段着でいい無手勝流でいく
お節介それから先を聞きたがる
罪がない鳩や雀と仲良しで
嘘一つ仏の顔にしてくれる

サークル檸檬

吉田あずき報

東吉
志華子
倫子
朝子
桂作
一步
和夫
あやめ
福世
利昭
ルイ子
高栄
修
昭子
弘風
美智子
麗
春蘭
はじめ
達子
千里

何度でも身構え仕切り直しする
悪あがきするから足を拘われる
椅子一つ空けて春風待っている
同情のことは辛い一人鍋
つらい時だからがむしゃら突つ走る
財産の友が年ごと目減りする
つらいのは喜劇にします年の功
整理下手親に似た子を叱れない
川柳クラブわたの花 井尻
もう皆に忘れられてる誕生日
先のさき読んですり込む子の糞
そのうちにまた会おうねとそれつきり
やれやれと背を流し合うフルムーン
佳きことの楷書の墨のひとしづく
視点かえ違う景色で生きてみる
宣誓の球児の汗が弾み出す
糞する親の先生今どこに
誓つてトリノ世界の技は超レベル
春日差し亡母に似てきた影法師
台所母の糞が光つてる
好きな子が内緒でくれた花しおり
飲み放題妻はしつかり元をとる
ホーケキヨ春の幕開け弾み出す
奮発し買った9号それつきり
寄り添って生きる在所の温い風
やれやれの一本の酒よくまわり
絵手紙を画いては母に便りだし
脳のネジ緩みこぼれる勘違い

房
楓
扶美代
美籠
みつ子
光久
義子
あずき
民報
ミツ子
君枝
宏
一風
幸枝
晴美
俊子
浩三
(本)たえ子
(赤)妙子
ますみ
いつふみ
義明
ふりこ
知佐子
民
宏至
博子
八寿子

誕生日孫の笑顔に出す祝
また誓い破った近くて遠い国
悔い一つひとつ悔やんで背が伸びる
宝くじ筆筒貯金で夢を買う
ぴったりと答え合わせて得意顔

岩美川柳会

石谷美恵子報

目をつぶり腕を組んでも出ない知恵
娘と妻がぐるでこの僕困らせる
満足のいくまで食えぬダイエット
ジャンケンポンチョコばかり出すマツバガニ
ジャンケンに負けたか椿散って行く
グーチョコキパー反射神経試される
グーチョコキパー息があがつくるあいこ
リハビリに足の指でもグーチョコキパー
最初はグーで相手の腹を読んでいる
大根も土の中からグーチョコキパー
正論が後ろの席で泣いている
空席がわたしの胸にひとつある
人間の顔でカバンが席を取る
わが家には私の席はちゃんとある
相席のお国訛りが心地よい
極楽はまだ満席か沙汰がない
窓際の席でサインを出している
この国を援助したいが金がない
弱いもの虐めるよりも援助する
古里の援助で今日も生きています
サミットで笑ったつげに出す援助
さみの顔見たら援助がしなくなる

正春 耀一 はじむ 愛子 克美
蟹郎 孝男 公子 石花菜
重忠 睦子 一粹 幸枝
雅女 菖子 圭一郎 一瑤
たぬ 節子 裕子 一康
かつみ 完司 螢
一京 忠良 季芳

孫五人年金だけじゃ間に合わない
バアちゃんの援助の口はうるさ過ぎ
ジャンケンも籤も嫌いな蝸牛

岬川柳会

八十田洞庵報

博物館浅学の身ですぐ帰る
おだてられ今日も頑張る若作り
海の幸夕げにのって出る元氣
泥吐かすおだて上手な検事さん
少しずつど忘れ増えて笑い増え
溜息をもらして今日も探し物
友の輪が余白の日々を弾ませる
願望を託された絵馬思案する
黄門が本当に欲しい天下り
絵手紙の余白に一句筆の冴え
目が合うと吠えまくられる犬嫌い
老いだら浅い眠りの白昼夢
おだてられ天までのぼる豆の蔓
おだてられ立てば踊れの酒の席
おだてにも乗って陽気な君が好き
深みでも浅い気分でかわす知恵
生かされて独身通す八合目
マイペース独身貴族謳歌する
相性の悪さどちらも耐えている

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

持ち上げて孫に小遣せしめられ
雪国も土ばかばかとみな動く
卒業式羽ばたく笑顔も親も

稔 公乃 美恵子
とみ 富美子 洋子 蛙城
房枝 年子 みやこ
珠子 貞夫 令子 信博
洞庵 俣子 悦子 和美
桜琴 和香 里子 茂平

羽ばたいて幸せはこぶこうのとりの
次の五輪へ羽ばたいてる十五歳
千羽目の鶴が羽ばたき快癒する
ばかばかに追いかけられる雪の嵩
蛇口開け勿体無いが苦笑する
妻の留守苦笑している目玉焼
羽ばたきの記憶抱いてる古時計
春津軽そろそろ夜行性になる
カルテから羽ばたいてる退院日
叱られた子はそろそろと膝へ寄る
混浴の足湯に唸るふくろはき
春彼岸お墓を建てる話など
カーテンを揺らして西日通り抜け

むらくも川柳会

毛利

麦を踏む若芽が萌える里の春
深呼吸吸若芽の息吹き心地よい
若芽出る春のみぞれに身をすばめ
ふくらんだ若芽ついで鳥が来る
下積みを超えて若芽で出世する
まわる酔い桃源郷はなさない
水鏡おんなの誇り傷付けぬ
幸せは木のぬくもりのマイホーム
忘れず節分荒れて雪となる
春の夢私を若くしてくれ
お茶の友早春待ちて桜餅
鶯の初音に耳をそばたてる
四世代家族の心受く余生
年賀状なつかし友の顔浮かぶ

隼人 ヒサ子 愁女 順風 花匠 井蛙 銀波 黙人 花峯 慕情 一花 五楽庵 幸報 彰男 安男 英男 定子 幸 蘭水 瑞枝 俊夫 信夫 恵美子 ます美 秀子 喜美 寿

物忘れ今日より明日が多くなり
掛軸の犬も優しくとしおんな
八十歳精一杯の手を伸ばす
お日様の死角で霜が拗ねている

川柳塔打吹

野口

節子報

美保
昭子
嘉寿子
秀夫

朝霧に秘めごと一つとじこめる
胸の霧旅に振り捨て風通す

霧かかる頭をかかえ生きている
年のせい眼にも霧にもかかり

やる気出せ春だ春だと指を折る
家中で犬が一番やる気ある

団塊の世代やる気で生きてきた
やる気さえあれば崖でもよじ登る

パニックの脳にやる気は課せられぬ
手のくぼみ母のやる気を抱きしめる

趣味悠々ミニ盆栽に凝っている
どうしよう揃ひひよつこ面で幕が開く

二次会は二時間ほつきりお開きに
紅白の幕はのぞいて見たくなる

煙幕を張って浮気の跡を消す
嫁が来て姑の役幕あがる

幕上がり茄子とかぼちゃが勢揃い
二幕目は人間らしく鉄を持つ

幕が開くわかれタラの芽山椒の芽
栄光に一番遠い位置にいる

栄光のメダル無縁の日が暮れる
栄光は過酷僅差の涙のむ

栄光と奈落の底はあみだくじ
滋

栄光の夢を支えたのは内助
栄光を夢みた指の胼胝がある

栄光のジャンプを決めた向い風
荻坊主栄光欲しく上を向く

金メダルたつたひとつと言っなけれ
働かず飲む栄光の日々である

栄光は遠くさんまを焼いている
川柳ねやがわ

突然の客に慌てる乱れ髪
客寄せのパンダと知つてする手品

客間から居間寢室に早変わり
夜泣きの子おおい拙なさ詫びた日も

拙なさにペールかぶせて卒寿坂
飛ばしたいのにバトカーが離れない

連れ添うて今日は記念日月見そば
地味な街奈良には鹿と仏たち

地味でタフ頼り甲斐ある女房です
地味な人生通し損したことがない

地味な服おしゃれに見せるいい笑顔
服装は地味にまとめて隙がない

地味に生き小金さつちり貯めている
年金は地味に暮らせという御触れ

回り道したコツコツへ灯のともり
二人とも地味な擬態で風のまま

年金の幅でちびちびやってます
八十路過ぎ夢中になれるものがある

夢中であなたのホクロ見えません
見送つて夢中の介護読み返し

幸子
重忠
勝憲
和枝

節子
完司
玲坊

節子
とし子
勇太朗
日出子

茜
一笑
弘一
鈍甲

九好
修
たもつ
忠央

庸佑
博泉
麗
一風

たよし
仁清
あやめ
典子

かすみ

そば打ちに夢中でやがて店を出す
恋人よ夢みる夢中でいて欲しい
あの頃の夢中を思いうち落椿
愛一途夢中にさせた人は今
手と手と手介護の温み伝えたい
この世から嘘が消えたら味けない
ジーンパンの穴の言い分聞いてやる
ほころびを隠してくれた優しい手
小さな嘘積み重なって鈍い足
梅ちらほら天守の顔もほころびる

豊中もくせい川柳会

江見

見清報

風見鶏自由に向けぬのが不満
失つて何より惜しいのは若さ

さようならどうぞ好きになさいませ
老いるのを忘れ喜ぶ子の成長

学校に行かぬ自由もあるそうなの
平凡な暮しどこにも敵がない

春ですよふと口ずさむ恋の唄
嘘ひとつずばりと見抜く妻の勘

リハビリにイナバウアーを試す妻
元氣そうと声の大きき評価され

嘘つかぬ土の芽吹きを待つ軍手
ずばり言う癖が招いた四面楚歌

産室に響く産声皆笑顔
失うた自分探しの旅に出る

あの時のずばりが効いて立ち直り
勝つ事が正義の国に出た誤審

自由にはなつたが何をして遊ば

さち子
桂作
朝子
柳弘

てまり
高栄
郁夫
寅幸

亜成
洋

庸佑
正坊
重栄
高生

啓子
慶子
和子
早人

則彦
肋骨
美義
幸雀

知香子
郁子
石舟
寅次郎

月子

味自慢お世辞はいらぬ茹す南瓜

ソプラノの妻と喧嘩をして疲れ

桃源から聴えてきます童歌

高飛車に出られ自分を見失う

ペランダで満月仰ぐ狭い空

ジーパンの穴から若い笑い声

見出しほど菌切れよくない週刊誌

つくしん坊聞えてますか春の声

束縛が嬉しい時もありました

偉そうに怒鳴って妻に言い負ける

盆梅の百年の自由しほり上げ

一日をありがたく生き夜の雨

川柳さんだ

北野

哲男報

旅支度葉の場所がある鞆

夫よりくすりに元氣貰つてゐる

葉よりよく効く君の笑い顔

わたくしに万葉集は妻の笑み

待ちかねた春に財布がやせ細る

五線譜から飛び出し跳る春日覚め

前向きに生きるタクトを振っている

方言の一つで和み笑み誘う

柔らかいまなざし情が憐れみか

芯少し残しておこうわたし流

いかなこの釘煮をあてに春を飲み

万歩計春をみつめて立ち止まる

忙しい時に桜が咲いている

一言も喋らず新聞売れる駅

その人のドラマを知った葬儀場

満春巳

見清

玲子

萬的

タミ

比ろ志

求芽

勇治

夢

尚士

都代子

寿美子

開子

忠

章子

光久

キヨミ

雅司

順子

宣子

二英

紀乃

朋月

歳子

正和

哲男

藤朗

川柳藤井寺

高田美代子報

ずんずん春の野山が騒がしい

大阪に春の訪れ大相撲

決心をにぶらす春の甘い風

猫やなぎ春ですよと顔そろえ

枯草の中にみつけたみどりの芽

まだ燃える炎を抱いて春を待つ

梅の花時期心得三分咲き

春うらふつと背伸びがしたくなる

ひかえ目な妻が浮かれた春の風

早春の満月天井より吊す

荷物にはならぬキャッシュでくれますか

荷崩れがしそつ特価日の自転車

調子よい安請合いの荷が重い

重たいなあ腹の荷物背の荷物

九条が重荷になってきた安保

自分から背負った荷物に溺れてる

お荷物だが辞めると困る天下り

次世代の肩にすしりとくる介護

故郷の荷に乗ってくる親ごころ

靖国の重荷背負うて次期総理

あてもなくフワフワとゆくシャボン玉

あちこちでふわり蕾は春の使者

ふわり浮く風船に夢託したい

ふわふわと地球を踏んで生きている

崖つ縁へふわり女神が舞い下りる

天国の地獄だふわりふわり酒

空飛ぶじゅうたんで会いに来たんだね

みつこ

真一

志洋

栄一

絹歌

鐘造

登志子

重人

瑠美子

半蔵門

六點

シルク

史郎

淳司

恵勇

アヤ子

耕策

扶美代

龍一

かつみ

春蘭

喜代子

静子

悦子

進

葉

一筒

天界へふわり奈落へ真つ逆様
風船はフワリと飛んで星になり
ふわりふわふわ私はい誰ですか

川柳エスボ

山本

三郎報

百までは生きると母は夢語る

幸せは目の前にある青い鳥

あの人と夢で逢いたやいま一度

夢だとは想いたくないこの事実

背負う荷が有るから明日へ夢が湧く

客来れば仮面を被る夫婦仲

盲導犬人間よりも慈愛の瞳

叶うなら夢の続きにもどりたい

水銀の玉が張つて欲の皮

犬医者に通うお金は惜まない

足音を待つてくれる犬がいる

ひとり居の母元気づける犬が

愛犬に留守居頼れる年の暮れ

猛犬注意貼つて女の高軒

門松もおせもいらんアンタだけ

犬の散歩されているやらしてるやら

犬猫は飼えぬ団地で犬が鳴く

ああ敗戦廃虚に野菊今はビル

風を避けハードル下げて跳ぶ余生

病癒え新たな命へジャンプする

蛙でも出来た私も夢持とう

人送る悲しみ知らず菊香る

戌年を元気に駆けて生きようぞ

鐘三つ盲導犬の力借り

光男
昭子
美子

三郎

文好

任宥

昭一朗

さとし

恵美子

三枝

ゆき子

ただよし

高栄

星花

一幸

晚翔

とし子

よねぞう

鈍甲

さち子

団地

れい子

みさと

とよ子

一炊

ルイ子

はつよ

赤信号主人の側で犬も待つ

ロース川柳会

山崎

君子報

一步

亡母に逢い友の自慢してる夢
難しまうまた会える日のありやなし

キク子
みつ子

ゆずる娘もなくていとしい雛の顔
春彼岸墓参を兼ねて花見する

哲子
トミエ

雛の寿司三日おくれで娘を祝う
無口のバラボクの日記に入り込む

貴代子
孝一

花一輪生きる力をくれました
ひなさまの前ですなおになつて

美籠
いわゑ

野の花でよし町仏と春語り合う
遅い春捜しに町の花屋まで

武庫坊
年代

大根の花終わるまで白く輝けり
今日の客花が助けるおもてなし

義子
君子

残照を求め傘寿のひとり旅

てる

堺川柳会

河内

月子報

油物ダメと言われて欲しくなり
飼い主より立派な髭の猫である

春蘭
潤子

姑には関白ですと立てている
名門のシェフの好物昆布茶漬け

恵勇
公誠

トップに立つて風除けにされている
馬鹿にした減塩食がこ馳走に

幸雀
日の出

台所ピカピカ料理しない嫁
しばらくは目で食べているふく料理

舞夢
仲子

私の祖先に料理下手がいる
若者の唄を時々歌ってる

扶美代
篤子

器褒め料理を褒めて食べ残し

鐘造

原稿募集 (同人)

○エッセー 本文で20字×70行(14000字)
○ひとこと 本文で15字×20行(3000字)
(この欄は誌友歓迎)
共にタイトルは別につけて下さい。
○柳界展望に掲載希望の記事(字数不問)
ただし原稿の採否、添削、掲載号につ
いては編集部に一任して下さい。

編集部

顔だけで縁者と分かるでかい鼻
ボクの歌気の毒そうに手を叩く
釣書には趣味は料理とあったはず
あれくらいなら俺だつて歌えるサ
枯れてなおエネルギッシュに出て歩き
料理より酒はまだかとお父さん
カリスマのエリートに無いデリカシー
料理好きどんどん増える皿の数
まだ役に立つこともある古タオル
自分への自分で歌う応援歌
豆腐にも百の料理があるなんて
弁が立つ男も妻の勘に負け
金かけた男料理のうまいこと
無理矢理にうまいと言わす父の蕎麦
夕ごはんちよこちよここと二人分
世の中を細木数子が料理する
簡単なメニューを更に手抜きする
キッチンを変えても母は着転がし
殿方を料理おまかせなさいませ

像山
時雄
和夫
千代
文
さくら
八千代
なぎさ
みつこ
萌
深雪
りつえ
冬虹
好
よりこ
梓
半銭
つづや

竹原川柳会創立五十周年記念川柳大会

日時 8月27日(日) 午前9時開場
会場 たけはら美術館文化創造ホール
広島県竹原市中央五丁目 竹原合同庁舎内

(JR呉線 竹原駅下車 徒歩7分)
会費 二千元(昼食・発表誌)

宿題と選者(欠席投句拝辞)
「酒」 鳥取県 新家 完司選
「愛」 茨木市 弘津秋の子選
「念」 岡山県 石部 明選
「歩」 摂津市 森中恵美子選
「蟹」 堺市 河内 天笑選

出句締切11時半 各題2句 席題なし 投句拝辞
特別課題「草」大竹市 弘兼 秀子選
事前投句(はがきう)通記。7月31日必着

宿泊 希望の方は7月31日までに要連絡
竹原駅から車で10分。温泉有り。

☆ジュニアの部(小・中学生)
「海」 鳥取市 中原 諷人選

事前投句のみ。一人一句。7月31日必着。無料。
事前投句及び連絡先 小島 蘭幸 宛
〒755-0022 竹原市本町一丁目14-3
TEL・FAX 0846-222-6626

主催 竹原川柳会

柳界展望

た「怒りの川柳」は145
1句が寄せられ、47句が入
賞3月14日表彰された。

〈大賞〉

利子よりも高い切手で来
た通知 北野 哲男

〈佳作〉

久保田千代 石原歳子

☆第24回鳥取県没句川柳供
養大会は、12月11日全労災
ビルで162名の参加を得て開
催された。

〈総合成績〉2位―倉益一

瑞 5位―盛田夢路 7位

―夏目一粋 10位―山下節

子

〈天位〉

見栄張った手の内一人相

撲とる 夏目 一粋

天皇でなくて良かったつ

まみ食い 堀 寛子

☆兵庫高齢・退職者第12回

川柳祭典受賞句

〈兵庫高齢・

退職者連合会長賞〉

襷を解いて見送る春の海

門谷たず子

☆赤穂商工会議所が募集し

○3月10日付読売新聞「編
集手帳」に、路郎師の「人
類は悲しからずや右派と左
派」が紹介された。

○集英社刊「田辺聖子全集
19」に添付の月報（200
6年3月号）に「好きやね
ん大阪」と題して座談会が
掲載された。田辺聖子先生
を囲んで、坪内稔典氏司会、
森中恵美子・前川千津子・
赤松ますみさんと楓楽副理
事長が参加した。

○本誌表紙のきり絵作家、
前田尋先生は、3月18日、
23日神戸市中央区トアギヤ
ラリーで「前田尋きり絵展」
を開催された。

○久谷まこと氏（同人・出
雲市）より長年の指導の御
礼として金一封拝受。

○堀良江さん（同人・茨木
市）より長年の御礼として
金一封拝受。

▽柳界往来△

▽芳志御礼△

▽訂正お詫び△

3月号113頁2段目、泣い
て泣いた

常任理事会4月8日出席
者20名 ①役員に関する規
定・規則についての検討

②950号誌上大会経過報告・
作業日程・作業方法等

③12回川柳塔まつり日程他

④各欄選者交替の件（来月
までに準備のこと）

⑤新

同人承認3名

⑥その他

次回5月8日13・30

アウイナ大阪

新同人紹介

片山 忠
かた やま ちゅう

「たもつ・美龍・哲男推薦

山田 婦美子
やま だ ふみこ

「たもつ・美龍・哲男推薦

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 わかやま	14日(日)午後1時から 大地・緑・キープ・ 「どこ(何処)」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
もくせい 川 柳 会	15日(月)午後1時から 止める・年金・だんだん 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
高槻川柳 サークル 卯 の 花	18日(木)午後1時半締め切り 万歩計・本気・こっそり・ 歩く・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1118 高槻市奥天神町1-26-17 瀧本きよし
岸 和 田 川 柳 会	20日(土)午後1時半から 穴場・居直る・鰻・幼い	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川 柳 ねやがわ	21日(日) 正 午 から 踊る・避ける・ハンドル・ 自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	21日(日)午後1時半締め切り 矢・ネクタイ・決める	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川 柳 藤 井 寺	21日(日)午後2時15分締め切り 号・怖い	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公園1-105 高田美代子
川 柳 塔 みぞくち	22日(月)午後7時半から ドラマ・山・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口1757-3 小西雄々
南 大 阪 川 柳 会	23日(火)午後6時半締め切り おじ(おば)・しなやか・ 見つける・秘密	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	26日(金)午前9時半から 面影・勘・迷う・うっとり	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川 柳 同 好 会	27日(土)午後6時から 眠る・テスト・旅・大奥	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳 会	28日(日)午後1時から 当たる・ぐるぐる・リボン・ 「一流」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	28日(日)午後1時から 異変・ニート・達人	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京 都 塔 の 会	31日(水) 吟 行 当日雑感・声・挟む・天使	5月号(P.103参照) 申し込みは5月20日までに 都倉求芽 宛

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

5 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	5 日(金)午後 2 時締め切り 渋い・慌てる・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
城 北 川 柳 会	6 日(土)午後 1 時半締め切り 曲線・嗅ぐ・ポリシー・自由吟	旭区 老人福祉センター 3 F 地下鉄千林大宮駅 3 番出口の左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富 柳 会	6 日(土)午後 1 時から 自動・それほど・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	6 日(土)午後 1 時から 面倒・花・好き	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
西宮北口 川 柳 会	8 日(月)午後 1 時から やましい・都合・拍手・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市岡度町2-19-515 山本義子
川 柳 塔 唐 津	8 日(月)午後 1 時半から 逢う・貝・いのち	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	9 日(火)午後 1 時から 反抗・スイッチ・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
ほ たる 川 柳 同 好 会	9 日(火)午後 1 時から 鼓動・打つ・ずっと	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル 5 F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川 柳 塔 な ら	11 日(木)午後 1 時から 爽やか・緑・ランチ	奈良市立中央公民館 4 F (近鉄奈良④出口徒歩 5 分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
堺川柳会	13 日(土)午後 1 時から 別(共選)・弱い さ・つ・き(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 打 吹	13 日(土)午後 1 時から 楽・しびれる・握る	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川 柳 塔 ま つ え	13 日(土)午後 2 時締め切り 話題・柱・言い訳・選ぶ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崙丘
川 柳 塔 みちのく	13 日(土)午後 4 時から 誤算・目覚める・おだやか	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2 階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉宮元53-1 小寺花峯
八尾市民 川 柳 会	14 日(日)午後 1 時から オペラ・泡・動く・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生

編集後記

☆「川柳塔」90号記念誌上大会には多くの方にご参加いただき、厚く御礼申し上げます。7月号の発表を楽しみにして下さい。

☆5月の第2日曜日は母の日。元来は母親が健在の人は赤、亡くなった人は白のカーネーションを一本胸につけ、感謝の気持ちを表わす日であった。その習慣はアメリカで始まり大正時代に日本に伝わったが、ほとんど受け入れられなかった。

☆戦後、胸につけるのではなく、母親にプレゼントする形で日本に浸透したが、これはデパートや花屋の宣伝が実を結んで広まったもの。プレゼントするものさることながら、母親への感謝の日という原点に立ち戻りたいものである。「母の日の軽い魔法がまだ解けず

に悪影響を及ぼすようにな

った。肌あれ(しみ・皺・そばかす等)はもとより、皮膚癌発症の原因になるという。10時から14時までが最も強いので十分にガードして下さい。

(小出智子)

否定と肯定

動詞の題詠ではほとんどの場合終止形で出題される。例えば「歌う」。しかしこの題で

テロの世にカナリアはもう歌わない

のように否定形の句を提出すると選者によっては無視か没にされるらしい。不思議なことである。

否定形は「歌う」という肯定の題意に反するという理由らしいが形容詞の否定形とは異なり、動詞

の場合はその否定形も含めた活用形全部を認めるべきだと思ふ。

カナリアが歌えばはく胸も春歌おうよ春の芽はほら音符だよ

などの場合の「歌えば」とか「歌おうよ」もまだ歌っている状況ではない。とすれば否定形だけを否定するのはおかしいのではないで

しょうか。つまり動詞の場合、否定形の句も肯定していただきたいと思う次第。第一いままで動詞の否定形で出題されたことがあるだろうか。

(水野 黒兎)

○京都の洛北大原の里の老人施設にお世話になって

る母を訪ねるようになって三年目、道中には桜の名所が数か所ある。中でも出町

柳近辺は加茂川沿いに、柳と桜と交互に植えてあり緑と

ピンクの鮮やかな色合いが不思議に調和して目を楽しませてくれる。

見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける

○この施設に暮らすことが母の意思ではなく、半分は成り行き、半分は私の意思(もちろん良かれと思い)で決めたことへのうしろめたさから、なるべく繁々と通い、ついでに道中の京の四季を楽しむ事している。

○車椅子の母と今年もお花見をすることができた。来年も母に変わりになく桜の季節が訪れるのだろうか。私の心配をよそにすつかり子供に返っている九十七歳の母に、時々意地悪な質問をしてみる「家に帰りたい?」と聞くと「えっわたしお嫁にいくの?」と笑わせてくれる。

九十七歳童女のような笑みにあう

(希)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

」発表(7月号)地名

都府道市
県
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202



檸檬抄投句用紙

「 隣 」 （5月15日締切）

7月号発表

藤田 泰子 選 — 共選 — 仁部 四郎 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
県道府

姓
雅号

地名

市都
県道府

姓
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者	☐ ☐
	〒 —	 		年 年
	月 月 から から 一 半 年 年 9 5 8 0 0 0 0 円 0 円 0 円			

該当の方に○をつけて下さい

〒545-0005

大阪市阿倍野区三木町2-10-16
 川柳塔社 (電話) 06-6629-6914
 振替 00980-5-33368

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



作品募集

初歩教室
一路集 (3句)
「いのち」
「ガラス」(3句)
三宅保州担当

檸檬抄 (2句)
「逢う」
「貝」
神夏磯典子選

檸檬抄 (2句)
「隣」
藤田泰子選

愛染帖 (3句)
新部四郎共選

水煙抄 (8句)
板尾岳司選

川柳塔 (8句)
河内天笑選

7月号発表 (5月15日締切)

8月号
檸檬抄「引く」
一路集「ポーズ」「紙」
「投げる」
初歩教室「ごろごろ」

本社5月句会

とき 5月8日(月) 午後5時半開場・6時半締切り
開催時間、締切り時間に御注意下さい。
ところ アウイナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電話06・6772・1441

おはなし
兼題「赤」
「知る」
「タツチ」
「悟る」
「火」

席題 1題 当日発表 (各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

板尾岳人選
志田千代選
津守柳伸選
藤田泰子選
鶴田遠野選
河内天笑選

本社6月句会

7日(水) 午後5時半から
兼題「つんつん」「降る」「待つ」
「テープ」「顔」

第24年度 夜市川柳募集

第12回「浮く」小島蘭幸選
ハガキに3句 5月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌級込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙級込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料84円)
半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)
二〇〇六年(平成十八年)五月一日発行
発行人 河内権治
編集人 西出楓楽
印刷所 美研アート
〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二〇一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所 川柳塔社
電話 〇六六二九一六九一四番
振替 〇〇九八〇一五三三六八番

第30回 全日本川柳2006年岩手大会

日時 六月十一日(日) 午前十時開場
会場 岩手県花巻温泉ホテル千秋閣

〒〇五〇〇〇四 花巻市湯本第一地割二二五

TEL 〇一九八(三七) 二二五〇

宿題 第一部 締め切りました

第二部(当日投句、十一時十分締切)

「もてなす」 ふじむらみどり 選

「鬼」 森中 恵美子 選

「匠」 大野 風 柳 選

各題二句当日配布の句箋に記入

第二次選者

磯野いさむ・植木 利衛・塩見 草映

福岡 竜雄・米島 暁子

会費 四、〇〇〇円(昼食、記念品含む)

表彰 文部科学大臣賞・参議院議長賞・川柳大賞・

大会賞 ジュニア部門は賞状とメダルを予定

問い合わせ先

〒〇二八三三〇九 岩手県紫波郡紫波町北日詰

大日堂十八一二

熊岳岳朗方 日川協岩手大会事務局宛

TEL・FAX 〇一九(六七六) 三七五一

*

(社)全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ
全日本川柳岩手大会実行委員長 佐藤 岳俊

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail: bikenart@wonder.ocn.ne.jp